有岡城跡·伊丹郷町Ⅱ

都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う発掘調査報告(1)

1997年

兵庫県教育委員会

有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ

都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う発掘調査報告(1)

有岡城跡·伊丹郷町Ⅱ

例 言

- 1.この報告書は、都市計画道路伊丹飛行場線の道路改良工事に伴い発掘調査を行った、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は昭和63年3月から平成5年2月までの間に、兵庫県教育委員会が5次にわたる調査を実施した。

各調査次の担当者は下記のとおりである。

昭和62年度(第60次) : 岡崎正雄・市橋重喜

昭和63年度(第75次) : 小川良太・村上泰樹

平成元年度(第84次) : 村上賢治・別府洋二

平成3年度(第99次) :平田博幸・藤田 淳

平成4年度(第114次):岡崎正雄・西口圭介

なお、調査次番は伊丹市教育委員会等で継続的に実施している同遺跡の調査次番と一連のものとなっている。

- 3. 本報告書において使用する25,000分の1地形図は、国土地理院刊行の「伊丹」を使用し、調査区の位置図等の詳細な図面については兵庫県西宮土木事務所作成の工事計画図を原図として利用した。また、遺構図・調査区平面図等については、各調査担当者が現地で実測を行った。
- 4. 報告書内に掲載した関連の古絵地のうち、「天保十五年伊丹郷町分間絵図」は武田政義氏の、 その他のものに関しては伊丹市立博物館の許可を頂き掲載した。
- 5. また、解説絵図については、伊丹市博物館刊行の『伊丹古絵図集成』(本編)伊丹資料叢書 6 から転載させて頂いた。
- 6. 本報告書刊行に伴う整理事業は、平成4年度・6年度・7年度と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において行い、同8年度に整理普及班・甲斐昭光の事業管理の元に最終作業を行い刊行したものである。執筆・編集は各調査担当者が行い、資料の整理作業は、嘱託職員の中筋貴美子・宮田麻子・岡田依理子・矢島 馨・本窪田英子・香川フジ子・石田裕子・西野淳子・蓬莱洋子・佐伯純子・庄山郁子・川上 緑・島村順子・高嶋美和・岡田美穂・松下えりなで行った。
- 7. ここに使用した遺物出土状況写真・遺構写真の撮影は各調査担当者が現地において行い、整理 後の遺物の真撮影を、平成6年度は株式会社衣川と㈱サンスタジオに、平成7年度は株式会社 吉田カメラ商会に委託して行った。
- 8. 出土した鉄器については当調査事務所の加古千恵子の指示の元、嘱託職員の和田寿佐子・横山 麻子・田中 葉が保存処理を行った。
- 9. 遺物をはじめ、記録保存に伴う図面・写真はすべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。

本 文 目 次

第	I 章	
	第1節	調査に至る経過 —————
	第2節	歴史的背景 ————————————————————————————————————
	第3節	調査の概要
第	Ⅱ章	
	第1節	確認調査(第60次調査) ————
	第2節	第84次調査の遺構
	第3節	第75次調査の遺構
	第4節	第99次調査の遺構
	第5節	第114次調査の遺構
第	Ⅲ章	
	第1節	第84次調査の遺物
	第2節	第75次調査の遺物
	第3節	第99次調査の遺物
	第4節	第114次調査の遺物
	第5節	出土の金属器
	第6節	出土の木器
	まとめり	こかえて

挿 図 目 次

第1図:調査区周辺概地形図 — 3 P 第5図:第75次調査区出土漆器 — 61 P 第2図:調査区周辺等高線図 — 4 P 第6図:絵図にみる調査区周辺図 — 64 P 第3図:調査区周辺遺跡分布図 — 6 P 第7図:屋敷地境を示す遺構 — 66 P 第4図:各調査区位置図 — 7 P 第8図:昭和初期の町並み — 67 P

表 目 次

表 1 : 周辺遺跡地名表 — 5 P 表 5 : 第114次調査出土遺物観察表 57 P 表 2 : 第84次調査出土遺物観察表 — 35 P 表 6 : 金属器出土遺構一覧表 — 59 P 表 3 : 第75次調査出土遺物観察表 — 40 P 表 7 : 銅銭一覧表 — 62 P

表 4 : 第99次調査出土遺物観察表 - 50 P

図 版 目 次

確認調査に伴う遺構

図版1:位置図とトレンチ配置図 図版3:土層断面図

図版2:平面図および土層断面図

第84次調査に伴う遺構

図版4:遺構配置図 図版10:埋桶遺構図1

図版5:堀と調査区北壁断面図 図版11:埋桶遺構図2

図版 6:溝 3 遺構図 図版12:埋桶遺構図 3

図版7:各井戸遺構図1 図版13:埋桶遺構図4

図版8:各井戸遺構図2 図版14:土坑47遺構図

図版9:埋甕遺構図

第75次調査に伴う遺構

図版15:遺構配置図1 図版20:竃遺構図2

図版16:遺構配置図2 図版21:竃遺構図3

図版17:溝・礎石建物遺構図 図版22:胞衣壺・水琴窟遺構図

図版18:井戸遺構図 図版23:埋甕・土坑遺構図1

図版19:竃遺構図 1 図版24:埋桶・土坑遺構図

第99次調査に伴う遺構

図版25:遺構配置図

図版28: 埋桶断面図

図版26: 埋甕遺構図・埋桶遺構図1

図版29:池状遺構遺構図

図版27: 埋桶遺構図2

第114次調査に伴う遺構

図版30:遺構配置図

図版33:各井戸遺構図

図版31:遺構配置詳細図

図版34: 竈遺構図・胞衣壺埋納遺構図

図版32:各溝遺構図

図版35:各埋桶遺構図・各土坑遺構図

第84次調査に伴う遺物

図版36:出土土器1

図版38:出土土器3

図版37:出土土器2

図版39:出土土器4

第75次調査に伴う遺物

図版40:出土土器5

図版45:出土土器10

図版41:出土土器6

図版46:出土土器11

図版42:出土土器7

図版47:出土土器12

図版43:出土土器8

図版48:出土土器13

図版44:出土土器9

図版49:出土土器14

第99次調査に伴う遺物

図版50:出土土器15

図版53:出土土器18

図版51:出土土器16

図版54:出土土器19

図版52:出土土器17

図版55:出土土器20

第114次調査に伴う遺物

図版56:出土土器21

図版58:出土土器23

図版57:出土土器22

図版59:出土土器24

各調査次出土の金属器

図版60:各調査区出土金属器

図版62:第99次·第114次調查出土銅銭

図版61:第75次・第84次調査出土銅銭

遺構図

図版63:遺構配置全図

各絵図解説図

図版64: 寛文 9 年伊丹郷町絵図解説図 図版67: 天保15年伊丹郷町分間絵図

図版65:寛政8年伊丹細見図解説図解説図解説図

図版66:文化改正伊丹之図解説図 図版68:明治6年伊丹郷町地引絵図

解説図

カラー写真目次

カラー図版1:寛文9年伊丹郷町絵図 カラー図版4:天保15年伊丹郷町分間

カラー図版 2 :寛政 8 年伊丹細見図 絵図

カラー図版3:文化改正伊丹之図 カラー図版5:明治6年伊丹郷町地引

絵図

写真図版目次

調査区周辺

図版1:全:伊丹郷町遺跡周辺空中写真 図版2:上:昭和62年頃の昆陽口通り

(東から)

中:75次調査区と調査域全景

(西から)

下:調査区の現状 [平成9年]

(西から)

確認調査

図版 3 : 左上 1 : 調査前遠景(AI·A2·BI·B2) 図版 4 : 左上 1 : A 5 トレンチ(東から)

左上2:調査後遠景(A1·A2·B1·B2) 左上2:A6トレンチ(西から)

左上3:調査後遠景(A3·A4·B3·B4) 左上3:B1トレンチ(東から)

左上4:調査後遠景(A5·A6·B5·B6) 左上4:B2トレンチ(東から)

右上1:B3トレンチ(東から)

右上2:B5トレンチ(東から)

右上3:B6トレンチ(西から)

右上4:出土遺物 I

右上5:出土遺物Ⅱ

右上1:A1トレンチ(東から)

右上2:A2トレンチ(西から) 右上3:A3トレンチ(東から)

右上4:A4トレンチ(西から)

左上5:作業状況

第84次調査の遺構

図版5:上:調査区全景

中:堀近景

下:堀近景(東から)

図版 6 : 上: 堀内北壁土層断面

(南東から)

中:堀内南壁土層断面(北から)

下:井戸4 (西から)

図版7:上:溝3石列除夫(南から)

中:溝1・2東側石列

下:調査区全景(東から)

図版8:上:調查区西側埋甕群

(北から)

中:埋桶4(西から)

下:土坑47(南から)

第75次調査の遺構

図版9:上:調査区全景(南から)

中:調査区東半部(北から)

下:調査区西半部(北から)

図版10:上:溝3石列(南東から)

中:建物址1 (北から)

下:建物址2 (北から)

図版11:上:井戸1瓦積み井側検出状況

中:同上井側下部石材検出状況

(東から)

下:同上石材の組合わせ状況

(東から)

図版12:上:井戸3瓦積み井側検出状況

(西から)

中:同上井側下部石材・瓦積み

状況 (東から)

下:同上石材据付けのための掘

込み(東から)

図版13: 上: 筆1 (東から)

中:同上下面(東から)

下:竃1-1埋土土層断面

(北から)

図版14:上:同上ブロック積み状況

(東から)

中:竃1-1ブロック積み状況

と上屋に伴う柱穴(北から)

下左:竃1-1埋土内出土漆器椀

下右: 竃1-2煙道部

図版15:上:竈1-2 (東から)

中: 竈2 (東から)

下:竈3 (東から)

図版16:上:胞衣壺半裁状況(北から)

中:胞衣壺 2·3·4半裁状況

(西から)

下:埋甕9・10・11 (東から)

(東から) 図版17:上:水琴窟12 (東南から)

中:水琴窟13(西から)

下:水琴窟14

図版18:上:埋桶1・2・3 (東から)

中左:埋桶1検出状況

(北から)

中右: 埋桶 2 検出状況

(東から)

下左:埋桶4半裁状況

(南から)

下右: 埋桶7 半裁状況

(東から)

図版19:上左:埋桶8(西から)

上右:埋桶9半裁状況(北から)

中:埋桶10半裁状況(東から)

下:井戸13遺物出土状況

(北から)

図版20:上:土坑8漆喰検出状況

(北から)

中:土坑101(東から)

下:同上断割り状況(東から)

第99次調査の遺構

図版21: 上:調査区全景(北西から) 図版24: 上:調査区南西部埋桶群

下:調査区近景(北から) (南から)

図版22:上:調査区中央部 (東から) 下:埋桶66·100·101 (北から)

下:建物址1礎石(西から) 図版25:上:埋桶82内土器出土状況

図版23: 上1左: 埋甕1平面 中: 埋桶62~64

上 1 右:埋甕 2 下:埋桶64内遺物出土状況

上 2 左:埋甕 1 断割り状況 図版26:上1左:埋桶12

上 3 左: 埋甕 5 · 6 上 2 左: 埋桶 100

上3右:池状遺構内伏甕 上2右:埋桶101

下:埋甕82·89 上3:埋桶103·106

下:防空壕3・4

上1右:埋桶75

第114次調査の遺構

上2右:埋甕3

図版27:上:第1面検出状況(南から) 図版30:上:溝08検出状況(西から)

下:第2面検出状況(北から) 中:同上細部(東側)

図版28:上:第2面の遺構(南半部) 下:同上細部(西側)

中:第2面の遺構(中央部) 図版31:上:井戸02(瓦井戸)

下:第2面の遺構(北半部) 中:井戸35 (素掘り井戸)

図版29:上:建物基礎および胞衣壷 下:井戸39 (素掘り井戸)

検出状況(南から)

中:胞衣壷検出状況

下:竈の状況(北から)

第84次調査の遺物

図版32:出土の土器1 図版34:出土の土器3

図版33:出土の土器2

第75次調査の遺物

図版35:出土の土器1 図版41:出土の土器7

図版36:出土の土器2 図版42:出土の土器8

図版37:出土の土器3 図版43:出土の土器9

図版38:出土の土器4 図版44:出土の土器10

図版39:出土の土器5 図版45:出土の土器11

図版40:出土の土器6 図版46:出土の土器12

図版47:出土の土器13

図版48:出土の土器14

図版49:出土の土器15

図版50:出土の土器16

図版51:出土の土器17

図版52:出土の土器18

第99次調査の遺物

図版53:出土の土器1

図版54:出土の土器2

図版55:出土の土器3

図版56:出土の土器4

図版57:出土の土器5

図版58:出土の土器6

図版59:出土の土器7

図版60:出土の土器8

図版61:出土の土器9

第114次調査の遺物

図版62:出土の土器1

図版63:出土の土器2

金属器

図版64:出土の金属器1

図版65:出土の金属器2

第 I 章

第1節 調査に至る経過

JR 伊丹駅と阪急伊丹駅に挟まれた区域は有岡城を中心として形成された城下町であり、近世に至ってはそれとほとんど同じ範囲が町家「伊丹郷町」として栄え、幕末を経て現在の旧市街地の母体となっている。そのために、道路筋に面する民家はほとんどが中二階建ての長屋造りで、黒い燻瓦を葺いた屋根が軒を連ねる光景は、中世ヨーロッパの町並みにも匹敵する落ちついた佇まいをもった、非常に美しい景観を成していた。

そうした昔ながらの景観を良く留める町並みに多くみられるように、この「伊丹郷町」においても町内を巡る道路はその幅員が狭く、複雑に折れ曲がり、町並み深くにまで入り込んでいるために、現在のような車社会にあっては、通過するのにも非常に困難を極めるような道路事情をきたしていた。

また、この「郷町」地区はJRと阪急の両駅に挟まれ、土地運用面での価値は著しく高い地域であるが、 上記のように古い形態を残す市街地のため、十分に都市機能を果たすことができず、商業機能・居住機 能・文化機能とも地区外へ移転・新設されるケースが多くなり、同地区の地域的な地盤沈下をきたす要 因となっていた。そこで、都市地理学的に好条件の元にある「郷町」地区を活性化させ、都市機能を回 復することを目的として、伊丹市が主体となって同地区(宮ノ前地区)の再開発による新たな都市機能 を創造する事業が計画された。この宮ノ前地区の基幹都市計画道路として、「都市計画道路伊丹飛行場線」 の道路改良工事が兵庫県西宮土木事務所によって、再開発事業と同時に実施されることとなった。

「伊丹郷町」は有岡城以来の歴史的背景を持って成立した街であるため、伊丹市教育委員会・大手前女子大学により現在までに100次を越える発掘調査が継続的に行われている。特に、阪神淡路大震災後はその震災の影響をあって、郷町内の古い面影を残す建物は次々に新しい建物に建て替えられているため、その調査件数も増加の一途をたどっている。

この再開発計画はかなり広い範囲を事業対象域としているため、発掘調査面積もかなり拡大なものとなっている。こうした調査結果とJR 伊丹駅前の再開発に伴う発掘調査の成果から、有岡城跡と近世を中心とした「伊丹郷町」遺跡の実体が次第に明確になろうとしている。この再開発に伴って計画された「都市計画道路伊丹飛行場線」の事業対象範囲も、この「有岡城跡」・「伊丹郷町」遺跡の範囲内を通過するため、兵庫県西宮土木事務所からの発掘調査の依頼に基づき、都市計画道路の予定地内の調査を行ったものである。ただし、再開発地域内に付いては伊丹市が事業主体となって行うため、同道路予定地内についても同市教育委員会が調査を担当し、再開発事業地までのアクセス道路の部分を兵庫県教育委員会が調査を行った。

また「伊丹郷町」には、近世以降の町の状況を示した絵図が数面残っている。各絵図によって描かれている内容は異なるが、この絵図の内容を検証することも今回の発掘調査の大きな目的のひとつであった。

第2節 歷史的背景

鎌倉時代末から戦国時代にかけて伊丹城を居城としていた伊丹氏に替わり、天正2年(1574)に入城 した荒木村重は、伊丹丘陵の周辺に形成された段丘崖と、その中に存在する残丘・古墳を取り込んで各 砦として整備し、惣構えの有岡城としての城郭を完成させた。その惣構えが近世「伊丹郷町」の基礎と なっている。段丘崖に囲まれるという地形的な制約のためか、現代に至るまで伊丹郷町の範囲はほぼ惣 構えの中に限られ、その範囲が大きく拡縮することはなかったようである。

こうして現在に至った伊丹郷町は、昭和54年に有岡城主郭部と伴に、線による範囲指定とうい非常に変則的な形態で国の史跡に指定された。

戦国期、荒木村重はこの有岡城に最古の天守台を築いたともいわれ、摂津国支配の中心の城とした。 淀川水系の茨城城・高槻城、海浜部の尼崎城は抑えの城とし、中国毛利氏に対する守りを固めている。 村重が有岡城を居城として選択したのは、城郭としての完成度の高さに加え、猪名川の水運とともに京都と中国地方を結ぶ街道が伊丹の地で交差しており、交通の要の位置を占めていたためと思われる。

「伊丹郷町」は北側から伸びてくる洪積台地の伊丹丘陵が、その南端部で浸食谷によって手指状に枝分かれした内の、最も東側に存在する丘陵部の最南端に位置する。丘陵の東側は猪名川によって形成された大きな落差をもつ段丘崖となり、南と西も小さな段丘崖に囲まれているために、平野部に突き出た逆三角形状の台地の先端部に遺跡が営まれていることとなる。この段丘崖が、そのまま伊丹郷町の外形となっている。城郭の一部でありながら、遺跡の外形自体が非常に非人工的な形態となっているのはそのためである。

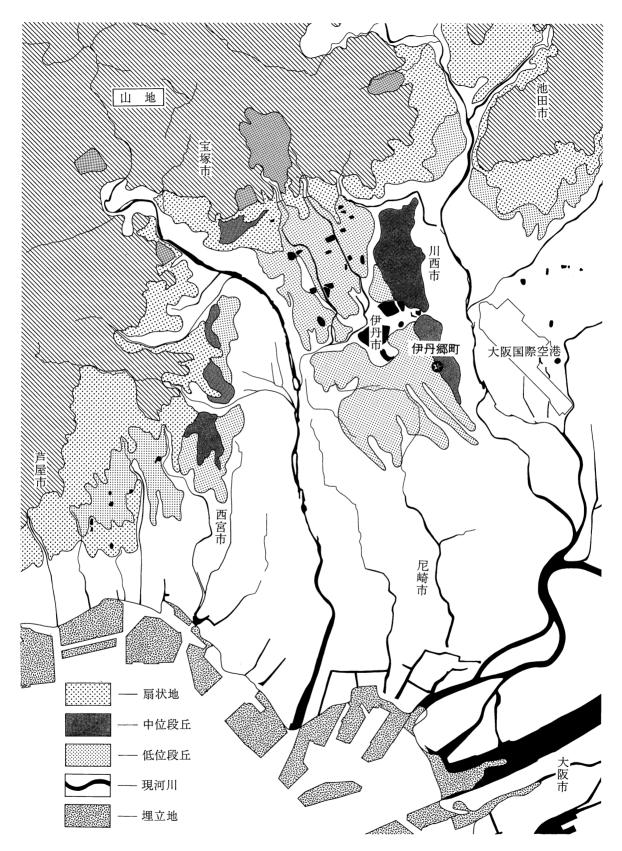
有岡城・伊丹郷町成立に至る歴史的背景は、伊丹丘陵の東と西を流れる猪名川・武庫川によって形成された南部の沖積平野内と、それを取り囲む周辺山地の遺跡の動向から概観することができる。

まず沖積平野部に関しては、3か所の地域が核となる。第1は猪名川東岸の大阪府との府県境である。 第2はその対岸となる藻川の西岸、伊丹市と尼崎市との市境付近である。そして第3は武庫川の東岸で ある。これらはいずれも、河川の堆積により形成された自然堤防上にあたり、沖積平野部においては、 遺跡の立地に地理的な要因が大きく関与していることが分かるモデルケースといえる。

縄文時代では、猪名川東岸域の平野部において遺跡が顕著に集中する状況にある。口酒井遺跡・田能遺跡・勝部遺跡(豊中市)はその代表的なもので、田能遺跡・勝部遺跡は弥生時代まで継続する基幹的な集落遺跡である。この地域以外では、池田市・豊中市と西宮市・芦屋市の山地部に多くの遺跡が確認されているが、現段階では時期不明のものが多数を占めている。

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代と同様猪名川東岸域に集中するが、上ノ島遺跡・東武庫遺跡のように武庫川の東岸域にも存在が認められるようになる。基本的には前代の立地を基礎として成立する傾向にある。中期には平野部の遺跡に加え、所謂高地性集落が周辺の山地に爆発的に増加するが、加茂遺跡のように基幹的な集落として継続するものも少数ながらみられる。後期になると再び上記二地域での遺跡の増加に加え、猪名川(藻川)西岸域に多くの遺跡が出現することになる。この頃、第3の微高地として猪名川(藻川)西岸域が大きなウエイトを占めるようになり、この状況は次の古墳時代により如述に現れてくる。弥生時代には集落遺跡の状況とともに、桜塚遺跡・勝部遺跡(以上豊中市)・中村遺跡・加茂遺跡・中山荘園遺跡……津門東芝遺跡などで合計8鐸の銅鐸が出土していることも特徴的である。

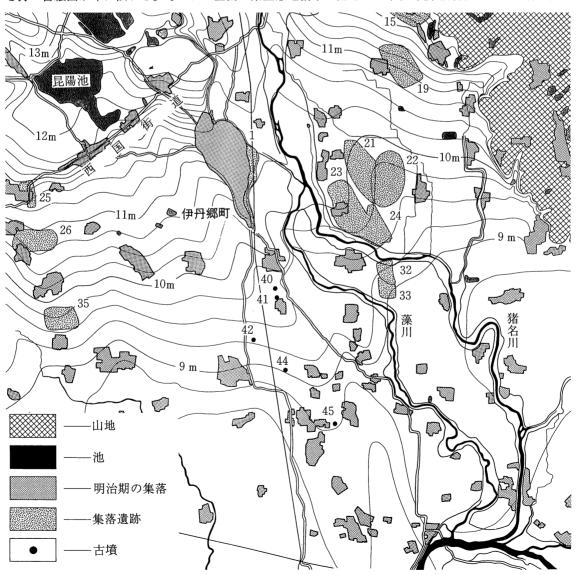
古墳時代には弥生時代までに形成された3か所の微高地を中心として多数の遺跡が展開しながらも、



第1図 調査区周辺概地形図

中心になる遺跡を抽出することができない。前代以上に分村的な社会構造になりつつあった表れとも考えられる。ただし、古墳の分布状況をみると、弥生時代までの社会情勢が引き継がれていることが伺える。前期の前方後円墳は、北部山地部に所在する茶臼山古墳(池田市)と万藾山古墳のみであり、武庫川東岸の平野部には円墳ながら「赤烏七年」の記年銘鏡を出土した安倉高塚古墳が知られている。中期になると、西宮市御手洗川東岸域に大塚山古墳・稲荷山古墳の二古墳が構築されたことにより、上記3微高地地域に加え新たな核地域が形成されたことが知れる。この時期の中心となるのは猪名川西岸域である。微高地上に池田山古墳を中心として、6基の前方後円墳からなる猪名野古墳群が形成される。その数は豊中市域の猪名川東岸域を圧するものであり、ずば抜けた突出状態はこの地域の優越性を肯定せざるを得ないものである。後期になると、周辺の山地部に野畑たこ塚古墳群(豊中市)・長尾山古墳群・五ケ山古墳群・八十塚古墳群などの群集墳が形成され、平野部への構築はほとんど行われなくなる。

律令期には現在の尼崎市・伊丹市・川西市・猪名川町を中心とした地域が河辺郡とされ、『和名抄』には郡内の八郷が列記されている。北は丹波国の多紀郡、東は豊能郡、西は武庫郡と有馬郡に囲まれ、南は大阪湾に臨む範囲となる。八世紀代には尼崎市域に東大寺領の猪名庄が置かれ、天平勝宝八歳の銘を持つ古絵図が今に伝わる。そこには全面に条里形地割りが記されおり、沖積地部分にはこの時期条里



第2図 調査区周辺等高線図 (番号は表1のNo.に対応)

制が施工されたことが知れる。この時期の遺跡の分布の傾向として特徴的なのが、伊丹丘陵上への分布の拡大である。特に伊丹市北部にある昆陽池は、昆陽寺と伴に天平三年頃僧行基によって潅漑用に設けられたと伝えられており、遺跡の在り方とともに、丘陵内部の開発行為を示すものである。

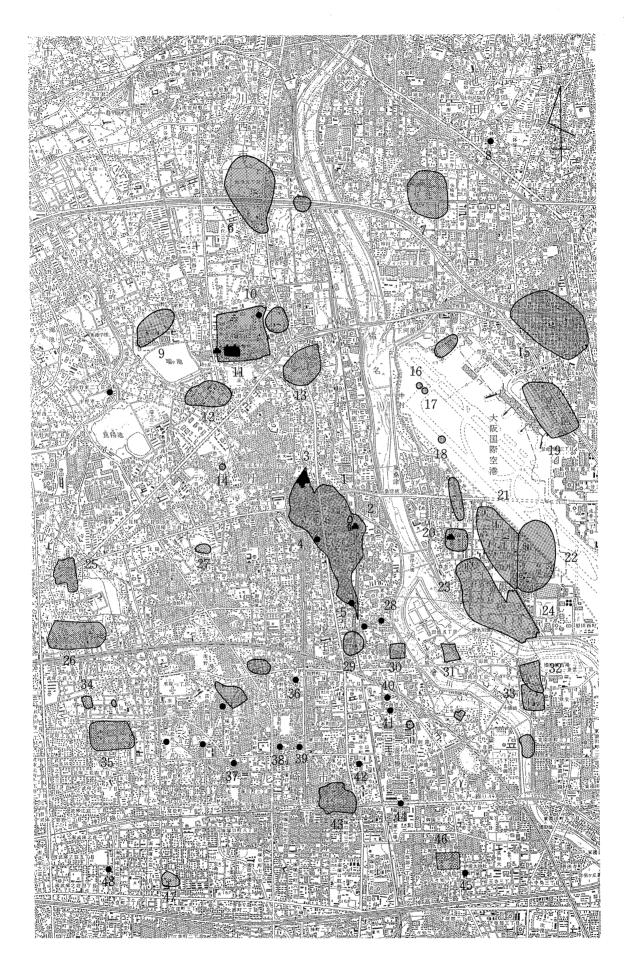
また、伊丹・尼崎の両市境に近い藻川の西岸辺には、法隆寺式の伽藍配置をもつ猪名寺廃寺(白鳳期)が建立される。さらに、昆陽池の北東、伊丹丘陵の東縁辺に存在するのが国指定史跡の伊丹廃寺である。 天平期前半に創建され、伽藍は変形の法隆寺式の配置となる。こちらは、猪名寺廃寺のように歴史的なバックボーンが存在しない場所に突如として出現する。古代山陽道がこの廃寺の前面(南方)を通過していることから、かなり政治的・意図的にこの場に創建されたのではないかと思われる。また北方の川西市内には、加茂遺跡下方の平野部に栄根寺廃寺と河辺郡衙といわれる小部遺跡が存在する。

平安時代以降は遺跡の数が極端に少ない現状にある。おそらく、現市街地の下に埋もれているために、確認できない状況にあるためと思われる。現在する古絵図・文献等をみても、猪名川河口の開拓・利用が積極的に行われていることから、中世後半には沖積域のほぼ全域で活発な生産活動が行われていたことが分かる。森本居館跡・北園遺跡・猪名庄遺跡・西川遺跡・塚口城跡・大物遺跡などが代表的な遺跡であるが、その多くはやはり猪名川の自然堤防上あるいは微高地上に立地している。

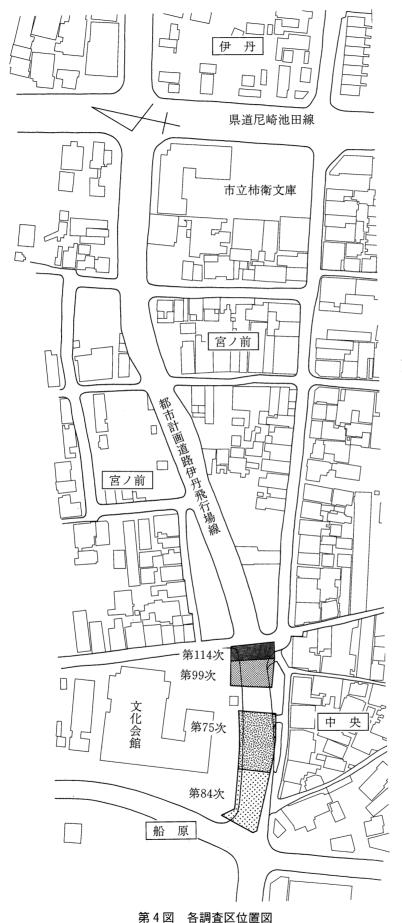
戦国期に入ると、織田信長方に属する荒木村重により摂津国が平定される。室町幕府を支えてきた守護領国制は、織田信長の出現により急速な崩壊をきたす。そして、摂津平定の居城として村重が選択したのが伊丹城であり、その経過については文頭に記したとおりである。ところが、天正7年(1579)織田軍のなかでも羽柴秀吉の次席に位置していた村重が突如反旗をひるがえし、毛利方へ荷担してしまう。

表 1 周辺遺跡地名表

		T		1			
No	遺跡名	所 在 地	時 代	No	遺跡名	所 在 地	時 代
1	伊丹郷町遺跡	伊丹市伊丹・宮ノ前他	中世~近世	25	昆陽寺境内遺跡	伊丹市寺本	奈良~平安
2	有岡城主郭跡	伊丹市伊丹	中世	26	山田遺跡	伊丹市山田	奈良~平安
3	有岡城跡岸ノ砦跡	伊丹市宮ノ前	中世	27	昆陽林田遺跡	伊丹市昆陽	奈良~平安
4	女郎塚砦跡	伊丹市伊丹中央	古墳・中世	28	黄金塚古墳	伊丹市東有岡	古墳
5	鵯塚砦跡	伊丹市伊丹	古墳・中世	29	南本町遺跡	伊丹市南本町	古墳~平安
6	下加茂遺跡	川西市加茂	縄文~中世	30	猪名寺廃寺	尼崎市猪名寺	奈良~中世
7	神田遺跡	大阪府池田市神田	弥生	31	春日神社遺跡	尼崎市田能	弥生~中世
8	鉢塚古墳	大阪府池田市鉢塚	古墳	32	田能高田遺跡	尼崎市田能	弥生~古墳
9	東野遺跡第1地点	伊丹市東野	古墳~中世	33	四ノ坪遺跡	尼崎市田能	弥生~奈良
10	緑ケ丘遺跡	伊丹市緑ケ丘	古墳~平安	34	友行古墳	尼崎市武庫荘	古墳
11	伊丹廃寺	伊丹市緑ケ丘	奈良~平安	35	武庫庄遺跡	尼崎市武庫荘	弥生
12	大鹿遺跡	伊丹市瑞穂町	奈良~平安	36	御願塚古墳	伊丹市御願塚	古墳
13	北園遺跡	伊丹市北園	古墳~平安	37	坂塚古墳	尼崎市富松町	古墳
14	千僧遺跡	伊丹市千僧	中世	38	琵琶塚古墳	尼崎市富松町	古墳
15	宮の前遺跡	大阪府豊中市石橋他	弥生	39	柏木古墳	伊丹市柏木町	古墳
16	中村銅鐸出土地	大阪国際空港	弥生	40	大塚山古墳	尼崎市猪名寺	古墳
17	大阪空港A遺跡	大阪国際空港	縄文~古墳	41	南清水古墳	尼崎市南清水	古墳
18	大阪空港B遺跡	大阪国際空港	縄文~弥生	42	池田山古墳	尼崎市塚口本町	古墳
19	蛍池西遺跡	大阪府豊中市蛍池西町	弥生	43	塚口城跡	尼崎市塚口本町	中世
20	森本居館跡	伊丹市森本	弥生~中世	44	御園古墳	尼崎市御園	古墳
21	森本遺跡	伊丹市森本	縄文~中世	45	伊居太古墳	尼崎市若王寺	古墳
22	岩屋遺跡	伊丹市岩屋	古墳~奈良	46	伊佐具神社遺跡	尼崎市若王寺	古墳~中世
23	口酒井遺跡	伊丹市口酒井穴森	縄文~古墳	47	上ノ島遺跡	尼崎市上ノ島	弥生
24	田能遺跡	尼崎市田能	弥生	48	大井戸古墳	尼崎市武庫荘東	古墳



第3回 調査区周辺遺跡分布図



この謀叛は即座に鎮圧され、 難攻不落といわれた有岡城も 落城し、4年後に廃城となる。 その後、惣構えの部分が町 家(郷町)として独自の発達 をとげる。江戸時代になると その一部が近衛家の所領とな るが、地場産業である酒造業 を中心としての商業活動が著 しく活発となり、今日の伊丹 市の母体がこの頃に形成され ることとなる。

第3節 調査の概要

兵庫県西宮土木事務所の計 画する都市計画道路伊丹飛行 場線は、伊丹市の推進する宮 の前地区の市街地再開発事業 と一連となる事業である。こ の再開発地区については、伊 丹市教育委員会を中心として 用地の取得が完了した箇所か ら随時調査が進められていた ため、兵庫県教育委員会が調 査に入る時点で、すでに数次 におよぶ発掘調査が行われて いた。既存の住宅等もあり、 全域を一度に調査できない状 況にあったため、調査の対象 面積は民家の1軒ないし2軒 の規模が基準となり、今回の 道路部分だけでも6次に分割 して調査を行った。

兵庫県教育委員会による同 事業に対する調査は、昭和62 年4月から開始した。この時 には西側の市道との取り付きの南コーナー部分の工事中の立会い調査を行い、当初推定していた総堀の ラインよりもさらに1ブロック西側の道路部分に堀が存在することが明らかとなった。それとともに、 伊丹郷町を取り囲んでいたとされている堀の東の肩部が現れたことにより、その西側を南北方向に走る 現市道部分が旧の堀部分となることが明らかとなった。

その後、昭和63年 (1988) 2月に道路本線部分の確認調査を実施した。この時には第150次の調査区 (今回は報告していない)となる箇所に民家がまだ在ったため、この部分を残して他の全域の確認調査を行った。この調査により、事業地の全域に18世紀を中心とする伊丹郷町遺跡に関連する遺構が存在することが明らかとなった。検出される遺構は、19世紀後半(幕末~明治)・18世紀代・16世紀~17世紀(戦国期)の3時代におよぶが、特に18世紀代の遺構面には火災の痕跡があり、記録に残る大火との関連が指摘できる。

平成元年2月より、第75次の調査が開始される。これより、前年度の確認調査の成果を受けての全面調査の開始となる。この時の調査が最も広い調査区であり、2面の遺構面が確認されている。下層の遺構面では、天保15年の「伊丹郷町分間絵図」に描かれている町屋の敷地境の溝を確認した。ここでは、現代にまで及んで改修されながら使用された竃跡が数基検出されており、19世紀以降酒造業に関連する産業が行われていたものと思われる。

第84次調査は、翌平成元年度に実施した。第75次調査区の西にあたり、一連の調査対象区の最も西となる部分でもある。ここでは19世紀後半に属する町屋に伴う遺構を検出するとともに、郷町総構えに関連する遺構も確認している。確認調査のおりに土塁と思われる遺構を確認していたが、この調査では明確に土塁と断定できる遺構は存在しなかったが、昭和62年の立会い調査でその存在を確認していた伊丹郷町を取り巻いていたと思われる濠の一部を確認できたことは大きな成果である。それとともに、その濠内に新たな遺構が構築されていることから、この濠が埋められた時期もほぼ確定するすることが可能となった。

第99次にあたる平成3年度の調査では、幕末期を中心とする町屋の敷地境を確認した。元禄15年の「柳沢吉保領伊丹郷町絵図」と天保15年の絵図さらに今回検出された遺構の位置関係を比較することにより、一度消えた敷地境が後世に再び同じ場所に構築されていることから、敷地割りが比較的後世まで厳密に意識されていたことが知れる。これ以外には、幕末期を中心とする埋甕・埋桶が多数確認された。ただし、西隣の地区(第150次調査区)がこの時点では未調査であったため、第75次調査区との遺構等の関連については具体的に把握することができなかった。

平成5年度の第114次調査区は第99次調査区の東隣であるとともに、全調査対象域の東端にあたる箇所となる。極狭い面積の調査区であるが、二軒の敷地境を示す石組溝を確認している。その他に、18世紀代の胞衣壷を1基と18世紀から19世紀代の井戸を数基確認している。井戸の多くは素掘りであるが、中には有岡城の時期に属する可能性のものもある。

第75次調査区と第99次調査区の間にあり、最後の調査となったのが第150次の調査区である。ここについても遺構が存在することから平成7年度に全面調査を実施したが、今回の報告書では報告せず、紙面を改めることとしたい。

第 Ⅱ 章

第1節 確認調査 (第60次調査)

調査の方法(図版1、写真図版3・4)

調査区は幅 $20\,\mathrm{m}$ 、長さ $100\,\mathrm{m}$ と東西に長いため、南北($\mathrm{A}\cdot\mathrm{B}$ 列)に試掘溝(トレンチ)を重ねて、 土層図を繁ぐこととし、 $2\,\mathrm{m}\times10\,\mathrm{m}$ のトレンチを各々 $7\,\mathrm{a}$ 、計 $14\,\mathrm{a}$ 設けることとしていたが、有岡城跡の土塁・堀部は北 $2\,\mathrm{m}\times15\,\mathrm{m}$ 、南 $2\,\mathrm{m}\times10\,\mathrm{m}$ とし、合計 $12\,\mathrm{a}$ 、面積 $168\,\mathrm{m}^2$ の調査を行った。

調査の成果

基本的には表土を除去すると、撹乱されている箇所もあるが、19世紀から昭和の遺構面である。更に 褐色シルトで調査を行うと、18世紀代の遺構面となる。ただ実際には撹乱されているため、18世紀代の 遺構面で調査することとなった。

- 1. 遺構 (図版 2 · 3)
 - a. 現代の溝や礎石や第2次世界大戦時の防空壕、井戸等の遺構が、A1・A2・A3・B1・B2・B4・B5・B6から検出された。
 - b. 幕末~明治にかけての水琴窟がA5·B3にて検出された。
 - c. 19世紀代の中国清代の青花蓋付碗を埋納する柱穴 (B3) や、旧昆陽口村資料や天保15年 (1845) 伊丹郷町分限絵図に比定できうる漆喰塗りの溝がA6・B6にて検出された。
 - d. 18世紀代の火災を片付けた炭・灰が埋まっている土坑 (A5) があり、肥前陶磁器が出土し、『伊 丹郷町災害年表』〔伊丹市立博物館 和島恭仁雄氏提供、「有岡庄年代秘記」から抜粋〕の享保14年 (1729) や明和3年(1766)の火事との関係が考えられる。
 - e. 井戸は現代まで使われたA1・A2・A3の西の井戸を除くと近世に属する井戸が3基(A3-2基、B3)がある。中でもB3の井戸は丁寧に礫を詰め込んでおり、有岡城時代まで遡るかも知れない。
 - f. 漆喰で固めた便桶や地下貯蔵施設があるが、完掘をしていないため時期を特定できない遺構である。
 - g. A1・B1では、有岡城跡の土塁の基底部の積み土が、後世の建物で撹乱されているが、なんとか判別できる。A1では西の壁への土層堆積状況は高さ2.3m土塁下に90cm幅の犬走り状の平坦地を設け、更に堀へと傾斜していく。平坦地を覆う土壌内に18世紀後半の青磁染付碗蓋が出土しており、享保期の「昆陽口村絵図」に見る土塁下の畑の部分に類するものと比定できる。

2. 遺物 (写真図版 4)

17世紀末から18世紀全般、19世紀代前半の肥前陶磁器を中心として、碗、皿、徳利、猪口及び瓦類と、防空壕などには19世紀代から昭和の遺物まで出土している。

まとめ

昆陽口村関連資料の『古絵図集成』の検討から、有岡城の土塁については「文禄伊丹之図」のように A1トレンチからB1トレンチにかけて南西に膨らんでいる。伊丹郷町については、17世紀末から18世紀代は元禄7年「柳沢吉保領伊丹郷町絵図」の町割りや、天保15年「伊丹郷町分限絵図」を復元するものである。

第2節 第84次調査の遺構

遺構の概要

この調査区は、調査対象地区の西端にあたり、調査区内には史跡有岡城跡の総堀の東肩部分が調査対象に含まれる。第84次の調査対象面積は419㎡である。

調査の結果、地割溝・埋桶・埋甕・土坑をはじめ、有岡城期に築かれた総堀跡等の近世の遺構群と防空濠・レンガ積み土坑などの近・現代の遺構群を確認した。

両時期の遺構群は層位的に分離せず、現代の整地層(第1層)を除去した段階の同一面上で重複して確認した。調査区東寄りに南北方向に走る石列溝より東側は15~20㎝の厚さで整地(2層)されている状況が看取される。石列溝より西側は、一段下がった黄灰色地山面で遺構を確認した。地山面には部分的に黄褐色シルトの整地層の痕跡があり、石列より西側についても同様に整地されていた可能性がある。

遺構は、前述したように近世、近現代の2時期に大別される。今回の報告は、近世を対象としているため、以下近世に比定できる遺構について、全体的な概要と個々の詳細について述べる。

近世の遺構は、有岡城期の堀、井戸4基・地割り溝4条・埋甕8基・埋桶17基・土坑が出土した。

調査区の西端、堀東肩部分には地山上に黄灰色土が確認され、土塁基底部層と判断される。総堀部分の調査については、堀の西側が道路に面しており、調査の安全確保から、最深部で地表下2mまでの掘削で止めた。その結果、堀底まで調査が及ばず、有岡城時期の堀の調査は、実施できなかった。堀内がある程度埋没し堀内に江戸時代の井戸・埋甕・土坑が築かれた伊丹郷町段階では、総堀本来の区画という機能が消失し、郷町が堀外へ拡張していった可能性を示す状況が確認できた。

堀の東側には4条の溝が南北方向にはしり、4条の溝のうち西側の2条の溝は、堀とほぼ平行にはし りのに対し、東側の2条の溝は、ほぼ南北方向に向き、地割りの変化が認められる。

井戸は、堀内・各溝で画された4区画に1基づつ配置され、各区画内の北側に偏在する傾向が看取れる。井戸は素掘り・桶組の2種類が確認できた。時期的には近世・近代の遺物を含み、近代まで継続的に使用されている。素掘り井戸のうち1基は、井戸上位にレンガと加工石で井側が組まれている。内部の調査は、調査者の安全上、深度が2mを超える掘削は不可能で井戸底まで調査できなかった。

埋桶は重複ないしは近接するものが多く、同一場所もしくは近接して構築されている。また埋桶の位置は、調査区西側と東側に偏って確認され、西側の埋桶群は溝に沿うように配置されている。17基の埋桶のうち、6基は、桶の側板ないしは底板が遺存していた。

埋甕は8基出土した。埋甕の分布は、掘内と調査区中央付近に集中し、埋桶の分布とは重ならない。これらの遺構以外にも多くの近世に比定される土坑が確認された。土坑の種類としては、ゴミ穴の機能をもつと推測される土坑も確認されたが、土坑の掘方が円形であるいは埋桶の桶部を抜き取った可能性が高い土坑もあり、土坑と埋桶の区別が明確でないものもある。今回は、調査で埋桶と確定したものについて報告した。特殊な土坑では、木製箱を地中に埋納したものが1基確認されている。

1. 堀(図版4・5)

調査区の西端でN-19°30′-E方向に向きをもつ堀が確認された。堀は荒木村重築城による有岡城の総堀に該当する。安全上の問題で、堀内を完掘することができなかったが、堀の東肩部を検出した。検出できた堀の規模は、幅が6m以上、確認面からの深さは2.3m以上である。東肩部の立ち上りは、70°~

 75° と急である。東肩部中央付近は 2×0.8 m 規模の平坦部が認められるが、堀の掘削時の造作か、あるいは後世の造作であるかは不明である。

堀内は、上層から現代の整地層(第1層)、近代包含層(第2層)、近世包含層(第3層)の順で堆積し、近世包含層下から井戸・埋甕・土坑等の遺構が確認された。これら遺構群からは、18世紀後半から19世紀代の遺物が出土しており、堀内の堆積がある程度進んだ江戸時代後期には、堀としての機能は失われ、生活領域としての開発が及んだと考えている。

2. 溝(図版6)

地割り機能をもつ溝は、4条確認された。いずれも南北方向に配置されており、うち東側の2条の溝(溝 $1\cdot 2$ 、溝3)は、ほぼ同方向の向きをもち、5.5mの間隔で並行してはしっている。また西側の2条の溝(溝 $5\cdot 6$)は、堀とほぼ同方向の向きで、互いに1.5m前後の間隔で並行している。

a. 溝1・2:調査区の東端に位置し、南北方向にはしる溝である。溝1・2は、中央で途切れるが、同一の溝と考えられる。溝の東肩部は調査区外に延び、西肩部のみ確認した。識別可能な溝幅が80cm以上と広く、確認面からの深さは5cmと浅い。溝の北端と南端では2cmの差で、溝南端が深い。溝の主軸方位は、N-3°-Wを測る。

溝内からは18世紀後半から19世紀代の陶器が出土している。

- b. 溝3:調査区の西側に位置し、溝1・2とほぼ同方向で並行してはしる。溝の南肩部には石列を伴う。石列は、30×40cm大から50×80cm大の自然石を平坦面を西側に向け並べられている。溝底部からの石の高さは30cmから40cmである。石列の中央部は1.15mの間隔で一旦途切れている。溝北端部分の石の下には、胴木が敷かれている。胴木は径10cm前後の丸材を一本溝に沿って敷いただけの簡単な作りである。溝部の幅は、上端で1.35~2.4mと幅があり中央部付近が狭小である。確認面から溝底までの深さは28cmから38cmと幅をもち、溝北端が深くなる。溝の主軸方位はN-3°30′-Wを測る。遺物は溝底より染付碗が1点出土している。
- c. 溝5:調査区の中央よりやや東寄りを南北方向にはしる。溝は現代の排水路によって西肩部の一部が破壊されており、溝の遺存状況は悪い。溝の南端と北端は調査区内で途切れており、南北方向への溝の拡がりは不明である。残存する溝幅は、30cm前後と狭い。確認面からの深さは10cm前後と浅く、溝の北端と南端は5cmの比高差をもち、北端が高い。溝の主軸方位はN-12°50′-Eを測る。
- d. 溝 6:調査区の西側を、溝 5とほぼ並行してはしる。溝の南端は途切れ、北端は埋桶80に切られ、溝の全容は明らかではない。溝上端の幅は25~30cmとほぼ均一で、確認面からの深さは10cm前後と浅い。溝の主軸方位はN-13°-Eを測り、溝 5とほぼ同方向を示す。

3. 井 戸(図版7・8)

井戸は4基確認された。井戸の分布は、溝1・2と溝3、溝3と溝5、溝5と堀、掘内にそれぞれ東と西を限られた範囲に各1基の割合で確認した。各井戸は、調査区の北端あるいは北辺に偏在している。

a. 井戸1:調査区の東側、北寄りに位置する素掘りの井戸である。井戸上部の南北両辺と西辺には加工石、煉瓦製の井戸枠が組まれている。井戸枠は上端から65cmの深さで四隅に平坦面をもつ穴を穿ち、南北両辺に煉瓦をコンクリートで固めた長さ1.1m、幅25cm、厚さ15cmの井戸枠を組んだ後、西辺に長さ1.15m、幅15cm、厚さ12cmの大きさの加工石を乗せている。図化していないが、西辺の井戸枠を組んだ後、南北両辺の煉瓦製の井戸枠の上に、長さ1.15~1.2m、幅15cm前後、

厚さ10~15cmの大きさの加工石を乗せ、枠組を完成させている。井戸上端の平面形は一辺1 m前後の隅丸方形を呈する。安全上の問題で完全に掘削することができず、井戸の深さ不明である。井戸の掘方は下方にいくにしたがい広がる。井戸の埋土から現代の土器のみが出土しており、井戸の時期が現代まで下る可能性も考えられるが他の井戸の分布状況から判断して、江戸時代から継続して使用されている井戸の可能性が高いと判断し今回報告する。

- b. 井戸 2 : 調査区の中央、北寄りに位置する素掘りの井戸である。井戸上端の平面形は、北辺が多 少張り出した隅丸方形を呈する。規模は南北方向1.07 m、東西方向1.06 mである。安全上の問題 から完全に掘削することはできず、井戸の深さは明らかにできなかった。井戸の断面形は下方に 行くに従い広がり、とくに南北両辺にその傾向が顕著に認められる。
- c. 井戸3:調査区西端、堀内より確認した桶組の井側をもつ井戸である。井戸掘方の平面形は南北方向1.3m、東西方向1.25mの円形を呈し、深さは安全上の問題から完全に掘削していないため不明である。井戸内を確認面より1.5mまで掘削した段階で2段の桶を確認した。上段の桶は桶上部が破壊されており、桶の遺存状況は悪いが、3~15cm幅・厚さ1cmの板材を20枚組み合わせて造られている。桶の内径は75cmである。下段の桶は、長さ60cm以上・幅10~20cm・厚さ1.5cmの板材14枚で造られている。桶の内径は上端で57cm、下端で58である。

井戸桶内より無釉陶器植木鉢が出土している。

d. 井戸4:調査区の中央付近に位置する素掘の井戸である。井戸の平面形は南北方向80cm、東西方向80cmの円形を呈する。安全上の問題から完全に掘削することができず、井戸の深さは不明である。井戸内より肥前焼の染付小碗が出土している。

4. 埋 甕(図版9)

埋甕は8基確認した。埋甕の分布は調査区中央部、北寄りに集中する。埋甕に使用されている器は丹 波焼甕・大谷焼大鉢が主体である。遺存状況は悪く、完全な形で出土しておらず、すべて破片の状態で 出土している。

- a. 埋甕8:調査区東端やや南寄りに位置する。埋甕の掘方は、33×35cmの円形を呈し、確認面からの深さは、最深部で5cmと浅い。埋甕は施釉陶器大谷焼大鉢が破片で出土した。鉢の内面体部から底部にかけて漆喰が塗布されている。
- b. 埋甕18:調査区の中央、北寄りに位置する。埋甕の掘方は62×58cmの若干東西方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは13cmである。埋甕は丹波焼甕が破片で出土した。甕の内面底部には漆喰が塗布されてる。甕底部より肥前焼染付碗が出土している。
- c. 埋甕19:調査区の中央、北寄りに位置する。埋甕の掘方は67×70cmの東西方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で14cmである。埋甕は大谷焼大鉢が破片で出土した。鉢の内面体部下半から底部にかけて漆喰が塗布されている。鉢内より鉄製品が出土している。
- d. 埋甕20:調査区の中央、北寄りに位置する。埋甕の掘方は85×77cmの北東方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは最深部から25cmと深い。埋甕は産地不明の無釉陶器甕が破片で出土した。甕の外面体部下半と内面体部から底部にかけて漆喰が塗布されている。甕内より施釉陶器の小鉢が2点出土している。
- e. 埋甕21:調査区の中央、北寄りに位置する。埋甕の掘方は46×40cmの東西方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で7cmである。埋甕は、大谷焼大鉢の底部破片が出土した。

- f. 埋甕39:調査区の中央、北寄りに位置する。埋甕の掘方は63×54cmの南北方向に長い楕円形を呈する。確認面から深さは最深部で23cmと深い。埋甕は、大谷焼大鉢の底部破片が出土した。大鉢の内面体部下位から底部にかけて漆喰が塗布されている。
- 8. 埋甕55:調査区の西端、堀内に位置する。埋甕の掘方は、57×53cmの東西方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で21cmと深い。埋甕は、大谷焼大鉢が破片で出土している。 鉢の内面、体部下半から底部にかけて漆喰が塗布されている。鉢内からは丹波焼甕の口縁部から底部にかけての破片と肥前焼碗が出土した。
- h. 埋甕56:調査区の西端、堀内に位置する。埋甕の掘方は、67×61cmの南北方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で25cmと深い。埋甕は大谷焼大鉢が口縁部を欠損し出土している。鉢は内面下半から底部にかけて漆喰が塗布されている。鉢内より硯が出土している。

5. 埋 桶(図版10~13)

埋桶は17基出土している。このうち側板・底板・タガなどの桶の痕跡を残す埋桶は5基で、これら以外は、掘方内に桶の痕跡が認められたもの、あるいは桶が抜き取られた痕跡を確認したもの、掘方の形状から埋桶と判断したものである。

桶の分布は溝3の東側および溝5の西側に偏り、埋桶40の一基を除き埋甕と並存することはない。さらに詳細に分布状況を検討すると、複数の埋桶がある程度のまとまりで重複、あるいは並列している。また溝5の西側の埋桶群は溝に沿うかたちで分布することも埋桶の分布状況の特徴である。

- a. 埋桶3:調査区東端、北寄りに位置する。埋桶の北側で埋桶4と重複しており、埋桶4より古いことが判明した。埋桶内には、桶材の痕跡はなく、土層断面観察によって掘方北側で桶の立ち上がりを確認したのみで桶の規模は不明である。また桶内の土層堆積状況から判断して、桶が抜き取られたと理解している。埋桶掘方は、1.54×0.97m以上の規模で南北方向に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で43cmである。
- b. 埋桶14:調査区の東側、中央付近に位置する小型の埋桶である。北東方向には埋桶16・18が近接するが、単独で位置する。桶の痕跡は東側半分のみ識別可能で、桶の規模は直径40cm程度の小型の桶と推定される。桶底には、底板が一枚残存する。底板は長さ30cm以上で幅は13cm、厚さ1cmである。埋桶掘方は68×62cmで東西方向に長い楕円形を呈する。深さは、最深部で42cmである。
- c. 埋桶4:調査区東端、北寄りに位置する。東側で埋桶12と、南側で埋桶3とそれぞれ重複しており、埋桶12・3より新しく築かれている。南西側は撹乱により破壊されている。桶は底板のみ遺存している。底板は4枚の板材が使用されていたと考えられ、板材は幅12~32cm・厚さ0.7~1cmで、中央部分に幅広の板材が使用されている。中央の二枚の両側面にはそれぞれ2箇所の穴が穿たれ、そのうちのひとつには竹釘が遺存していた。残存する底板から桶の規模を復原すると、直径95cmの大型の桶が埋められていたと考えられる。埋桶掘方は南北方向1.45m、東西方向1.08m以上で、確認面からの深さは、最深部で42cmである。
- d. 埋桶12:調査区東端、北寄りに位置する。西側で埋桶4と重複しており、埋桶4より古く築かれている。埋桶内には桶の痕跡はなく、掘方の形状で埋桶と判断した。掘方は95×89cmで円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で44cmである。
- e. 埋桶16:調査区の東側中央付近に位置する。東側で埋桶18の掘方と重複し、埋桶18より新しい。 桶の痕跡はなく、掘方の形状から埋桶と判断した。掘方は77×60cmで東西方向に長い楕円形を呈

する。確認面からの深さは、最深部で26cmと浅い。

- f. 埋桶18:調査区の東側中央付近に位置する。西側で埋桶18の掘方と重複し、埋桶16より古い。埋桶16同様、桶の痕跡はなく、掘方の形状で埋桶と判断した。掘方内の土層堆積状況から判断して、 人為的に埋められている。掘方は1.25×0.99mで、南北方向に長い楕円形を呈する。確認面から の深さは、最深部で50cmである。
- g. 埋桶27:調査区中央、北寄りに位置する。東端は現代の排水溝で破壊されている。桶材は遺存せず土質の違いで桶の痕跡が識別できた。桶は上端で73cm、下端で60cmで高さは30cm以上である。桶底部西半には桶底の周囲に沿って幅7cm、深さ3cmの浅い溝を確認した。埋桶掘方は南北方向1.05m、東西方向80cm以上で円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは40cmである。
- h. 埋桶33:調査区中央、北寄りに位置する。北側には埋桶80が近接する。埋桶の中央部は現在の排水溝によって破壊され、遺存状況は悪い。桶の痕跡はなく、掘方の形状で埋桶と判断した。掘方内の土の層堆積状況から判断して、人為的に埋められている。掘方は1.25×1.13mで、円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で42mである。
- i. 埋桶40:調査区中央付近、北寄りに位置する。南側は埋甕20と重複し、埋甕20より古く築かれている。桶の痕跡は掘方の北壁にタガの一部が遺存していただけで、桶の規模等は不明である。掘方は、1.12×1.15mとほぼ正円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で71cmである。
- j. 埋桶70:調査区中央付近、南寄りに位置する。北側には埋桶52が接する。桶は、側板・底板ともに完全に残っている。側板は24枚の板材で作られ、板材は狭いもので幅3cm、広いもので幅13cmと幅に規格性が認められない。長さ53cm、厚さは1.5cmである。底板は5枚で作られ、中央3枚の板材の幅は、9~10cm、長さは40cm前後で、両側の板材は幅4~8cm、長さは最大で30cmである。底板の厚さは1.5cm前後で、各板材の接続には、各接続面ごとに2本の竹釘が使用されている。竹釘は長さ3cm前後、直径4mmの大きさで、両端が尖っている。桶全体の大きさは上端が内法で50cm、底板部で内法40cmである。高さは53cmである。桶の埋置方法は、掘方内に桶の底径に合わすかたちで幅3~6cm、深さ2cmの溝を巡らし桶を固定させている。掘方は1.15×0.76cmで、東西方向に長い不整楕円形を呈する。確認面からの深さは54cmで、桶高と近似する。
- k. 埋桶52:調査区中央付近に位置する。北側には埋桶70が接する。桶の痕跡は、底板のみ残存する。 底板は4枚残っており、幅6~12cm、長さは最大のもので40cmである。厚さは0.8cm前後である。 掘方は70×63cmで、東西方向に多少長い楕円形を呈する。確認面からの深さは21cmと浅い。
- 1. 埋桶66:調査区中央部、南端に位置する。埋桶の南端は調査区外に延び、北端は、埋桶74と重複し、埋桶74より新しい。桶は側板が3枚遺存していた。側板はいずれも上部を欠き、幅5~8cm、厚さ1.2cmである。桶の規模は、桶下端で50cm前後と推定される。掘方は、一部調査区外に至るため不明瞭であるが、径97cm前後の円形を呈すると推定される。確認面からの深さは、最深部で32cmである。桶内より施釉陶器土瓶が出土した。
- m. 埋桶74:調査区中央部、南寄りに位置する。北側と南側で、埋桶66および73と重複し、両者より 古い。桶の痕跡はなく、掘方の形状で埋桶と判断した。掘方は65cm前後の円形を呈すると推察される。確認面からの深さは、15cmと浅い。
- n. 埋桶73:調査区中央部、南寄りに位置する。南側は埋桶74と重複し、埋桶74より新しい。また、 南東隅は近代の土坑によって切られている。桶の痕跡はなく、掘方の形状によって埋桶と判断し

た。掘方は、85×75cmの円形を呈する。確認面からの深さは22cmである。

- o. 埋桶80:調査区中央部、北端に位置する。南側に埋桶33が近接する。桶の痕跡はなく掘方の形状から埋桶と判断した。掘方は89×77cmで円形を呈する。確認面からの深さは最深部で52cmである。
- P. 埋桶71:調査区東側、南端に位置する。西側には埋桶87が近接する。桶は側板の一部と底板が遺存する。側板は、桶の西側に5枚遺存する。幅5~10cm、残存長20~25cm、厚さ0.7cmである。底板は5枚で作られ、幅7~20cm、長さは最大で65cmである。正確な桶の大きさは不明であるが、底板の大きさから判断して、桶の下端が65cm程度の桶と推察される。桶内より土師質皿が出土。
- 9. 埋桶81:調査区東側、南端に位置する。南側は調査区外に延び、西側は溝3と重複し、溝3より 古い。桶の痕跡はなく、掘方の形状から、埋桶と判断した。残存する掘方は東西方向80cm、南北 方向54cm以上である。確認面からの深さは10cmと浅い。
- r. 埋桶82:調査区西側、北端に位置する。桶の痕跡はなく、掘方の形状から埋桶と判断した。桶の 上面は土坑と重複しており、桶掘方の下部が遺存している。桶掘方は、99×95cmの円形を呈し、 土坑部分を含めた確認面からの深さは、最深部で60cmである。

6. その他の遺構 (図版14)

これまで説明した遺構以外にも、大小の土坑が多数出土し、その多くは遺物が出土し、ゴミ穴的性格をもつと推察される。ここでは、これら土坑の詳細については触れないが、一基、木箱を埋置した特異な土坑が出土したので、紹介する。

a. 土坑47:調査区中央に位置する。土坑は32×23cmで、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは5cmと浅い。土坑内には木箱が埋置されている。木箱は真ん中に仕切りをもつ構造で、底板5枚、側板は各辺1枚の計4枚で作られており、木箱の形状は、内法で全長28cm、幅18cmの長方形を呈する。箱内に遺物はなく土坑の性格については不明である。

7. 小 結

今回の調査では、調査区の西端が、有岡城期の総堀に該当する。調査の都合で堀底まで掘削することができず、堀内の状況が明らかにできなかった。堀東肩部の立ち上がりは、最大で75°と険しく、総堀の内側にあたる東肩部に沿って土塁の痕跡が確認された。土塁の規模は、今回の調査では明らかにできなかった。掘内からは江戸時代の埋甕・埋桶・土坑などの生活に関連する遺構が確認され、土坑67からは18世紀後半の遺物が出土しており、この時期には総堀内にまで開発が及んでいたことが明らかになった。おそらく土塁もこの開発に伴い撤去された可能性が考えられ、堀と土塁の外観が消失した時期およびその原因を究明するという視点は、今後の調査にあたって留意すべきであろう。

地割りの機能をもつと考えられる溝は、4条確認された。いずれも、東西方向を基本とする。溝の時期の上限は18世紀後半から19世紀前半と考えている。これらの溝と堀境で限られる区画は、堀内を含めて4区画になる。平行してはしる溝1・2と溝3で限られる東端の区画は、間口が内法で5.5~6.4mで約3間の広さである。次の区画である溝3と溝5は、溝5が東に15°振っており、区画基準が異なる。溝5の方位は、堀肩部の方位と近似することから、溝5より西側の区画基準は、堀を意識した異なる基準を採用していると考えられる。また区画基準の境になる溝5には1.6m前後の間隔で溝6が平行してはしることから、溝5と溝6の空間は道路の可能性が考えられる。これら溝・堀によって限られた各区画内には、井戸が1基ずつ配置され、生活単位が各区画ごとに成立していた状況が看取される。最後に今回の調査では、建物址は識別できなかった。

第3節 第75次調査の遺構

遺構の概要

第75次調査の地点は伊丹郷町の西端を限る総堀を検出した第84次調査(本書報告)の東側に接して位置しており、更に東側は、平成7年度に発掘調査を実施している第162次調査地区(未報告)をはさんで第99次調査地区(本書報告)に続く。

重機掘削によって表土・盛土等を除去したが、コンクリート片などを埋め込んだ撹乱坑が多く見られた。特に北側の部分に多く見られることから、直前の家屋解体の際に屋敷裏を重機で掘り込んで廃材を処分したものと思われる。

ほとんどの遺構は小礫混じり黄褐色極細砂質の非常に堅緻な地山面で検出できた。しかしながら、埋桶や竃などの遺構が埋められた上から埋甕が据えられていることや、一部に整地層によって貼床した面に礎石を据えていたり、胞衣壷などの土器を埋納していることが観察できた。これらの発掘調査時に上層で確認できた遺構を上面検出遺構として抽出したものが図版15である。

上面検出遺構には礎石建物・井戸・土器埋納・溝の他に防空壕や町家解体の際の撹乱坑を恣意的に含めている。これらが比較的新しい遺構群であることは、その重複関係から明らかであり、礎石建物や埋 甕の多くがこの新しい時期に含まれるなどの傾向を見て取ることができる。しかしながら、全ての新しい遺構を抽出したものではない。防空壕としたものは地元の方々に教えていただいたものである。

検出できた遺構には溝・礎石建物・井戸・竃・土器埋納・埋桶・土坑・柱穴などがある。先述のように礎石建物や土器埋納は便宜的に上面検出遺構として取り扱っている他にも、重複関係から新旧の遺構が存在している。また、できるだけ遺構の性格を考えて記述したが、土坑・柱穴のなかには埋桶の可能性があるものも含まれていることや、土坑などを近世都市遺跡で普遍的なゴミ穴として利用しているため、特殊な構造や埋土の状況をもつもののみを土坑として抽出している。

以下では溝3より東側を調査区の東半部、西側を西半部と呼称して各遺構毎に記述していく。

1. 溝(図版17)

- a. 溝4・溝7:上面検出遺構に含まれるもので、塩化ビニール製のパイプが埋め込められていた。 ともに南北方向に走っており、調査区の北端までは伸びていない。各々が発掘調査直前に解体された家屋にそれぞれ伴うものである。
- b. 溝3:南北方向に走る溝で調査区を大きく二分するものである。特に北端部では河原石を並べた石列を有している。石列は溝の西側にのみ残されており、南にいくほど小振りな石になる。また、西側肩上にも敷石状に配されており、西半部敷地内の建物が溝直上まで迫っていた可能性がある。石列は幅約150cm、深さ約10cmの地山を掘り込んだ溝の中に組まれていることから、当初素掘りであった溝を改修して石組み溝としたものであろう。南側では幅約70cm、深さ約15cmの素掘りの溝のままである。溝の埋土からは一銭硬貨や昭和40年10円銅貨が出土していることから、近年まで溝として機能しているが、埋甕5はこの溝の上に据えられている。

この溝を挟んだ東西では遺構の状況がかなり異なるところから、この溝は屋敷境の溝として機能しており、絵図に現れる屋敷の境界に該当するものであろう。

2. 礎石建物 (図版17)

- a. 建物1:調査区内の西半部で検出できた。南北に走る溝4から西側には明黄褐色シルトを敷きつめた整地層の面が広がっており、貼床の土間と考えられる。地山の上には暗褐色極細砂が堆積しており、その上には焼土まじりの暗褐色極細砂がほぼ水平に広がっており、整地層はその上面に敷かれていた。その面から頭を出す形で四個の礎石が検出できた。礎石は東西約2.1m、南北約3.5mの間隔で配されており、個々の礎石は縦横約50cm、厚さ約20cm大の方形板状の石を用いており、表面は平滑である。礎石の内1点は周囲に更に小さい礫を配している。また、南側にも小形の石を4点並べて礎石にしており、南北は2間以上あったものと思われる。北側にもややこぶりの板状の石が建物1の軸線上に2点配されているが、柱間がやや異なることやこの部分まで土間が検出できなかったことから別の建物或いは同一の建物でも床構造が異なる可能性が考えられる。土間は建物1の西側にも広がっており、そこから壷や小型の甕を埋納した遺構(胞衣壷1~4)を検出している。この土間状の整地層を除去した下面からはほとんど遺構が検出されなかったことから、屋敷内でも常に土間などの空間として利用されていたものであろう。
- b. 建物 2:調査区内の南東部にある。南北に走る溝 7 から東側で東西 1 間(柱間約 3 m)、南北 2 間(柱間約 2 m)分の礎石を検出した。礎石個々の大きさは建物 1 より小形である。個々の礎石は縦横約35×25cm~59×35cm、厚さ約25~50cmの石を用いている。礎石の内 1 点は周囲に更に小さい礫を配している。下面に土坑があるため地固めに配したものであろう。さらに 2 間分北側に礎石状の石が、1 間分南側にも小礫が配されているため、南北 4 間程度の規模が考えられる。
- c. 柱穴群:この他に調査区域東南端からは、建物2と同軸上に南北方向に並んで、礫を多く入れた 平面形態が方形を呈する柱穴が検出された。これらの柱穴の西側には同じく南北方向に走る浅い 溝状の落ち込みがあり、部分的に水流の存在を示す砂の堆積が見られた。この落ち込みは東側に ある建物の雨落ち溝の可能性がある。またこの落ち込み部分に小型の埋桶が多く配されているこ とも指摘できる。しかしながらこれらの柱穴は一列に並ぶものの等間隔ではないことから、複数 時期の建物の西端部のみを検出しているものと思われる。

3. 井戸 (図版18)

井戸は井戸1・3・5・6・9~16の合計12基を検出した。井戸の分布状況を見るとやはり道に面した表側よりも屋敷裏の北側に多く、溝4よりも西側には見られない。ほとんどが素掘りのままで井側を有するもの或いは井側を伴った痕跡を残すものは井戸1・3・6・11の4基のみであり、コンクリートの井側を持つ井戸6を除く井戸1・3・11においても、井側は上部のみで下部は素掘りのままである。非常に硬い洪積段丘の礫混じりシルト層を掘り抜いていることから、壁面が崩壊しにくく井側の必要がないのであろう。全て最下部までの調査はできなかったが、上部の口径よりも中のほうが径が大きくなる中膨らみの形状を呈している。各々数メートルの深さまで掘削を行ったが、砂質の埋土が充填しており人為的に埋められた可能性が高い。そのため遺物もほとんど検出されなかった。また、危険なため井戸底までの調査や、断ち割りも行わなかったが、標高16.5m(O.P.)以上では水脈に達していない。そのため小形のものなどは井戸と異なる性格をもつ可能性もある。

狭い敷地内に江戸時代後半以降に非常に多くの井戸が設けられており、そのほとんどが人為的に埋められている。おそらく酒造などの商売に利用された井戸で、商品が不出来であったり、病気が流行るなどの理由で度々掘りなおしたものであろう。

- a. 井戸1:東半部で検出されたもので、一辺約130cmの歪な隅丸方形掘方をもち、約75cmの深さではやや口径を拡大して一辺約145cmと四隅を東西方向へ突出させて方形に掘削し、この部分に切り石の方柱材を組んでいる。下部は直径115~130cmのほぼ円形に掘り込んでおり、素掘りのままである。所謂井桁状に組んである石材は、全周に巡らせている幅10~20cmの段状の掘り込み上に組まれている。各々約75×13×13cmの大きさの2本の石材を繋いだ東西方向の石材は、四隅の10~15cmの深さで掘り込んでいる横穴にその先端を入れ込んでいる。約95×13×13cmの大きさの南北方向の石材は、東西方向の石材先端よりやや内側で組まれている。石材の組み合わせは相欠き継ぎで組み合わされている。方形に組まれた石材と掘方との隙間には河原石や瓦片が詰め込まれ、一部コンクリートで補修されている。井戸瓦製の井側はこの石材の上面に二段にわたって互い違いに積まれており、各段には10枚が使用されている。井側の内径は約90cmである。井側の上面は掘方よりは突出しない。31.0×25.6×6.0cmの大きさの井戸瓦には「大瓦藤」銘が押印されている。
- b. 井戸3:西半部で検出されたもので、調査区の南側、屋敷表側に設けられている。電3に並んで配置されていることから建物内の炊事関係の井戸であったものであろう。検出面北側の掘方に接した位置に平たい石が2個並んでおり、釣瓶滑車を掛けた上屋構造物の礎石と思われる。直径約120mの掘方口径をもち、内径約90cmの円形になるように湾曲した井戸瓦を二段に積み上げている。この井戸瓦は約31.2×25.3cmの方形で厚さが約4.9cmのもので「金岡瓦宗」の銘が押印されている。互い違いに積まれた井側の下は所謂井桁状に方柱形の石材を組んでいる。東西方向の石材は地山を掘り込んだ窪みを利用して据えられており、南北方向の石材はその上に乗せられている。東西方向の石材の上面は南北方向の石材の上面より低くなるため、瓦3枚と壁土様の褐色土を交互に積み上げて高さを揃えている。更に下部の素掘り部分の直径は約110~120cmで楕円形を呈している。
- c. 井戸5: 西半部で検出されたもので、直径約145cmの口径規模をもつ素掘りの井戸で、約270cmの深度(約16.5 m O.P.) まで掘削した。
- d. 井戸6:西半部で検出されたもので、近代以降のコンクリート製の井側をもち、直径約105cmの口径規模の掘方内に内径約85cmのコンクリート井側を納めている。約216cmの深度(約16.8m O.P.)まで掘削した。
- e. 井戸9:西半部で検出されたもので、直径約180×200cmの非常に大きな口径規模をもつ。途中にビニールパイプの排水管が導かれており、近年では排水口として利用されていたらしい。埋土の上部には瓦などの廃材や左官こてなどが廃棄されていた。調査区内で最大の規模で河原石も多く出土しているため石積みの井戸であった可能性もあることから、調査区内では最も古い井戸或いは他とは異なった用途に用いられた井戸であったことが推測される。竃に近接していることから、酒造に伴う井戸である可能性が高い。約4mの深度まで(約15.0mO.P.)掘削したが、湧水点まで達することができなかった。
- f. 井戸10:東半部の撹乱坑底で検出されたもので、約100×80cmの楕円形の口径規模をもつ素掘りの井戸で、約180cmの深度(約16.6mO.P.)まで掘削した。
- g. 井戸11: 東半部で検出されたもので、一辺約100cmの中膨らみ状の方形掘方の口径規模をもち、 井戸1・3と同様の柱状の石材を井桁状に組むための掘り込みが四隅に掘られていた。検出時に は井側材は全て失われていた。約230cmの深度(約16.7mO.P.)まで掘削した。

- h. 井戸12: 東半部で検出されたもので、検出当初は柱穴として取り扱っていたほど小型の口径(直径約70cm)をもつもので、約130cmの深度(約17.6mO.P.)まで掘削した。最上層からほぼ完形の磁器椀が出土している。
- i. 井戸13:東半部で検出されたもので、検出当初は柱穴として取り扱っていたほど小型の口径(直径約80cm)をもつ素掘りの井戸で、約170cmの深度(約17.3 m O.P.)まで掘削した。
- j. 井戸14: 東半部で検出されたもので、約95cmの円形の口径規模をもつ素掘りの井戸で、約120cm の深度(約17.8mO.P.) まで掘削した。SE14が埋められた後に埋桶2が作られている。これら井戸12・13・14は比較的近接して設けられている。
- k. 井戸15: 西半部で検出されたもので、電1の前庭施設である方形の土坑(後に防空壕として利用) の南西隅で検出できた約70cmの口径規模をもつ素掘りの井戸で、土坑以前の掘削と思われる。深 さ約125cm(約17.4mO.P.)まで掘削した。
- 1. 井戸16: 西半部で検出されたもので、約100×115cmの楕円形の口径規模をもつ素掘りの井戸で、 約141cmの深度(約17.5mO.P.) まで掘削した。

4. 竃 (図版19~21)

電は全て西半部で検出された。平面形態が円形を呈するものが2基づつ並んでいるもの(1・2)と 平面形態が方形のもの(3)、小型のもの(4)がある。また、この他に電2の西側で、地面が赤化し 高温が加わった場所が1ケ所あるが、撹乱坑のために破壊されている。これも電であった可能性が高い。 電1・2は重複して築かれており、電1は電2を埋めた開口部に作られている。電1・2とも2基の 電を並べて築いている。この平面形態が円形を呈する電は酒造における蒸米用と考えられる。

電1は東側に開口部をもつ2基の電が南北に連なって築かれており、北側を電1-1、南側を電1-2とする。電1-1と電1-2との間は防空壕を埋めているのと同様の撹乱土によって破壊されているため、先後関係は不明であるが、埋土の状況では電1-1が後で埋められた可能性が高い。しかしながら電1-2は電1-1の掘り方を切って構築されていることから、電1-1(古)から電1-2そして電1-1(新)の順に作り替えられた可能性が高い。伊丹郷町におけるこれまでの発掘調査で検出された酒造用の電は2基連基のものが多いため、この電1-1と電1-2は併存していたものであろうが、補修・作り替えを各々おこないつつ使用していたものであろう。

電1の北側には直径約10cm、深さ約50cmの小型の柱穴が3基並んでおり竃の上部構造に伴うものと思われる。この柱穴と平行するように竃1-2を切る形で2ケ所柱穴が存在することから、この柱穴群は竃1に伴うものと思われる。

電1は南北方向に長く掘り込まれている防空壕の北西部に築かれている。電の開口部とのレベルがほぼ一致し、開口部全面の防空壕底に炭や灰が堆積していることから、本来は電の炊口部として掘り込まれたところを防空壕として利用したものであろう。この平面形が長方形を呈する土坑は南北約5 m、東西約2 m、残存する深さ約1 mの規模をもつ。

a. 電1-1:直径約1.8m、深さ約1.2mの平面形が円形を呈する掘方をもっており、壁はやや内湾 気味に立ち上がる。その内側に内径約1.0mの円形にブロック状の石材を組んで電壁面の骨材としている。直方体或いは直方体の一面に溝を掘り込んだブロック材を下部では縦長に、最上部では平たい石材を横方向に積み上げている。この表面には壁土が貼りつけてあり、赤化していた。約75cmの深さの床面には偏平縦長の石材を置き、その両側には細長い土手状に盛り上がる。灰の

掻きだし等に備えたものであろう。開口部には板状の塊石を配している。

床面下には更に $3 \sim 4$ 面の焼土面があり、粘土を貼りつけることによって数度作り替えを行っている。掘方壁面にも一部火化した部分がある。掘方とブロック材との間には極細砂や粘土を 2 層貼りつけていることから壁面での作り替えは 2 回以上されたものであろう。 1 層目の壁面には火化した痕跡は認められなかった。床面の焼土の内、上 2 層はブロック材を積み上げた壁面に伴うものである。最終的な篭 1-1 の規模は直径約1.0 m、深さ約0.9 m となる。埋土から漆器椀が出土した。

- b. 電1-2:電1-1の南側に接して構築されており、直径約1.4m、深さ約0.8mの規模をもつ。開口部には拳大の石が3点並べてあり、内部の壁面等にも一部石材が用いられるが、電1-1のように全体に組み上げるものではない。壁面・床面とも単一の火化面しか検出されなかった。開口部の反対側の上面には3ケ所の火化した部分が放射状に並んでおり、3方向に煙出をもつ構造である。この煙出は上部を削平されているが、直径60~70cmに掘り込んで白色シルトを貼りつけて構築している。
- c. 竈 2-1:竈 1-1 にその開口部を削られ、埋土の上面に竃 1-2 の煙出しが作られている。掘方の直径は約1.6mあり、その内面に極細砂質の壁材を塗り込んでいる。壁材は地山を掘り込んでいる部分は15cm以下の厚さであるが、竃 2-2 に接する部分では約40cmと厚くなっている。竃の内径は約1.1m、残存する深さは約90cmで、底面には幅20~30cm、深さ約20cmの二条の溝を平行して設けている。
- d. 電2-2:東西約1.5mの開口方向に長い楕円形の掘方をもつもので、内面に貼付ける壁土もその方向が厚く最高45cmの厚さになる。内径約85cm、深さ約50cmの規模をもち、底面には幅約20cm深さ10cm程度の2条の溝を設ける。電1-1にその開口部を削られ、埋土の上面に埋甕8が作られている。
- e. 電3:調査区南端の溝3に隣接して築かれており、また、昆陽口から東へ延びる道に面した箇所に位置する。確認調査時のトレンチにより、燃焼室の西側半分は削平されていた。また、上部構造は南側の燃焼室の立ち上がりが一部遺存していただけでほとんどは破壊されており、燃焼室の床面及びそれより深い焚口が遺存していたのみである。

この竈は、方形に地面を掘り下げて構築された半地下式の竈であり、掘方の規模は東西2.7m、南北は西側が撹乱を受けているため不明であるが、燃焼室の西端までを復元すれば約2.2m以上と推定される。西側に直径約0.8mの燃焼室を3基設けている。3基の燃焼室に対応するように、東西方向の炭層の堆積が、床面直上で3本確認されたため、焚口は東側であると判断した。焚口の床面は竈の床面と比べて10cm前後低くなっている。

燃焼室床面は、還元色を呈しており、この部分の厚さは約1cmを測る。また、地山が熱により 赤変色した部分は燃焼室床面下で約20cmを測る。燃焼室を構築するにあたっては黄色粘土を壁材 として使用している。

- f. 電4:約70×100cmの平面形が楕円形を呈した小型のもので、上部構造は失われているため不明であるが他の竃同様強く火を受けている。また、水琴窟14によって一部が壊されている。
- 5. 埋甕等〔土器埋納〕(図版22·23)

土器を埋納したものには、胞衣壷-小型の壷や甕を口縁部を上にした正位置で据えたもの(1~4)・

埋甕-大型の甕を正位置で据えたもの($5\sim11\cdot15$)、水琴窟-大型の甕を口縁部を下にした倒立状態で据えたもの(12)がある。

- a. 胞衣壷1:所謂火消壷形の土師質土器であり、土間状の貼り床に平面形態が50cm×55cmの楕円形を呈した土坑内の中心を外れた位置で、正位置状態で埋設されていた。胞衣壷と考えられるが、蓋となるものは検出されていない。機械掘削時に失われた可能性もある。
- b. 胞衣壷 2~4:高さが20cm以下の形態の異なる小型の容器が3点並んで検出された。機械掘削の際に検出されたため全容は不明であるが、長径約75cmの楕円形をした土坑内に口縁部の高さを揃えて据えられていたと思われる。土坑の底は水平ではなく胞衣壷3はほぼ土坑底に接地しているが、胞衣壷4・5は埋土である暗褐色シルト層内に底があり、胞衣壷5では土坑底から10cm近く浮いている。口縁部から胴部最大径近くまでは、土間の貼床と同様の浅黄色中砂混じり極細砂で埋められている。
- c. 埋甕5~11・15;大型の甕を正位置で据えつけたもので、上部を失った底部のみの出土である。 内面に漆喰などを塗り込んでいるものが見られ、漏水防止を計っていることから、ほとんどが便 甕と思われるが、なかには意図的に底を割って穴をあけているものも見られる。そのなかで、埋 甕8は竈2が完全に埋没した後に据えられていることから、屋敷内の構造が大きく変化したこと を示しているものと思われる。また、調査区の北西端で近接して設置されている埋甕10・11は埋 桶11・12を埋めた上に据えられており、便槽を木製の桶から陶器製の甕に作り替えた状況を示し ている。埋甕10・11や埋甕5・6は便槽として対で据えつけられたものであろう。
- d. 水琴窟12:甕を倒立させて埋納したもので、井戸3や小礫を敷きつめた土坑101の近くに配されていることから水琴窟と考えられる。検出時には上部を失っており、また中からも別の容器を見いだせなかった。直径約50cmの円形の土坑内に小石を数個置いた上に甕を倒立させている。
- e. 水琴窟13・14:円形の浅い土坑底に軒平瓦や平瓦を据えたもので、水琴窟の下部構造のみが残されたものと考えられる。

6. 埋桶 (図版24)

埋桶は15基確認しているが、桶本体の木質の痕跡が確認できた遺構のみを取り扱っているため、土坑 や柱穴としたものの中にもいくつか含まれている可能性がある。

分布状況をみると、東半部の中央に南北に走る地山を削った浅い溝状の落ち込みの周辺では、埋桶1~8の埋桶が分布している。中でも溝状の落ち込みの底には埋桶1~3といった直径が35cm程度の比較的小規模の埋桶が集中して検出された。また、調査区西端の北端部・南端部でも大型の埋桶が集中して検出された。これらの大型の桶を埋設した埋桶4・5や11・12、13・14は対になって据えられていたものと考えられる。その性格は埋桶11・12で明らかなようにほとんどが便所の汚物溜であり、後に陶器製の便甕に取って替わられたものと思われる。便所はやはり、屋敷裏に集中するが、埋桶13・14のように表側に面した位置にも設置されている。それが、時間差による屋敷内の構造変化によるものなのか、同時期・同一屋敷内に例えば主人用・使用人用・来客用などの区別があったものかは判断する材料をもたない。また、これに対して小型の埋桶は水溜や胞衣桶などの別の性格を有するものと思われる。

- a. 埋桶1:埋桶1~3は溝状の落ち込みの底で互いに近接して検出された。埋桶1は直径約45cm、 深さ約15.5cmの掘方内に直径約35cmの小型の桶を設置したもので、側板の痕跡が確認できた。
- b. 埋桶2:75×65cmの楕円形の掘方内の偏った位置に、直径約35cm、高さ約15cmの小型の桶が据え

られていた。側板の痕跡及び底板の木質が残存していた。

- c. 埋桶 3:90×73cmの隅円長方形の掘方内に、直径約55cm、残存高約31cmの小型の桶が据えられて おり、側板の痕跡が確認できた。埋桶 3 は井戸14が埋められた後に構築されている。
- d. 埋桶 4・5:隣接して作られており、ともに直径約120cmの掘方内に各々直径約75cm、残存高約52cm 及び直径約80cm、残存高約61cmの大型の桶が据えられており、側板の痕跡が確認できている。井戸1との切り合いは井戸1が先行するものと考えられる。
- e. 埋桶6・7:ともに溝7によって切られているが、直径70~80cmの掘方内にともに直径約45cm、 残存高約30cmの小型の桶を据えている。
- f. 埋桶8:直径約70cmの掘方内に直径約45cm、高さ約28cmの小型の桶を埋置しているが、掘方の底は更に30cmほど深いものである。
- g. 埋桶9: 西半部で検出された大型のもので、直径約90cmの掘方内に直径約75cm、残存高約47cmの 大型の桶が据えられており、側板の痕跡及び底板の木質が残存していた。
- h. 埋桶10:直径約75cmの掘方内に直径約60cm、残存高約28cmの大型の桶が据えられており、側板の 痕跡及び底板の木質が良好に残存していた。
- i. 埋桶11・12:調査区の北西端で検出された。埋められた上に便甕である埋甕9~11が据えられており、また、掘削中の埋土の状況から便桶として用いられていたことがわかった。糞尿を溜める容器が木製から陶器製へと変化したことが伺われる。埋桶11は直径約130cmの掘方内に直径約100cm、残存高約65cmの大型の桶が据えられており、側板の痕跡が確認できた。埋桶12は直径約120cmの掘方内に直径約100cm、残存高約68cmの大型の桶が据えられており、側板の痕跡及び底板材の一部が確認できた。
- j. 埋桶13・14:調査区の南西端で近接して作られており、埋桶13は直径約120cmの掘方の中に直径約100cm、残存高約62cmの大型の桶が据えられていた。埋桶14は直径約80cmの掘方の中に直径約70cm残存高約35cmの大型の桶が据えられていたものであろう。埋桶13・14はともに直径約150cmの大型の円形の土坑を埋めた上に作られており、この土坑では桶本体の木質の痕跡が確認できなかったがその規模・構造から見て埋桶を作り替えた可能性がある。
- k. 埋桶15:調査区の北西隅で検出され、直径約100cmの掘方内に直径約85cm、残存高約51cmの大型の桶が据えられていた。

7. 土坑 (図版23・24)

- a. 土坑8:隅丸長方形の平面形態をもつもので、検出面から約15cm下に灰褐色の貼床が認められ、一部が火化していた。その上部には炭・灰層や焼土及び最上層の壁材様の灰白色シルト層が堆積していることから、天井或いは壁構造をもった竃状の火を用いる施設であったことが推測できる。しかしながら、他の竃と比べて小型であり、火化の度合いは少ない。また、土坑の東半部に分布する貼床を取り除くと深さ約85cmの深い土坑となり、下層の埋土はゴミ穴に類する土器片の混じった不均一なものである。
- b. 土坑34:溝4の西側で検出された。上面は一部撹乱で破壊されているが、本来は約60×80cmの平面形が長方形を呈する土坑である。約40cmの深さをもち、その埋土の最下層には灰が堆積している。また、埋土の中層には炭層が見られる。
- c. 土坑101:確認調査の際に検出され、井戸として認識されていたものである。直径約180mの円形

の掘方の中央に更に直径約110mの範囲で円礫が詰め込まれていた。近くには篭 3 や水琴窟が設けられている。

小 結

第75次調査区では溝3を挟んで東西の2棟の町家遺構の一部の調査を実施できた。これからは主として、18世紀後半から19世紀にかけての遺構であるが、洪積段丘の地山面に遅くとも18世紀前半から発掘調査直前に解体された家屋の時期までほぼ同一面で、しかも解体の際にかなり撹乱されている状況で遺構が検出されていることから、同時にどの遺構が併存しているかを峻別することは困難であった。

溝3の西側(西半部)では土間状の貼床面に礎石建物や胞衣壷と思われる土器埋納が検出された。土間部分の北西隅や南西隅では便所と思われる埋桶が検出され、特に北西隅の埋桶はのちに便甕である埋甕へと作り替えられている。井戸は調査区全体で12基検出されているが、この土間周辺には井戸は設けられていない。

土間部分の東側では酒造関連と想定される電 $1 \cdot 2$ が検出され、近接する大型の井戸 9 も同様に酒造に関係するものであろう。電1 は電2 に重複しており、作り替えと思われる。電1 の焚き口前庭部は横長の長方形の土坑が設けられており、のちに防空壕として再利用されている。また、電2 上面には便所と考えられる埋甕が据えてあることから、敷地利用が変化したことが伺われる。

溝3の東側(東半部)では西半部と同様、礎石建物が存在しているが、便槽とは性格が異なる小型の 埋桶や井戸が集中しており、西半部の酒造関連の遺構群とはやや様相を異にしている。この地区のゴミ 穴と思われる土坑などからは鉄滓や灰青色のチャート製の火打石が出土しており、鍛冶関連の性格を想 定することも可能である。仮にそうであるなら、小型の埋桶は鍛冶に伴う水溜めとしての性格を、また 火を受けた痕跡が認められる土坑8なども関連の遺構として考えることが出来よう。

井戸瓦に見られる「金岡瓦宗」の銘は有岡城跡第32次調査出土のものや近衛家会所に用いられた屋根 瓦にも見られる。伊丹市宮ノ前の金岡院に残る猪名野神社祭礼記録の天保十二年(1841)の項に「金岡 瓦屋宗次郎息」と見られることから、19世紀中頃には在地の瓦屋が盛んに屋根瓦・井戸瓦を生産してい たことが伺われる。



有岡城跡の現状(東西から)

第4節 第99次調査の遺構

遺構の概要

この調査区は東隣の第114次に調査区と共に本来一連の敷地であったが、調査の都合上第99次と調査 面積約150㎡の第114次に分割し、調査を行った。第99次の調査区は西の境を未買収地境までとし、東を ほぼ114次調査の溝1までの約300㎡を調査区とした。

検出された遺構は、近現代のものから18世紀代まで遡るものが確認できるが、遺物の中には17世紀に属するものも極わずかに存在する。厳密には、これらの遺構は二枚の遺構面に分かれているようであるが、その間隔が厚さにして10cm以内とわずかであるうえに、既存の建物を解体する際に遺構面近くまで表土を攪拌しているために、プライマリーな包含層が局部的にしか残存していない状況にあった。そのため、すべての時代の遺構を灰黄色の地山面で検出する結果となった。また、一部には建物の礎石と思われる平坦な面を有する河原石が確認されたが、既存建物の解体に伴い、本来の位置から大きく移動されていた。埋桶・埋甕・井戸・防空壕等の他の遺構の分布状態から、調査区の南側と北西部に建物が存在していたのではないかと想定される。

その埋桶・埋甕・防空壕は、調査区の中央部を中心として、「+」字状に分布する傾向にある。これは要するに建物を避けた場所に設けた結果であり、この部分が庭等屋外の領域に相当するものと思われる。防空壕は第2次世界大戦時のものであるが、埋桶・埋甕は18世紀後半と19世紀代のものが大多数を占めている。そうした中に、18世紀代の土壙が少数散在する遺構の状況にある。

調査区の西辺に沿って検出された溝 3 は19世紀代の遺構と考えられるものであるが、ちょうど現在の敷地境とも重複する位置に当たっているため、本調査区の敷地割りが少なくとも19世紀には現在と同様な状態にあったものと思われる。また、北から池状遺構、防空壕 2・3・4、さらに室状遺構がほぼ南北に一直線に配置されているため、18世紀後半から現代に至まで、この南北のラインが本敷地の土地利用の基軸であったことが分かる。ただ、残念ながら調査区の制限から東西方向の敷地境・基軸ラインについては、今回の調査結果からは抽出するに至っていない。

1. 溝

明確に溝と識別できる遺構は、調査区の西辺に沿って南北方向に走る溝 3 のみである。他に石列を伴うものなどがあるが、こらは石列に伴う布掘り状の遺構と考える。

a. 溝2:調査区の西辺に沿って南北方向に通り、両端とも調査区外へと延びる。幅に関しては、その西半部が未買収地(第114次調査区)内に入るため全幅を確認し得ていないが、最大で約60cm分を確認している。深さは最大約50cmを計り、断面は「U」字を呈するが、北半部の深度は20cmと浅くなる。内部からは、19世紀代の陶磁器が出土する。建物2はこの溝が埋った後に礎石を置いて建上げている。

2. 建物

既存の建物解体時の地表面の攪乱が著しく、建物の礎石等はほとんど元位置を保っていないため、礎石建ち建物については、わずかに残存した礎石の根固め石等から配置・規模等を復元した。その結果、礎石建ての建物に関しては2棟分を復元することができたが、それ以前の掘立柱形式の建物址に関しては存在を確認することができない状態にある。

- a. 建物1:調査区の北西部に位置する南北方向の建物と思われる。桁行の北側は調査区の外へ伸びるため、現状で約4.6m分を検出している。梁間は約4mを測る。桁行の基礎は深さ約5cm程度の浅い溝を堀り、約90cm間隔に人頭大の石を据えていたものと思われる。東側の桁行はその溝のみが残存し、礎石は欠損している。南側の梁方向に関しては後世の削平を受けているため、その構造を解明することはできない。19世紀から幕末に属する土器を出土する土坑が埋まった後に礎石が据えられているため、明治期以降の建物跡と思われる。
- b. 建物 2:調査区の南半を占める大規模なものであり、後述する室状遺構を中心としてそれを覆うように建てられていたものと思われる。建物の礎石はその多くを消失しているが、辛うじて室状遺構の東側に数個・南北方向三列分を、さらに調査区の西辺部で二個・南北方向一列分を確認している。こうしたことから、この建物が礎石建ちの建物であったことが知れる。その残存する礎石から推定して、室状遺構の中心ラインの北延長線上約90cm(半間)の個所にある土坑(礎石据付け穴)から東側に約270cm(1.5間)・約190cm(1間)・約180cm(1間)の三列に南北方向の柱列があったものと推定される。このままさきの室状遺構の北側の土坑を中心として西側に反転すると、調査区の西辺部に二石残存する礎石に最も外側の柱列のラインが乗ることとなる。こうして復元できる建物の東西方向の規模は、約13.4mとなる。南北方向に関しては、復元した礎石列の配置から推測して、室状遺構の北小口部に沿う箇所に北から2列目の柱れつが復元できる。北端の柱列との間隔は、前記したように約90cm=半間となる。2列目以降は約270cm(1.5間)、約180cm(1間)となることが知れる。その南側は調査区外となり、桁行は現状で約7mを測る。ただ、調査区の南5mには江戸時代から継続された東西方向の道路が通るため、最大でも南北方向(桁行)は12m以内となる。19世紀代の溝2が埋没した後に礎石が据えられているため、幕末以降の建物址と考えられる。

3. 井 戸

調査区の中央部に1基を確認しているが、内部に現代の瓦片が多量に投棄されて埋められた状態になっていることから、最近まで使用されていた井戸と判断し、内部の掘削は放棄した。したがて、井戸の深さ等に関しては確認していない。

a. 直径約2 mの、平面円形を呈する。上記のとおり、内部は現代の瓦で充塡されているため、最近になり放棄されたものと考えられるため、約1 m程度掘削した時点で内部の調査を中止した。上面より1 mまでの範囲には井戸枠等の内部施設は確認できず、素掘りであるものと思われる。また、外部にも覆屋等の施設の痕跡は確認されていない。

4. 埋 甕 (図版26)

土壙内に甕の破片が残存し、埋甕と想定される遺構は数箇所確認されているが、土壙内に甕が残存し、明確に埋甕と判別できる遺構は3箇所のみである。いづれも調査区内に散在しているが、明確な建物の配置が確認できないことから、その性格は確定しがたいが、従前の調査結果からみて便槽と考えるのが妥当と思われる。当時の屋敷地内の構造からみて、埋甕の存在する箇所は屋内ではなく建物に近接、もしくは隣接する場所と考えられる。

a. 埋甕6:調査区の北東部に位置する。径約50cmの円形平面に、深さ約15cmの擂鉢型の断面を呈する掘方をもつ。甕は上方3分の1以上を後世の削平のために消失し、残存する部分も細片に割れている。18世紀代に属するものである。

- b. 埋甕82:調査区のほぼ中央部にあり、径約60cm、深さ約20cmの断面が擂鉢型を呈する掘方となる。 甕の上方部分は後世に削平され、消失する。甕は底部の部分を残すのみであるが、壙底にほぼ水 平に据え付けられている。18世紀代の時期が考えられる。
- c. 埋甕88:掘方は長径約65cm、短径約50cmの不正円形を呈する。深さ約20cmを測る掘方の底部は平底となり、壁は小さく開きながら立ち上がる。壙内には陶器甕の破片が一部残存するが、旧状はほとんど止めず、壙底からも遊離しているため、本来の据えられた状態にはないものと思われる。埋桶等が集中する調査区の南西部に位置する。18世紀後半から19世紀に属するものである。
- d. 伏甕:調査区の北側中央部に位置する。東西約310cm、南北約420cmの隅円方形平面を呈する大型の土壙内の、中央西寄りに施釉陶器甕 (255) が伏せられた状態で置かれている。この土壙は黒褐色のシルト質混じりの土によって埋められていることから、池状の施設に伴う遺構と考えられる。甕 (255) は土壙の底部に口縁部を接するように、ほぼ水平に置かれている。上方にあたる底部部分は後世の削平により欠損するため、どのような形状であったかを判断することはできない。また、遺構全体の状況から判断して水琴窟の可能性も考えられる。この甕から判断して、18世紀後半から19世紀に属する施設と考えられる。

5. 埋 桶(図版26~28)

素掘りの土壙に、径約90㎝前後の桶を据え付ける場合を基本的なパターンとしている。底板の一部を 残存する場合は桶の遺存状況が良好な方であり、多くの場合はその痕跡を土層断面等から確認できる程 度である。調査区内での分布状況をみると、調査区の中央部に集中する傾向がある。周辺域の過去の調 査状況では、この種類の埋桶が建物の裏側に相当する場所から確認される場合が多いいため、調査区の 中央部が裏庭あるいは中庭の部分に相当することが分かる。その性格についても明確に根拠付けるもの は確認できなかったが、従前の調査結果から判断して便槽として利用されていたものであろう。

- a. 埋桶66:掘方は直径約100cm、深さ約60cmを測る。掘方の東側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、 西側はやや開き気味となる。壙底は平底であり、そこに桶が東の壁に接するように配されている。 ただ、桶は底板部分はまったく無く、側板も底部から約10cm分が辛うじて残存する程度で、遺存 の状況は極端に悪い。内部より19世紀代の遺物が出土する。
- b. 埋桶71:直径約130cm、深さ約60cmを測る。壙壁はわずかに開きながら立ち上がる。桶はまった く遺存していないが、底板の残骸と思われる木質が極わずかに認られる。断面土層の堆積状態か ら桶の部分を推測できるが、これによると桶の底径は約90cm前後と推定される。内部からの遺物 の出土がほとんどないため明確な時期は判断できないが、19世紀代の遺構を切り込んで構築され ているため、おそらく幕末から明治期の遺構と考えられる。
- c. 埋桶80:直径約70cmの平面円形を呈する、小型の埋桶である。深さは約20cmを測る。断面は中程で屈曲する二段堀状となっており、桶の底径は約40cmとなる。壙底には底板の一部と思われる底板が木質として残存する。遺物の出土がないために、明確な時期は決定できない。
- d. 埋桶82:底部は平底で、壁は極わずかに開きながら立ち上がる。平面形は径約110cmの平面円形を呈する。桶の側板はほとんど残存しないが、底板は概ねが残っており、その1枚には墨痕を認めることができる。壙内には無釉陶器甕(263)を中心として多くの陶磁器が投棄された状態で出土している。内部から出土した遺物から判断して、18世紀後半から19世紀の遺構と考える。
- e. 埋桶89:直径約45cmの小型に属するものである。深さは約15cm分が残存する。底径は約40cmであ

- り、擴底部分には底板の木質部分が残存するのみで、遺存状況は著しく悪い。掘方の断面は、東側はほぼ垂直に立上がり、西側はやや斜めとなる。18世紀後半から19世紀に属するものである。
- f. 埋桶94:平面形は直径約100cmの円形を呈する。壁はやや開き気味となる。壙内には、掘方いっぱいの大きさの桶が据えられている。桶の底板はほぼ完全に残存し、6枚の板で形成される。側板は底部から約20cmの高さまでは残存するが、それより上方部分は腐食する。桶内部から出土する遺物は、いずれも18世紀後半から19世紀に属するものである。
- g. 埋桶100:掘方の平面形は不定楕円形を呈する。短径側は約140cmを測るが、長径側は他の遺構と切り合うため現長で約160cmを確認できる。掘方の西側の壁はほぼ垂直となるが、東側は大きくゆるやかに開く。掘方の底径は約110cmであり、そこに桶の底板のみが残存する。底板は5枚からなり、径約90cmを測る。底板の周囲には、側板の痕跡を示す変色部分が認められる。この部分を含めると、桶の径は推定95cmになる。時期的には、19世紀代に含まれるものである。
- h. 埋桶101:掘方の直径約110cm、深さ約55cmを測る。掘方の断面はいずれもほぼ垂直な状態にある。 桶は掘方の西壁に接して置かれており、桶の部分のみ壙底部が一段低くなっている。桶部の底径 は約85cmであり、底板の一部が残存する。東側の裏込め部分は、しっかりとした版築状に埋め戻 されていることが知れる。内部から出土する遺物は、18世紀後半から19世紀に属するものである ため、その前後に構築されたものと考えられる。
- i. 埋桶104:掘方の平面形は不正円形を呈する。直径は約50cm、深さは約14cmの小型の埋桶である。 桶も擴底の径から推定して、直径約35cm程度であったものと推定される。擴底部に密着して4枚 の底板が残存するが、周辺の腐食が著しい。側板はまったく残存しない。出土する遺物が少ない ため時期の判断が難しいが、おそらく幕末を中心とした時期を考えることができる。
- j. 埋桶148: 直径約95cmの平面円形を呈する掘方を持つ。掘方の壁はほぼ垂直に立上がる。深さは 約80cmを測り、本調査区の中では比較的深く堀込まれたタイプとなる。桶の底板と思われる木質 が残存するが、壙底からかなり浮き上がった状態で確認されている。土層断面の状況からは桶の 大きさを推察できないが、ほぼ掘方いっぱの大きさのものが納まっていたもと思われる。19世紀 代に属する遺構である。
- k. 埋桶153:掘方の直径約100cmを測る。壁部は概ね垂直に立ち上がるが、南側の一部が二段堀状となる。 壙底に一部残存する底板から桶の口径は約70cm前後と推測されるが、断面の土層状況が符合しないことから、一考を要する必要があるかと思われる。19世紀代の時期が与えられる。
- 1. 埋桶154:掘方の口径は、約100cmの円形平面となる。壁は極わずかに開きながら立ち上がるが、 底から約7cmのところで段を持つために、二段掘り状となる。底径は約75cmを測る。ほぼ完存の 状態にある底板は5枚からなり、壙底径いっぱいの大きさの桶であったことが分る。側板の部分 はまったく遺存していない。幕末を中心とした時期の遺構である。
- m. 埋桶155:掘方の上辺部分は斜めに小さく広がるため、直径は約115cmとなる。ただ、その下方の 壁部はほぼ垂直に立上がる。壙底には底板の一部が残存し、断面土層等の状態からも桶の直径は 約85cmであることが分かる。桶は掘方底部の北に寄って据えられている。埋桶147と重複するた め遺物が混乱している可能性もあるが、概ね18世紀代に属するものである。
- n. 埋桶156:平面形は直径約70cmの不整円形を呈する。壁部はほぼ垂直に立ち上がり、壙底は平底である。桶は壙底のほぼ中央部に置かれており、桶の部分のみ壙底が一段低くなる。桶底の直径

は40cm強と考えられ、底板の一部が残存する。遺物が少ないため明確な時期は決定できないが、 18世紀代の遺構を切り込んで設けられているため、それ遺構の時期に属するものと思われる。

6. その他の遺構

その他の遺構として、防空壕・室状遺構等が確認されている。今回の調査区では4基の防空壕が確認された。そのうち3基は調査区の中央部にあり、1基は北側の東辺部にかかり、東半分は第114次調査区へ入ってしまっているため半分のみの調査となった。位置的には埋桶等が集中する箇所と重複していることから、いずれも屋敷の裏庭部分に設けられたことが想定できる。平面形は方形が基本であり、方向的にも屋敷の地割りに即して設けられている。室状遺構は調査区南辺の中央部にあり、北端部は調査区の外へと伸びる状態で検出されている。

- a. 防空壕1:東半分は第114次調査区となる。西側の状況からみて、平面形は方形になるものと推定される。南北方向の長さは約330cm、東西方向は現状で約130cm分を確認できる。深さは約90cmであるが、北西隅部と南西隅部に東西方向約80cm南北方向約40cmの方形の段を作り出している。壁部はほぼ垂直に立ち上がり、その西側の壁の直下には、柱を立てていたと思われる直径約20cm程度の浅い4個の穴が、二ヶ所の方形の段の間に設けられている。同様に東側の調査区境にも、柱列の痕跡が残存してる。また、北西隅部の方形の段の東側の床面には、一辺20cm前後の正方形の穴が設けられているが、その性格は判断できない。
- b. 防空壕 2:調査区の中央やや北寄り、水琴窟を据えた池状遺構の南に存在する。各辺とも約180cm の正方形の平面形を呈する。床面の深さは約80cmであるが、床面には防空壕1のようは柱の痕跡 は認められない。ただ、北東の隅が東西約40cm、南北約70cmほ長方形に一段低くなり、その北端 に幅約20cm、長さ約35cmの木製の箱が収められている。木材部は遺存状態が悪く木質のみが残存するが、周囲に拳大の石を置き押さえとしている。木箱の内部には、埋土が充填しているのみで、その他の遺物等は確認されない。
- c. 防空壕 3・4:調査区のほぼ中央部に位置する。その構造上の違いから2つの防空壕に区分できるが、接続してしまいひとつの防空壕として機能していたものと思われる。西側に位置する防空壕 3 は、「「」型の平面形を呈する。本体部分の南辺の長さが約180cm、南北の長さが約430cmを計り、その北半分が東側に約60cm張り出す形態となる。床面の深さは約60cm程度と浅く、南辺と東辺の南半部には幅狭い犬走り状の段を有する。本体部分の四隅と、南北辺の中央箇所には柱穴の痕跡があるため、上屋が掛かっていたことが知れる。床面には、北東隅の柱穴・東辺中央の柱穴・西辺中央の柱穴をつなぐように浅い溝が逆L字に設けられている。

防空壕4は、防空壕3とまったく逆の平面形態となる。ただ、本体部分は東西・南北とも約200cm の平面形正方形であり、その南東の隅部が南側に約80cm張り出す格好となる。この張り出し部分は内に向かって緩やかにスロープしており、入り口部分であった可能性もある。本体部の四隅と各辺の中央には柱穴が設けられているため、防空壕3と同様の施設にあったものと思われる。こちらの床面にも、中央同志、西辺同志の柱穴を結ぶように浅い溝が設けられている。

防空壕3の南北方向の長さは防空壕1のそれと一致し、防空壕4の規模はほとんど防空壕2と同じであるため、両タイプが合体した形態と考えられる。ただし、いずれの防空壕とも深さが100cm以内と非常に浅いため、別の用途(囲い室)などの機能を考える必要があるのかもしれない。

d. 室状遺構:先に記したとおり、調査区の南辺の中央部に南北方向に設けられている。そのため、

遺構の南端は調査区の外となり、全体の規模を知ることはできない。現状で幅約340cm、現長約560cmの規模を測る。深さは260cm前後と深いが、その間に二段のテラスを設けるため、最終面の幅は約80cm程度とかなり狭くなる。内面は斜面部・テラス部含め、全面漆喰で固められている。内部には近世以降の瓦片などが大量に投棄されていたため、従前の建物に伴う施設と想定される。

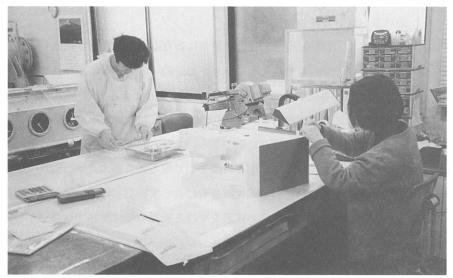
小 紅

今回の調査では、17世紀から幕末・明治期初頭までの遺物を出土する遺構を多数確認することができた。こられの遺構のうち、18世紀後半以降の遺構が多数を占めるが、特に18世紀後半から19世紀に属するものがその中心となっていることから、この時期に調査区の地域が居住域として積極的に利用されたことが想像できる。このことは、現存する伊丹郷町関連の古絵図からも傍証することができる。

検出されは遺構では、埋桶を中心として非常に多くの埋設遺構を確認している。その性格は従来の数次にわたる調査の結果から判断して、便所等の施設を考えることが最もが妥当かと思われる。一部には埋設された桶の底板等の部材が残存するものをみられるが、これらは19世紀以降の比較的新しい時期に属するものであり、数量的に多数を占める18世紀代のものはそうした部材をほとんど残していない状況にある。またその分布状態は、調査区の中央部分に集中する傾向があるため、この埋桶等が集中する調査区の中央部分が敷地の庭部分になっていたものと想定される。ただし、その分布が明確に中央部分に限定される状況にないため、建物自体の配置については別途考慮する必要があろうかと考えられる。

また、調査区の西辺に沿って屋敷地を区画する南北方向の溝状遺構を一条検出している。この溝状遺構は、元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図等から推察して、その西側の敷地との境界を示している。この敷地堺に関しては、元禄七年以来現在に至るまで毅然としてその位置が守られていたことが知れる。

今回の調査区は約300㎡と狭いため、屋敷地の全域をその対象とはしていない。そのため、ひとつの 敷地内の土地利用についてはその変遷を明確にすることはできなかったが、今後の検討のための資料を 提示するものである。



出土鉄器の処理状況

第5節 第114次調査の遺構

遺構の概要

第114次調査区は第99次調査区の東隣に接して設定されており、東辺を南北に走る戎町の通りと、南辺を東西に走る昆陽道に面した角地に位置した地点である。今回の調査では第99次調査との関連性を重視し、調査区西辺の幅1.5mの範囲で第99次調査面を再度検出し、約150㎡の調査を実施した。

検出した遺構は溝6条・建物基礎(石列)1箇所・柱穴23個・かまど1基・胞衣壷1個・井戸4基・ 土壙41個・防空壕4基を数える。時期は現代(調査前に解体された家屋に伴う施設)・19世紀後半~20 世紀(戦中)・19世紀前半・18世紀後半・18世紀前半・17世紀後半・17世紀前半の7時期にわたる。

これら各時期の遺構面は、地山面上から形成が始まり、基本的には火事と片付け・整地(盛土)の段階を踏んで嵩上げされ、現地表に至っているが、家屋解体に伴うゴミ穴や防空壕の掘削が全体の6割におよび地山以下まで完全に掘削され、遺構自体が消失している。また、残りの部分の大半についても、家屋解体時の地均しによる削平を激しく受けており、地山直上より現代の撹乱土が堆積している。調査区において純粋な層序を残す部分は全体の2割に満たない状態であった。このため、各遺構面の精査は叶わず、溝01・溝02部分を中心とした部分を局地的に上層で調査(第1面)した以外は地山面上で一括して遺構検出・精査を行った(第2面、なお、遺構配置図はまとめて示した。)。但し、幸いにも調査区の北東辺~北辺部分は比較的撹乱されておらず、断面では比較的良好に層序を追い、各時期の遺構面をある程度析出することが可能であった。以下、層序と遺構の配置の概略を述べてゆく。

北辺部の撹乱が比較的少なく、層序が健常な部分において標高17.9m~標高17.4m間において4枚の 比較的安定した遺構面が認識できた。

第1遺構面……明治時代~昭和時代 (家屋解体以前)。土間のたたきが確認される。

第2遺構面……19世紀前半~19世紀中頃。第1遺構面下約5 cmにあり、漆喰を貼る溝を伴う。上面は 炭層に覆われている。

第3遺構面……18世紀後半~19世紀前半。第2遺構面下約10cm~20cmの厚みの整地土下にあり、部分的に厚い炭層に覆われている。

第4遺構面……18世紀前半・17世紀後半・17世紀前半にわたる。地山面上で検出している。第3遺構 面下約20cmの厚みの整地土下にあり、部分的に厚い炭層に覆われている。

検出できた遺構は平面では、各時期を通じて北半と南半に2分できる(北半の敷地と南半の敷地)。調査区の中央部には幅約3mにわたり東西方向に現代の井戸01と防空壕を除き遺構が存在しない空白部分が存在する。この部分が南北の敷地の境と認識できる。また、調査区の西端には溝01・02・03が南北に走る。溝01・02は共に18世紀後半以降に素堀りの溝として掘られ、幕末には石組み・漆喰貼りの溝に変わってゆく。この溝が第3遺構面以降の第99次調査地において検出した遺構群との東西を分ける敷地の境であったと考えられる。第3遺構面以前の東西を分ける敷地の境は明確ではないが、調査区南半での地山面の出現レベルが溝周辺を境に西側に対して東側が約10~15cm低いことから、第3遺構面以前についても何らかの境が存在した可能性が考えられる。以上の南北・東西の敷地の境については、元禄7年の絵図・天保15年の絵図・大正4年の字限図・昭和57年の家屋解体直前の間取り図においても確認することができ、絵図等からも南北・東西の境ともに17世紀代から現代に引き継がれていることが伺える。

1. 溝(図版32)

調査時に溝としたものは9本存在するが、その内、溝04・溝05・溝06は建物の基礎と考えられる石列であり、後述する。また、溝07は前年度の調査区に属し、時期等は不明である。

a. 溝01:調査区西端を南北方向に走る。北半の敷地に伴う。第3遺構面から第1遺構面まで継続して使用されており、第3遺構面では素堀り、第2遺構面では石組の後、底に漆喰を貼り、第1遺構面へと継続する。

第3遺構面の素掘り溝はU字形の断面、幅60cm前後・深さ20cmを計り、N16°W前後に走行をとる。第2遺構面の石組はU字形の断面、西肩にのみ石を配し、東肩は素掘りのままとする。幅30cm・深さ15cm以上、N14°Wに走行をとり、心持ち東へ振る様になる。漆喰は5cm程埋没した時点で東肩を中心に貼りつけ幅30cm・深さ20cmのV字形に近い断面となる。溝は火事によって一度埋没し、第1遺構面に至って西肩は石を積み上げ地面の嵩上げに対応しているが、東肩は素掘りのまま、浅く開いた形状となる。幅50cm・深さ25cmを測る。

溝の南端は撹乱によって消失している。溝02はその延長上にあり、同一の溝の可能性があるが、若干方位が違い、西肩の石積みが溝02にはないなどの相違点があり、別の溝として扱っておく。

b. 溝02:調査区の西端を南北方向に走る。南半の敷地に伴う。第2遺構面から第1遺構面まで継続して使用されている。溝は第2遺構面では西肩に平瓦を立て並べ、底に漆喰を貼り、第1遺構面では更に東肩に漆喰を貼りレンガを並べる。第2遺構面の瓦列をもつ溝は箱形の断面、西肩に瓦列を配し、東肩は素堀りのままと考えられる。幅40cm・深さ15cm・N15°Wに走行をとる。第1遺構面では東肩に漆喰を貼りレンガを並べる。その時点で西肩の瓦列は継続して使用されていたと考えられる。幅30cm・深さ10cm以上を測る。

溝の北端は撹乱によって消失している。溝01は延長上にあり、同一の溝の可能性があるが、若 干方位が違い、溝01西肩の石積みが溝02にはないなどの相違点があり、別の溝として扱っておく。

- c. 溝03:調査区の西端を溝02と並行して走る。南半の敷地に伴う。上部より塩化ビニール管が埋設されていたが、部分的に瓦列の下より地山面を掘り込んだ溝肩が確認された。U字形の断面、幅約50cm・深さ35cm以上を計り、N16°W前後に走行をとる。井戸(SK35)と切りあい、第3遺構面に対応すると考えられる。溝02と同様に溝01と同一の溝の可能性があるが、若干方位が違い、別の溝としておく。
- d. 溝08:南半の敷地に伴う遺構である。丸瓦をつなぎ合わせ、樋としたものである。N33°Eに走行をとる。瓦を据える掘り方はU字形の断面、幅35cm・深さ10cmを計り、全長25cm・幅12cm・厚さ2cmの丸瓦を使用している。瓦のつなぎ目は漆喰によって外面から目止めを行っている。溝内には火災による炭が充満しており、上面が開放された状態で使用されていたものと考えられる。

溝は撹乱によって両端を失っており、その始まり・流末は詳らかではないが、南西端と北東端では北東側に低く、溝底で約5cmの比高差がある。敷地外の道路へと流れ出す様に造られていたものであろう。また、南西端の延長上には土壙44があり、あるいは取りついていたものとも考えられる。

溝の時期は漆喰の使用から推して第2遺構面に対応するものと考えられる。

e. 溝09: 南半の敷地に伴う遺構である。L字形に掘られた素堀り溝である。箱形の断面、幅約25cm・深さ8cmを測り、N1°Eに走行をとり、屈曲してN74°Eに走る。

溝は南西端と北東端では北東側に低く、溝底で約6 cmの比高差がある。南西端の溝のはじまりは土塘19にとりついており、流末は溝08に切られ消失して詳らかではない。

18世紀後半の遺物が出土しており、第3遺構面にともなう溝と考えられる。

2. 建物基礎

南半の敷地に属する遺構である。H字形に検出された掘り方を伴う石列(溝04・溝05・溝06)は一棟の建物の基礎と考えられる。基礎幅は南北6.2m以上・東西幅約4.8mを測り、長軸の方向をN16°Wにとる。

掘方内からは18世紀後半~19世紀代の遺物が出土している。また、溝05が18世紀後半の土壙40を切っていることから第2遺構面が形成された時点では存在したものと考えられる。

この建物基礎に使用されている河原石の幾つかには上面にモルタルが付着している。また、昭和57年時の間取り図とほぼ基礎が重なっていることから推して、建物基礎は改変を加えられながらも第1遺構面まで継続して使用された可能性が高い。溝04と溝05間の空間は間取り図では戸袋の位置にあたり、基本的な間取りについても踏襲している可能性が高い。

- a. 溝04:調査区南東半、壁際より検出されている。径30cm~40cm前後の偏平な河原石を掘り方内に据えている。掘り方の右肩は調査区外に出るため、全幅は不明であるが、60cm程度の幅をもつものと推測される。また、検出された形状からみて、北端・南端ともに溝04自体は終息しているものと考えられる。
- b. 溝05:梁行方向の基礎である。幅約45cmの掘り方内に径30cm~40cm前後の偏平な河原石を据える。 東端・中央・西よりの2個づつを配した部分は梁行の柱を支える礎石の可能性がある。間隔は東 端の礎石と溝04中央の間が130cm・東端の礎石と中央の礎石の間が160cm・中央の礎石と西よりの 礎石の間が110cm・西よりの礎石と溝06中央の間が110cmを測る。掘り方の東端は溝04と接せず、 約60cmの空間がある。
- c. 溝06:棟行方向の基礎である。幅約50cmの掘り方内に径20cm~40cm前後の偏平な河原石を掘り方内に密に据えている。また、掘り方の北端から約1.3m離れて溝06の延長上に5個の河原石が並んでいる。溝04・05間と同様に一定の空間を空けて更に基礎が続いていたものと考えられる。

3 # 戸 (図版33)

井戸は4基確認している。この内、調査区東壁中央にあるSE01はコンクリート製の井筒をもつもので、 家屋撤去時に破棄されたものである。以下、それ以外の3基の井戸について述べる。

- a. 井戸02: 南半の敷地に属する瓦井戸である。井筒の内径は約90cm・掘り方は径1.30mを測る。井筒は井戸瓦1段1周に12枚を使用する。瓦は1辺25cm・厚さ6cmを計り、外側面に金岡瓦□の刻印が印されている。深さは約3.6m(15段目)まで掘削を行ったが更に続く。全て井戸瓦による積み上げである。井戸は最終的には家屋撤去時に埋められており、確認できた約3.6m下まで全て現代の塵芥によって埋められている。従来の周辺の調査では井戸瓦を使用した井戸は幕末に使用されており、SE02についても同様の時期と考えられる。第2遺構面に伴い、現代に至り廃絶したと考えられる。
- b. 井戸35: 南半の敷地に属する素掘り井戸である。SE02の西側、溝02・03の直下にある。井筒の 径は約90cm、若干窄まり深度1mより下では約70cmの径で垂直に掘られている。深さは約3.6mま で掘削を行ったが更に続く。全て砂礫によって埋められている。埋土からは18世紀代の遺物が出

土しており、溝02・03と切り合い先行することから18世紀前半まで遡る可能性が高い。

c. 井戸39:南半の敷地に属する素掘り井戸である。溝04の直下にあり、第3遺構面に対応する SK38と切り合い先行する。井筒の径は約70cm、若干窄まり深度1mより下では約60cmの径で垂直 に掘られている。深さは約3.0mまで掘削を行ったが更に続く。埋土からは17世紀初めの遺物が 出土しており、第4遺構面に対応する。

4. 竃 (図版34)

北半の敷地に属する遺構である。検出された遺構はカマドの煙出し部分の一部と考えられ、平面形は 長軸の方向をN4°Eにとる舌状の形状の溝状遺構として検出されている。横断面形は箱形である。残 存長約50cm・幅22cm・深さ約12cmを計り、南端で緩やかに立ち上がりをみせていることから、北側が焚 き口側と考えられる。遺構は地山を掘り削り、更に粘土を貼りつけている。地山面上と粘土面上の2面 で炭層・焼成による赤変が確認されている。溝内には炭が充満しており、17世紀後半代の唐津焼き片と 瓦片が出土した。第4遺構面に対応する遺構である。

5. 胞衣壷埋納遺構 (図版34)

南半の敷地に属する遺構である。撹乱を受け、埋納坑の上半が消失していたが、地山に掘り込まれた深い埋納坑が幸いし、胞衣壷本体の損壊は免れた。埋納坑は長軸60cm・短軸53cm・残存する深さ85cmを測る。坑は下半で窄まり、底径は約30cm。掘削時に地山礫層中の礫を残し、胞衣壷を安定させている。

胞衣壷は素焼きの蓋付き火消し壷を正位において使用している。壷内には墨が1本埋納されていた。 時期は18世紀後半と考えられ、第3遺構面に対応する。

胞衣壷が埋納された地点は南半の敷地の中央東よりに位置しており、一時期新しい建物基礎(溝04・ 溝05・溝06)の範囲から推しても部屋の下に埋納されたと考えられる。

6. 埋 桶(図版35)

9箇所で検出されており、①径60cmの掘り方に底径30cm前後の桶を据えるものと(小型の埋め桶)と②径90cm~1 m前後の掘り方に底径60cm前後の桶を据えるもの(大型の埋め桶)の大小2 種の円形土壙に分かれる。

- b. SK13・SK14・SK15:大型の埋桶である。いずれも、北半の敷地に属し、第3遺構面(18世紀後半)の遺構と考えられる。桶底の木質が残るものはSK13のみである。

7. 土 壙(図版35)

土壙は31基検出している。

- a. ゴミ穴と考えられる不整な円形のもの b. 火事片付けに際し、炭・灰を廃棄した浅い長方形のもの c. その他の 4 種に分かれる。
 - a. ゴミ穴土壙:6箇所で検出されている。北半の敷地に属する土壙はSK07・SK31~SK33・SK34の 5箇所である。SK07は第2遺構面に対応するが、SK31~SK33は第3遺構面に対応する。これら の土壙は1地点に集中して掘られており、数度のゴミの廃棄の結果と捉えることができる。 SK34についても第3遺構面に対応する。南半の敷地に属する土壙はSK38である。井戸(SK39)

を切り、溝04の下に位置する。第3遺構面に対応する。

- b. 火事片付け土壙:6箇所で検出されている。北半の敷地に属する土壙はSK01・SK04・SK05の3 箇所、南半の敷地に属する土壙はSK25・SK27・SK40である。いずれも20cm程度の深さに箱形に 掘削し、焼土を含んだ炭を充満させている。土壙の形状は不整形な長方形の集まりで、全長が1m に満たないものもある。土壙の時期はいずれも第3遺構面の焼亡時に対応すると考えられる。
- c. その他の土壙:性格不明の土壙は19基ある。その内、SK11は深さ約40cmの箱形の土壙に礫を密集させている。SK44は深さ約40cmのすり鉢形の土壙である。SK11は第3遺構面に対応する可能性が高く、SK44は第2遺構面に対応する可能性が高い。

8. 小 結

調査の結果、17世紀前半・17世紀後半・18世紀前半・18世紀後半・19世紀前半・19世紀後半~20世紀 (戦中)・現代にわたる遺構・遺物を検出した。

検出された遺構は17世紀前半・17世紀後半の遺構は非常に希薄であるが、18世紀に入って増加し、18世紀後半代には土壙等が多数掘削され、調査区内の土地利用が活発になる。19世紀代には南半では強固な基礎をもつ建物が造られるが、北半では遺構はやや少なくなることが判った。

17世紀初めの遺物が入る井戸 (SK39) は有岡城の存続した時代にまで遡って存在した可能性の高い 遺構であり、今次の調査中最も古い遺構である。

17世紀後半のカマド (SK17) の検出は当該地には江戸時代前半に町家が存在したことを示すものであり、寛文9年あるいは延宝5年の絵図に記載された町家の存在を考古資料側から裏付ける資料である。

検出した遺構の配置から、調査区の西端に南北方向に、中央に東西方向に敷地の境が存在することが想定された。この内、調査区の中央にある南北の敷地を分ける境の存在は17世紀にまで遡ると考えられ、元禄7年の分限絵図に記された『日用利兵衛』の敷地の北辺とその敷地を逆L字形に囲む大家『三右衛門』の敷地との境と一致するものと考えられる。

これに対して調査区の西端を南北方向に走る溝は18世紀後半以前にはその存在の有無が確認できず、『日用利兵衛』の敷地の西辺と大家『三右衛門』の敷地の東辺との境の存在は考古資料側から裏付けることはできなかった。但し、18世紀後半以降には南北方向に溝が造られることが、確認されており、天保15年の絵図に記された敷地を東西を分ける境が、18世紀後半にはすでに存在していたと考えることができる。

個別の遺構に注目するならば、近世の町家遺跡に顕著な埋め桶遺構が今回の調査区では少なく、特徴的である。特に便桶と考えられる大型の桶は南の敷地では検出されず、便所が存在しなかった可能性がある。南の敷地は間口も小さく、元禄7年の絵図から伺えるように借家として利用されていたことも一因と考えられよう。

今回の調査では第2遺構面・第3遺構面・第4遺構面には炭層が被覆しており、それぞれ、火災にあった可能性が高い。第2遺構面は19世紀前半~19世紀中頃、第3遺構面は18世紀後半~19世紀前半、第4遺構面は、18世紀前半・17世紀後半・17世紀前半にわたると認識している。これらの火災を文献『有岡庄年代秘記』に記載された火災の記録と整合させることは、今次の調査成果からは不可能であった。

第 Ⅲ 章

出土遺物について

今回報告する調査区から出土した遺物は、コンテナーに換算すると約○○箱である。このうち今回報告する遺物は、約400点と出土した遺物量の1/10にも満たない。報告する遺物の選定にあたっては、近世の溝、建築跡・井戸・埋桶など町割の構造を示す遺構群の時期を確定することを第一義とした。したがってこれらの遺構群の出土遺物を中心に選別し、ゴミ穴等の大量の遺物および近現代の遺物は報告の対象としていない。さらに遺構の時期を明らかにすることを最優先したため、現地の調査で同時性の高い遺物を中心に図化したため、該当遺構から出土したすべての遺物を報告していない。この点は、予めおことわりする。

出土した陶磁器の図化にあたっては、現状で可能な限り多くの遺物を図化するため、実測図中には、染付・ 赤絵・鉄絵等の文様のほか、イッチン描き・トビガンナなどの装飾も図示していない。

これら文様などの情報は、各遺物写真および観察表を参照いただきたい。

第1節 第84次調査の遺物

表 2 第84次調査出土遺物観察表

塀

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	1	土師質秉燭	4.5	1.6	外:口端へラケズリ,体~底部ナデ,底部印「□」,内:ナデ,色調:胎土7.5YR6/4	
	2	土師質皿	7.4	1.8	外:指オサエ,内:ナデ,色調:胎土7.5YR7/3	口端部スス付着(6箇所),完形
	3	施釉土師質皿	(7.2)	1.3	回転糸切り,内外面:回転ナデ,釉色:5YR6/8,胎土5Y7/2	口端部スス付着 (1箇所)
	4	須恵質焼台?	5.3	7.0	調整不明,色調:5B4/1	外面黑化, 完形
	5	施釉陶器皿	11.4	2.8	型作り,外:体部下半露胎,内:見込み目跡(2箇所),釉色:N7/,胎土5Y7/2	
	6	染付皿	(12.4)	3.6	外:体部下半露胎,内:蛇ノ目釉ハギ、松葉文,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
	7	染付蓋	(7.8)	2.6	外:摘み端部露胎,体部日足・銀杏文,内:太線・回線・銀杏,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	8	赤絵蓋	6.9	2.2	外:摘み端部露胎,摘み内文字文「福」,体部丸文(鞠挟み・花卉) 4 方,窓(?),内: 太線・回線・記号(?),釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	9	染付碗	(10.8)	4.3	外:高台端部露胎,体部雲文・回線,内:口縁部波文・底部鳥文,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	10	染付碗	(9.4)	5.5	外:高台端部露胎,体部印文菊花,高台内字文「?」,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	11	染付碗	6.5	5.3	外:高台端部露胎,体部菊花+斜格子(5方),内:口縁部回線・体部回線・星梅,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	12	染付碗	(11.8)	6.4	外:高台端部露胎,体部笹文·回線,高台內字文「?」, 内:回線,底部五弁花(印判),釉色:透明,胎土N8/	
	13	染付鉢	19.0	10.8	外:高台端部露胎,花唐草(蓮)文,内:口縁部回線·如意頭,底部柘榴?,釉色:透明,胎土N8/	焼き継ぎ,高台内へラ描「?」

図版	番号	種別	径cm	厚さcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	14	瓦軒丸	14.1	2.1	巴文(左巻き), 裏面:周縁部ヨコナデ,中央部ナデ	
	15	瓦軒丸	(12.9)	1.8	巴文(左巻き), 裏面:周縁部ヨコナデ,中央部ナデ	
図版	番号	種別	全長cm	厚さcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	16	石製品硯	(16.4)	1.5	表面:筋彫り(花弁), 磨き, 裏面:未調整	

溝 1

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	17	施釉陶器碗	9.2	5.5	外:高台部露胎,体部鉄絵(?),釉色:7.5Y7/1,胎土5Y8/2	
	18	施釉陶器蓋物		(5.4)	外:口縁・底部露胎,内:白色釉流し掛け,釉色:7.5Y7/1,胎土7.5YR5/4	

溝 3

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	19	染付碗	(9.6)	5.0	外:高台端部露胎,体部丸文(菊花)・回線,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼

井戸 3

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	20	無釉陶器植木鉢	(13.0)	10.7	内外:回転ナデ,焼成後穿孔,色調:2.5YR3/3	

井戸 4

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
36	21	染付小碗	(7.0)	3.3	外:高台端部露胎,呉須絵(?)	肥前焼

埋甕8

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
37	22	施釉陶器鉢	-	(18.9)	外:底部露胎, 粘土紐巻き上げ痕跡, 底部周辺砂付着, 内:漆喰塗布, 釉色:10R2/2, 胎土5YR4/3.5	大谷焼
	23	施釉陶器鉢	(57.9)	(30.1)	外:口縁部直下露胎,内:口縁端部露胎,漆喰塗布,施釉刷毛塗,釉色:10R3/2,胎 土:5YR4/8	大谷焼

埋甕18

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
37	24	無釉陶器甕	(42.8)	(22.5)	内外面鉄泥塗布(刷毛),外:口縁部回転ナデ,体部横ナデ,内:口縁部回転ナデ,色 調:10R5/2	丹波焼
	25	無釉陶器甕		(12.5)	外:体部横位ナデ,底部ナデ,底部周縁砂付着,内:横位ナデ,鉄泥塗布(刷毛)漆喰塗布,色調:7.5R3/2	大谷焼?
	26	染付碗	(8.2)	6.8	外:高台端部露胎,体部雪持笹文·回線,内:底部回線·五弁花(印判),釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼

埋甕19

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
37	27	施釉陶器鉢	(59.1)	36.9	外:底部露胎,内:口縁部露胎,体部漆喰塗布,釉刷毛塗り,釉色:10R2/2,胎土: 5YR4/4	大谷焼

埋甕20

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
37	28	施釉陶器碗	5.2	7.3	全面施釉, 外:体部鉄絵(竹)底部 3 箇所目跡, 釉色:7.5Y8/1, 胎土:10Y8/1	
	29	施釉陶器鉢	(9.8)	7.4	型作り, 外:高台端部露胎, 体部笹文 (緑取り黒色, 黄釉・緑釉), 内:底部鉄絵「乾山」	
	30	無釉陶器甕	(55.0)	(64.2)	外:口縁部回転ナデ,体部不定ナデ,体部下半漆喰塗布,内:体部上位指オサエ,体部下半不定ナデ,色調:2.5Y3/4	

埋甕21

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	31	施釉陶器甕		(12.7)	外:底部露胎,底部周縁砂付着,釉刷毛塗りの痕跡,内:横ナデ,釉刷毛塗りの痕跡,漆喰塗布,釉色:7.5R3/2,胎土:2.5YR3/2	備前焼?

埋甕39

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	32	施釉陶器鉢			外:底部露胎,底部周縁砂付着 (4 cm幅),内:釉刷毛塗り痕跡,漆喰塗布,釉色:7.5R3/2,胎土:7.5R3/2	大谷焼

埋甕55

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	33	施釉陶器鉢	(56.2)	33.8	外:口縁端部・底部露胎,内:漆喰塗布	大谷焼
	34	無釉陶器甕	(38.2)	(28.9)	外:回転ナデ、輪耳貼付け、内:回転ナデ、横位ナデ、色調:5YR4/3	丹波焼
	35	染付碗	(6.6)	5.3	外:高台端部, 半菊花・斜格子, 七宝+斜格子(4箇所), 雲文・回線, 内:口縁部四方 襷・回線 底部?, 釉色:透明, 胎土N8/	肥前焼

埋甕56

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	36	施釉陶器碗		(28.0)	外:底部露胎,底部周縁砂付着(幅 3 cm),漆喰塗布(薄い),内:釉刷毛塗り痕跡,漆喰塗布	
図版	番号	種別	全長cm	厚さcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	37	石製品硯	19.5	3.0	内外面磨き	

図版	番号	種別	口径dm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	38	施釉陶器土瓶	(8.2)	11.9	外:体部下位露胎,足部貼付け(3箇所),耳部貼付け(2箇所),白釉流し掛け,内:体部の一部露胎,釉色:5YR4/2,胎土:10YR7.5/4	

図片	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	39	土師質皿	(10.0)	2.1	外:口縁部ヨコナデ,体部指オサエ,内:口縁部ヨコナデ,不定ナデ,色調:10YR7/2	口縁端部タール 付着 (5 箇所以 上)

埋桶25

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
38	40	施釉土師質皿	6.2	2.7	外:底部回転糸切り,体部露胎,回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:5YR6/8,胎土:5YR8/4	口縁端部タール 付着(5箇所)
	41	土師質ミニチュ ア	(7.2)	(5.6)	外:回転ナデ→ハケメ,墨絵(?),内:ナデ,受部3箇所	
	42	染付碗	7.3	5.7	外:高台端部露胎,体部菊・格子・回線,内:回線・五弁花,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
	43	施釉陶器皿	(12.8)	2.9	外:体部露胎, 回転ヘラケズリ, 内:菊花貼付, ヘラ描き (葉文), 釉色:透明, 胎土 5Y7/1	:
	44	染付小碗	6.5	3.4	外:高台端部露胎,口縁部笹文,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
	45	染付香炉	(12.5)	8.2	外:体部花唐草文,底部蛇ノ目露胎,内:体部下半露 胎,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼

埋桶53

図版	番号	種別	長さcm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	46	鬼瓦	(15.3)	(15.0)		右目・眉部
	47	鬼瓦	(14.7)	8.4		角部

埋桶54

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	48	染付碗	9.8	5.5	外:体部 折枝梅・雪輪,高台端部露胎,高台内文字「?」,内:口縁部・底部赤色顔料付着,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	49	施釉陶器碗	(12.0)	6.6	外:体部下位露胎,高台端部目跡,体部回転ヘラケズリ(右ロクロ),釉色:透明,胎 土:2.5Y8/1	京焼系

埋桶59

図版	番号	種別	全長cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	50	白磁面子	4.4	1.6	外:高台内墨書「?」,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土:N7/	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	51	染付碗	9.6	4.1	外:高台端部露胎,体部亀甲・星梅 (8箇所),内:底部花卉文,釉色:透明,胎土: N7/	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	52	施釉陶器鉢	(23.4)	8.6	外:露胎, 体部回転ナデ, 底部未調整, 内:回転ナデ, 釉色:10R2/1, 胎土: 2.5GY6.5/1	丹波焼
	53	無釉陶器摺鉢	26.2		外:口縁部回転ナデ,体部回転ヘラケズリ(右ロクロ),底部未調整,内:回転ナデ \rightarrow 摺目(8本1単位),胎土:2.5 $Y4/6$	堺・明石系
	54	白磁皿	4.7	1.6	型作り,外:体・底部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼

埋桶69

図版	番号	種別	長さ	厚み	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	55	染付碗	10.7	5.7	外:高台端部露胎,体部菊唐草·回線,内:回線·?,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼

包含層

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
39	56	施釉陶器甕	31.3	(35.5)	外:釉流し掛け,釉色:7.5R2/3,7.5R1.7/1,胎土:7.5R2/2,	丹波焼
図版	番号	種別	径cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
	57	瓦軒丸	14.9	2.0	外:瓦当左巴文,内:布目	
	58	瓦軒丸	14.9	1.9	外:瓦当左巴文,内:布目	

第2節 第75次調査の遺物

表 3 第75次調査出土遺物観察表

井戸 6

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
40	59	土師質皿	7.5	1.7	外:体部指押さえ→口縁部ヨコナデ,内:体部不定方向ナデ,色調:7.5YR7/4	
	60	染付碗	(7.7)	4.9	外:高台端部露胎,体部山・松・家屋・岩・松,釉色:透明,胎土N7/	
	61	施釉陶器碗	(9.5)	5.6	高台部露胎,上絵付(赤彩),釉色:透明,胎土:2.5Y8/2	京焼系

井戸16

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
40	62	土師質皿	7.5	1.7	外:体部指押さえ→口縁部ヨコナデ,内:磨滅,色調:10YR7/6	口縁端部スス付 着
	63	土師質皿	7.8	1.7	外:体部指押さえ,内:一方ナデ 色調:7.5YR7/3	口縁端部スス付 着(5箇所)
	64	土師質鍋(焙烙)	25.7	(6.5)	外:口縁ヨコナデ,底部未調整,内面:口縁ヨコナデ,底部不定ナデ,色調:10YR5/6	外面底部スス付 着
	65	土師質鍋(焙烙)	(26.3)	(5.5)	外:口縁ヨコナデ,底部未調整,内面:口縁ヨコナデ,底部不定ナデ,色調:5YR6/8	外面底部スス付 着
	66	土師質鍋(焙烙)	(27.2)	(5.8)	外:口縁ヨコナデ,底部未調整,内面:口縁ヨコナデ,底部不定ナデ,色調:5YR5/1	外面底部スス付 着
	67	土師質鍋(焙烙)	(27.2)	(5.8)	外:口縁ヨコナデ,底部未調整,口~底部ナデ(面取り様),内面:口縁ヨコナデ,色調:5YR6/6	外面底部スス付 着
	68	土師質鍋(焙烙)	(32.4)	(6.8)	外:口縁ヨコナデ,底部未調整,内面:口縁ヨコナデ,底部ナデ 色調:5YR7/4	外面底部スス付 着
	69	無釉陶器摺鉢	(35.2)	(8.7)	外:回転ナデ,口端部沈線,内:櫛描条線(11本/1単位),色調:5YR4/3	堺・明石焼系
	70	無釉陶器小鉢	(8.1)	1.8	外:□~体部上回転ナデ→下回転ヘラケズリ,底部未調整,内:回転ナデ,色調: 2.5Y3/3	丹波焼
	71	施釉陶器碗	10.7	5.8	外:高台端部露胎,打刷毛目,内:打刷毛目,釉色:刷毛目7.5YR3/3→透明	肥前焼
	72	施釉陶器碗	10.6	5.7	外:高台端部露胎,打刷毛目,内:打刷毛目,釉色:刷毛目7.5YR3/3→透明	肥前焼
	73	施釉陶器鍋 (行平)	(15.5)	8.3	外:体部下~底部・受口部露脚(3箇所)・片口(印文)・把手部張付け,体部回転ヘラケズリ 内:回転ナデ,釉色:10Y6/1	
	74	陶胎染付香炉		(5.6)	外:体部下~高台部露胎,体部唐草文,高台内墨書「□」,内:回転ナデ,底部墨書「□」, 釉色:透明,胎土7.5YR4/3	肥前焼
	75	染付杯	(7.9)	3.7	外:高台端部露胎,体部家屋·松·山,高台脇部回線,釉色:透明,胎土:N7/Y	肥前焼
	76	染付皿	(3.2)	3.4	外:高台端部露胎,内:蛇ノ目釉ハギ、体部染付,釉色:透明,胎土:N7/Y	肥前焼
	77	陶胎染付香炉	(5.8)	(5.6)	外:高台部露胎,体部回線・樹木・遠山,内:体部下~底部露胎,釉色:透明,胎土: 2.5YR4/3	肥前焼
i	78	染付仏飯具		(4.5)	外:脚部下露胎,蛇ノ目高台,脚部回線,体部染付,釉色:透明,胎土:7.5YR6/3	肥前焼
	79	染付碗	(7.9)	3.7	外:高台端部露胎,体部松葉・紅葉・菊(印判),高台部回線,高台内「大明年製」・回線釉色:透明,胎土:N7/Y	肥前焼
	80	染付碗	(7.9)	3.7	外:高台端部露胎,体部草花·橋,高台部回線,高台内「大明年製」·回線,釉色:透明,胎土:N7/Y	肥前焼
	81	染付碗	(7.9)	3.7	外:高台端部露胎,体部草花,高台部回線,釉色:透明,胎土:N7/	高台端部砂熔着 肥前焼

図版	番号	種別	全長cm	幅cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
41	82	井戸側瓦	27.3	23.1	凸面山形刻み,下端側面一重枠「大瓦藤」刻印	
	83	井戸側瓦	28.2	23.7	凸面山形刻み,下端側面一重枠「仝□天宗」刻印	

井戸 9

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
42	84	土師質皿	(6.4)	1.7	外:底部回転糸切り, 口縁回転ナデ,内:回転ナデ, 色調:10YR7/3	
	85	土師質皿	(7.6)	1.6	外:体部指押さえ,内:磨滅,色調:10YR8/2	口縁端部スス付 着(1箇所)
	86	土師質皿	(7.3)	1.5	外:体部指押さえ,内:不定ナデ,色調:2.5YR7/4	口縁端部スス付 着(7箇所)
	87	土師質皿	7.7	1.5	外:体部指押さえ,内:不定ナデ,色調:5YR8/2	口縁端部スス付 着(2箇所)
	88	土師質焼塩壷	5.8	6.6	外:ナデ,刻印「□湊伊織」,内:布目・絞り目,色調:5YR7/8	
	89	土師質鍋(焙烙)	(29.9)	6.5	外:口縁部ヨコナデ,底部未調整,内:口縁部ヨコナデ,底部ナデ,色調:7.5YR6/4	外面底部スス付 着
	90	無釉陶器摺鉢	33.6	13.4	外:ロ~体部回転ナデ,底部未調整,内:口縁部回転ナデ,体~底部卸目(6条1単位),色調:10R4/4	備前焼系
	91	無釉陶器摺鉢	(32.9)	14.1	外:ロ~体部回転ナデ,底部未調整,内:口縁部回転ナデ,体~底部卸目 (9条1単位) 色調:2.5YR5/8	堺・明石焼系
	92	施釉陶器碗	(11.5)	8.1	外:高台部露胎,体部回転ナデ→下半回転ヘラケズリ,内:回転ナデ,釉色:7.5Y8/1 胎土:5Y8/2	瀬戸・美濃焼
	93	施釉陶器碗	(11.6)	7.6	外:体部下半露胎,釉色:N2/,胎土:2.5Y8/1	瀬戸・美 濃 焼 天目碗
	94	施釉陶器植木鉢	18.4	11.5	外:体部部分施釉,内外面:回転ナデ,外底部未調整(砂付着),釉色:2.5YR3/4 植木鉢 胎土:10YR6/2	丹波焼
	95	施釉陶器植木鉢	18.4	11.5	外:体部部分施釉,指圧痕文,内外面:回転ナデ,外底部未調整,釉色:黒褐色 胎土 :7.5YR3/3	
	96	染付碗	10.1	4.6	外:高台端部露胎,体部山・楼閣・松文 2 方,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	97	染付碗	9.6	4.1	外:高台端部露胎,内外面:斜格子·菊花,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	98	染付碗	8.0	4.9	外:高台端部露胎,岩·松文,回線釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	99	染付碗	9.6	5.2	外:高台端部露胎,蘭·菊(印判) 3方,回線,高台内:「□」,釉色:透明,胎土: N8/Y	肥前焼

井戸10

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	100	染付碗	10.6	5.2	外:高台端部露胎,桐?文(6箇所),回線,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土: N8/	肥前焼
	101	染付碗	(10.9)	5.1	外:高台端部露胎,草花文回線,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	102	染付碗	(11.0)	5.2	外:高台端部露胎,草花文回線,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	103	染付碗	(9.4)	6.7	外:高台端部露胎,口縁部回線,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	104	染付碗	11.8	6.3	外:高台端部露胎,折枝梅,回線,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼

井戸11

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	105	染付碗	10.9	5.8	外:高台端部露胎,寿·蓮弁文,回線,内:口縁四方襮,底部「寿」文(4方),釉色:透明 胎土:N8/Y	肥前焼

井戸12

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	106	土師質鍋(焙烙)	24.8		外:口縁部指頭圧痕→ヨコナデ,底部未調整,内:口縁ヨコナデ,底部ナデ,色調: 7.5YR7/3	外面底部スス付 着

井戸13

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	107	土師質皿	(10.4)	2.0	外:体部指頭圧痕→口縁部ヨコナデ,内:底部ナデ→口縁部ヨコナデ,色調:10YR8/3	口縁端部スス付着
	108	無釉陶器小鉢	11.3	5.5	外:回転ナデ→体下位ナデ(面取様),内:回転ナデ,色調:2.5YR4/3	丹波焼(把手付)
	109	施釉陶器皿		(3.3)	外:高台部露胎,体部回転ナデ,内:蛇ノ目釉ハギ,緑色釉流掛け,釉ハギ部胎土目跡 (4箇所以上),釉色:透明釉,胎土:10YR8/1	
	110	白磁皿	(9.5)	2.7	外:高台部露胎, 内:蛇ノ目釉ハギ, 釉色:透明釉, 胎土:N8/	肥前焼
	111	染付小碗	6.7	2.7	外:高台部露胎,体部折松葉文(4方),回線,釉色:透明釉,胎土:N8/	肥前燒
	112	染付小碗	(9.6)	6.1	外:高台部露胎,体部草花文,回線,釉色:透明釉,胎土:N8/	肥前焼
	113	土師質鍋(焙烙)	24.8	6.8	外:ヨコナデ→口縁部指頭痕,底部未調整,内:口縁ヨコナデ,底部ナデ,色調: 5YR5/1	外面スス付着圧
	114	染付小碗	(10.1)	5.9	外:高台部露胎,体部梅·竹·松文,回線,釉色:透明釉,胎土:N8/	肥前焼
	115	施釉陶器碗	(10.8)	5.4	外:高台部露胎,内:蛇ノ目釉ハギ,刷毛目,釉色:透明釉,胎土:10YR4/3	肥前焼

竃1-1

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	116	土師質皿	(10.4)	1.8	外:体部指頭圧痕→口縁部ヨコナデ,内:ナデ,色調:5YR8/3	口縁端部スス付着
	117	無釉陶器小鉢	11.1	6.0	外:回転ナデ→体下位ヘラケズリ(面取様),内:回転ナデ,色調:5YR5/3	丹波焼(把手付)
	118	白磁皿	(9.5)	2.7	外:高台部露胎, 内:蛇ノ目釉ハギ, 釉色:透明釉, 胎土:N8/	肥前焼
	119	施釉陶器壷	(11.1)	20.8	外:底部露胎,内:露胎,回転ナデ,釉色:5Y7/2,胎土:2.5YR5/2	備前焼?

竈1-2

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	120	上石臼	28.6	13.5	下面:主溝 (8本) により8区画に分割,副溝3本 (1単位)	花崗岩製、横打 込み式

竃1-3

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	121	染付皿	11.9	3.4	外:高台部露胎,内:蛇ノ目釉ハギ,呉須描き、釉色:透明釉,胎土:N8/	肥前焼

壺 1

図別	i 番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
43	122	土師質壷	11.4	18.0	外:回転ナデ,底部ナデ(面取様),底部未調整,内:回転ナデ,色調:7.5YR7/3	

壷 3

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
44	123	施釉陶器壷	13.7	16.6	外:口縁端部・底部露胎(鉄泥塗布),内:回転ナデ,釉色:外7.5YR7/1・緑灰色釉,内:黒褐色釉,胎土:10R4/3	

壷 4

13	弘版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
	44	124	施釉陶器壷	13.7	16.6	外:底部露胎・目跡4箇所,内:露胎,回転ナデ,釉色:2.5YR4/1 胎土:5YR3/3	

壷 2

E	図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
	44	125	施釉陶器壷	(10.4)	12.3	外:回転ナデ→鉄泥塗布→黒褐色釉流掛け,内:露胎,回転ナデ,胎土:7.5YR6/4	丹波焼

埋甕 8

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
44	126	無釉陶器	—	(22.4)	外:回転ナデ→ナデ,内:回転ナデ,色調:10YR4/4	丹波焼, 内面漆 喰塗り

埋甕 9

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
44	127	無釉陶器	45.9	(56.2)	外:□縁部回転ナデ、体部不定ナデ→鉄泥刷毛塗り、内:横位ナデ→鉄泥刷毛塗り	丹波焼

埋甕10

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
44	128	施釉陶器壷	(48.4)	(13.4)	外:回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:5YR3/6,胎土:5YR4/6	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
45	129	土師質壷?	(19.6)	3.4	内外面:口縁部ヨコナデ,穿孔,色調:7.5YR4/1	
	130	施釉土師質皿	6.2	1.3	外:露胎,底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:5YR7/8,,胎土: 2.5YR7/6	
	131	施釉陶器瓶		(12.9)	外:底部露胎, 目跡 (4箇所), 体部回転ナデ, 内:露胎, 回転ナデ, 釉色:5YR3/2 胎 土:10YR6/4	丹波焼?
	132	白磁皿輪花	23.3	4.3	型作り,外:高台端部露胎,高台内ハリ目跡,口縁端部鉄錆塗布,内:陽刻 釉色:透明釉 胎土:10GY8/1	肥前焼
	133	染付蓋	(11.4)	3.2	摘部貼り付け, 口縁部露胎, 外: 竹文, 釉色:透明釉, 胎土: N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
45	134	染付碗	(11.4)	6.2	外:口縁端部露胎,体部菊花(3方)・回線,高台内一重枠「寿」文,内:体部四方襷・回線,底部回線.松竹梅繋文	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
45	135	施釉土師質皿	6.1	1.3	外:露胎,底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:7.5YR6/8,胎土: 10YR8/3	口縁端部スス付 着(5箇所)
	136	土師質皿	10.1	2.0	外:指押さえ,内:一方ナデ,胎土:7.5YR8/3	口縁端部スス付 着(5箇所)
	137	無釉陶器摺鉢	33.8	14.0	外:口縁部回転ナデ,体部ナデ,内:口縁部回転ナデ,体部卸目(体部10本/1単位,底放射状8本/1単位),色調:10R3/1	堺・明石焼系
	138	無釉陶器摺鉢	39.2	15.2	外:口縁部回転ナデ,体部上位回転ヘラケズリ,体部回転ナデ,底部沈線,内:口縁部回転ナデ,体部創目(体部10本/1単位,底部放射状8本/1単位),色調:10R3/1	堺・明石焼系
	139	施釉陶器碗	8.5	6.1	外:高台部露胎,体部点文(呉須)·笹文(鉄絵),釉色:透明釉,胎土:7.5YR7/3	
	140	施釉陶器碗	(9.7)	5.3	外:高台部露胎,上絵付網(赤彩),緑彩・黄彩,釉色:透明釉,胎土:5Y3/8	京焼系
	141	施釉陶器碗	(10.4)	6.3	外:高台部露胎, 体部回転ヘラケズリ→呉須絵→灰白釉→褐色釉流掛け, 釉色:5GY8/1, 胎土:2.5Y8/2	瀬戸・美濃焼
	142	染付碗	(6.4)	5.3	外:高台端部露胎,体部菊花・斜格子・雲文,内:四方襷,底部回線	肥前焼
	143	白磁碗	15.4	7.4	外:高台端部露胎,釉色:透明釉,胎土N8/	

埋桶12

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
45	144	施釉土師質皿	6.1	1.3	外:露胎,底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:透明釉,胎土:5YR7/6,	
	145	施釉陶器碗	(10.4)	6.3	外:高台部露胎,□縁部緑釉→透明釉,釉色:透明釉,胎土:5Y8/2	瀬戸・美濃焼
	146	施釉陶器土瓶	(13.0)	15.6	外:体部下半露胎,体部回転ヘラケズリ,底部脚部3箇所貼付け,内:露胎,回転ナデ, 釉色:透明,胎土5Y8/3	明石焼系
	147	施釉陶器鉢	(23.5)	(10.1)	外:露胎, 体部回転ナデ, 底部未調整, 内:焼成後穿孔, 釉色:10YR5/2, 胎土 2.5YR7/4	丹波焼, 植木鉢 転用
	148	染付碗	9.8	(5.2)	外:高台端部露胎,体部二重網目文,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	149	白磁碗	10.7	4.9	外:高台端部露胎,体部回転ヘラケズリ,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土N7/Y	肥前焼
	150	染付碗	6.8	5.7	外:高台端部露胎,体部日足文?·雲文·回線,内:口縁四方襻·底部五弁花(印判), 釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
図版	番号	種別	径cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
45	151	軒丸瓦	10.1	6.9	瓦当部 菊花文	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	152	染付皿	9.7	2.3	型作り,外:口縁端部鉄錆塗布,高台端部露胎,内:体部干網・海・海鳥(海浜風景),釉色:透明,胎土N7/	肥前焼 八角皿
	153	白磁碗	8.0	4.4	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	154	施釉土師質皿	5.9	1.1	外:底部回転糸切り,体部露胎,内外面:体部回転ナデ、釉色:5YR6/8,胎土:7.5YR7/4	口縁端部スス付 着(3箇所)
	155	施釉陶器瓶		(4.7)	外:高台部露胎,内:回転ナデ,色調:10YR8/2,釉色:暗緑色,胎土:5Y3/8	口縁端部スス付 着(1箇所)
	156	施釉陶器灯明具	(4.7)	4.0	外:体部下半露胎,回転ナデ,注口部貼付け,釉色:透明,胎土:10YR6/2	
	157	染付碗	11.3	4.7	外:高台端部露胎,口縁部回線,高台内回線·一重枠「寿」文,釉色:透明,胎土: N8/	
	158	染付碗	11.3	4.7	外:高台端部露胎,体部?文,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	159	無釉陶器植木鉢	(15.8)	11.7	外:回転ナデ,底部不定ナデ,内:回転ナデ 胎土:2.5Y5/1	丹波焼?

土坑 8

図版	番号	種別	全長cm	幅cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	160	石製品硯	18.4	5.9	海部欠損	

土坑10

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	161	土師質皿	(9.6)	2.0	外:口縁部ヨコナデ,内:口縁部ヨコナデ,色調:10YR7/3	口縁端部スス付 着(3箇所)
	162	染付瓶		(8.1)	外:高台端部露胎,梅·竹文,内:露胎	肥前焼,高台端 部砂熔着

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	163	土師質皿	(7.3)	1.6	外:体部指押さえ→ナデ,内:磨滅,色調:10YR7/3	
	164	土師質皿	7.3	1.7	外:体部指押さえ→ナデ,内:磨滅,色調:7.5YR7/3	
	165	土師質皿	7.8	1.4	外:体部指押さえ→ナデ,内:一方ナデ,色調:7.5YR7/4	口縁端部スス付 着(5箇所)
	166	土師質皿	(9.9)	1.5	外:体部指押さえ→ナデ,内:ナデ,色調:10YR7/2	
	167	土師質皿	9.8	2.2	外:体部指押さえ→口縁部ナデ,内:磨滅,色調:5YR8/3	口縁端部スス付着
	168	土師質皿	10.4	2.0	外:体部指押さえ→ナデ?,内:磨滅,色調:5YR8/3	口縁端部スス付着
	169	土師質皿	(11.2)	2.5	外:体部指押さえ→内:磨滅,色調:7.5YR8/3	口縁端部スス付 着(3箇所)
	170	土師質皿	10.3	2.2	外:体部指押さえ→口縁部ヨコナデ,内:口縁部ヨコナデ,色調:5YR7/3	口縁端部スス付着
	171	土師質皿	(11.3)	2.3	外:体部指押さえ→口縁部ヨコナデ,内:口縁部ヨコナデ,体部不定ナデ,色調: 7.5YR8/3	口縁端部スス付 着(2箇所)
	172	土師質鍋(焙烙)	(25.4)	(6.4)	外:口縁部ヨコナデ,体部上位ナデ,底部未調整,内:口縁部ヨコナデ,体部横位ナデ,色調:5R7/4	外面スス付着
	173	土師質鍋(焙烙)	(30.1)	(6.1)	外:口縁部指押さえ→ヨコナデ,口~体部沈線,内:口縁部ヨコナデ,色調: 7.5YR7/3	外面スス付着

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	174	染付碗	9.4	6.0	外:高台端部露胎,回線,釉色:透明,胎土N8/Y	
	175	染付碗	(10.0)	5.4	外:高台端部露胎,橋・蘭,高台内「?」,釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼
	176	白磁碗	10.2	5.0	外:高台端部露胎,内:蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土7.5GY8/1	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	177	土師質皿	7.4	1.4	外:体部指押さえ 内:一方ナデ,色調:7.5YR7/4	口縁端部スス付 着(9箇所)
	178	施釉陶器蓋	(5.5)	2.0	外:露胎,回転ヘラケズリ,内:摘手貼付け,釉色:5YR3/4,胎土:5Y8/1	

土坑30

図	版 番	号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
4	6 17	79	土師質鍋(焙烙)	(27.0)	(5.5)	外:口縁部ヨコナデ,体部未調整,内:口縁部ヨコナデ,体部横位ナデ,色調: 5YR6/6	外面スス付着

土坑38

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
46	180	無釉陶器植木鉢	(14.1)	12.1	外:回転ナデ、脚部貼付け(3足),内:回転ナデ、底部焼成前穿孔、色調:5YR4/2	
	181	施釉陶器鍋	16.0	5.8	全面施釉, 外:体部下位回転ヘラケズリ, 把手貼付け(2箇所), 脚部貼付け(3箇所), 釉色:2.5YR5/8, 胎土:5YR3/4	
	182	染付碗	(10.7)	5.8	外:口縁端部露胎,体部蓮弁・草花,内:四方欅.回線,底部花卉,釉色:透明,胎土 :N7/	肥前焼

土坑40

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
47	183	染付碗	11.5	6.0	外:高台端部露胎,回線,内:口縁部四方襻,底部花卉文,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	184	染付鉢	(15.8)		外:高台端部露胎,唐児遊戯文,回線,高台内?文,内:唐児遊戯文・回線,釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
47	185	青磁輪花皿	(9.8)	2.8	外:高台端部露胎,釉色:青緑色,胎土N8/Y	肥前燒系
	186	土師質壷	(11.6)	16.7	外:回転ナデ,底部未調整,内:回転ナデ,色調:5YR7/4	胞衣壺

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
47	187	施釉土師質皿	6.2	1.1	外:露胎,回転ナデ,底部回転糸切り,内:回転ナデ,釉色:5YR6/8,色調:2.5YR6/6	口縁端部スス付
	188	施釉陶器皿	(7.3)	2.1	外:高台部露胎,釉色:5Y7/3,胎土::5Y7/2	瀬戸・美濃焼 (輪花)
	189	施釉陶器碗	(8.9)	(5.0)	外:高台部露胎,釉色:透明釉,色調:5Y8/2	
	190	施釉陶器碗	(8.8)	(4.7)	外:高台部露胎,口縁端部緑色釉流し掛け,釉色:透明釉,色調:7.5Y8/2	瀬戸・美濃焼
	191	施釉陶器碗	(9.2)	(4.9)	外:高台部露胎,釉色:灰白色	京焼系
	192	施釉陶器碗	(9.2)	(4.9)	外:高台部露胎,釉色:灰白色	京焼系
	193	施釉陶器碗	(7.8)	4.9	外:高台部露胎,体部下半回転ヘラケズリ,体部白泥・鉄泥描き,釉色:灰白色	萩焼
	194	施釉陶器碗	(7.1)	4.6	外:高台部露胎,体部下半回転ヘラケズリ,体部白泥・鉄泥描き,釉色:5Y8/,胎土:2.5Y7/3	萩焼
	195	施釉陶器碗	(9.4)	5.5	外:高台部露胎,体部下半回転ヘラケズリ,体部灰色釉・鉄釉流掛け,釉色:5Y8/,胎土:2.5Y7/3	萩焼
	196	施釉陶器碗	(9.2)	5.1	外:高台部露胎,体部下半回転ヘラケズリ,体部灰色釉・鉄釉流掛け,釉色:5Y8/,胎土:2.5Y7/3	萩焼
	197	施釉陶器碗	(7.3)	5.7	外:高台部露胎,体部下半回転ヘラケズリ,体部灰色釉・鉄釉流掛け,釉色:5Y3/,胎土:2.5GY7/3	瀬戸・美濃焼
	198	施釉陶器蓋	(10.2)	(2.5)	外:露胎,体部下半回転ヘラケズリ,釉色:透明色,胎土:5Y8/2	
	199	施釉陶器蓋	15.9	3.3	外:口縁端部露胎,釉色:透明色,胎土:5Y8/2	
	200	施釉陶器蓋	15.5	3.3	外:口縁端部露胎,釉色:7.5Y5/2,胎土:5Y8/2	
	201	施釉陶器鍋	(13.3)	8.0	外:体部下半露胎,回転ヘラケズリ,脚部貼付け(3箇所),内:受口部露胎,釉色: 7.5Y6/1,胎土:2.5YR4/3	
	202	施釉陶器土瓶	(11.5)	14.5	外:体部下半露胎,体部上半飛ガンナ,注口・把手部貼付,内:体部露胎,回転ナデ,釉色:透明,胎土5Y8/3	
	203	染付瓶		(8.6)	外:高台端部露胎,体部蛸唐草回線,内:露胎,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	204	染付瓶	1.4	14.0	外:高台端部露胎,頚部蛸唐草,体部唐草·回線,内:露胎,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	205	染付皿	(14.4)	4.3	外:高台端部露胎,体部唐草·回線,高台内「福」,内:底部松·竹·梅文,釉色,胎 土:N8/:透明	肥前焼
	206	染付皿輪花	14.4	4.2	外:高台端部露胎,体部唐草·回線,高台内「大明年製」,内:花文·回線,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	207	染付皿輪花	(14.4)	4.0	外:高台端部露胎,体部唐草·回線,高台内「大明年口」,内:五弁花(印判),釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	208	染付蓋			外:摘み端部露胎,摘み部内花文,内:?,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	209	施釉陶器碗	6.4	5.1	外:高台部露胎,体部「□茶松水町子寿(呉須),高台内「?」,釉色:透明,胎土: 5Y8/1	
	210	染付碗	(5.5)	3.5	外:高台部露胎,体部?,高台内「寿」,釉色:透明,胎土:5Y8/1	肥前焼
	211	施釉陶器碗	6.4	5.1	外:高台部露胎,体部「□□波山□雪(呉須),高台内「?」(呉須),釉色:透明,胎土:7.5Y8/2	
	212	施釉陶器碗	6.4	5.1	外:高台部露胎,体部「□□波山□雪(呉須),高台内「?」(呉須),釉色:透明,胎土:7.5Y8/2	
	213	白磁碗	6.8	4.5	外:高台端部露胎,高台内印「福」,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
48	214	白磁碗	8.0	4.3	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼, 焼継ぎ
	215	白磁碗	(7.1)	4.9	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備	考
48	216	白磁碗	7.8	4.4	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/		
	217	白磁碗	(9.2)	6.4	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	輪花
	218	染付碗	(9.6)	5.1	外:高台端部露胎,雨降り文,高台内「?」,釉色:透明,胎土:N8/		
	219	色絵碗	(9.3)	5.9	外:高台端部露胎,蓮弁·雷文(呉須),葉(緑彩),花(赤彩),釉色:透明,胎土:N8/	中国製	
	220	染付碗	9.3	5.2	外:高台端部露胎,遠山·鳥·樹木·岩,回線,内:回線,底部帆掛舟,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	221	色絵碗	(9.1)	5.8	外:高台端部露胎,蓮弁·雷文(呉須),葉(緑彩),花(赤彩),釉色:透明,胎土:N8/	中国製	
	222	染付碗	(7.1)	6.0	外:高台端部露胎,草花,回線内:四方襻,回線,底部五弁花(印判),釉色:透明,胎 土:N8/	肥前焼	
	223	染付段重	8.8	3.6	外:体部下位·口縁端部露胎,唐草文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	224	染付碗	(11.2)	6.1	外:高台端部露胎,花唐草·如意雲?,内:底部唐花,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	225	染付碗	(11.6)	6.3	外:高台端部露胎,唐花·如意雲?,内:底部唐花,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	226	赤絵碗	(9.8)	5.1	外:高台端部露胎,雲文(赤彩),回線:釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	227	赤絵碗	(13.6)	5.6	外:高台端部露胎,唐花(赤彩),内:唐花(赤彩),釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	228	染付碗		(3.7)	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	
	229	色絵碗	(9.5)	5.9	外:高台端部露胎,雷文(呉須),花(赤彩),枝(緑彩),蓮弁(呉須),釉色:透明,胎土 :N8/	中国製 焼継ぎ	
	230	色絵碗	(9.3)	5.7	外:高台端部露胎,雷文(呉須),花(赤彩),枝(緑彩),蓮弁(呉須),釉色:透明,胎土 :N8/	中国製	
	231	色絵碗	(8.9)	6.0	外:高台端部露胎,雷文(呉須),花(赤彩),枝(緑彩),蓮弁(呉須),釉色:透明,胎土 :N8/	中国製	
	232	色絵碗	(8.9)	6.0	外:高台端部露胎,雷文(呉須),花(赤彩),枝(緑彩),蓮弁(呉須),釉色:透明,胎土 :N8/	中国製	
	233	赤絵鉢	(16.0)	9.1	型作り,外:高台端部露胎,丸文(赤彩),内:丸文(赤彩),釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
48	234	青磁染付蓋	10.4	3.3	外:摘み部端部露胎,摘み部内「?」, 内:唐草·唐花, 釉色:外面青釉, 胎土:N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
48	235	施釉土師質皿	6.7	1.2	外:底部回転糸切り, 露胎, 回転ナデ, 内:回転ナデ, 釉色:2.5YR5/8, 胎土:7.5YR7/6	口縁端部スス付着
	236	土師質皿	(12.1)	2.8	外:口縁部ヨコナデ,体部不定ナデ,内:口縁部ヨコナデ,体部不定ナデ	
	237	青磁染付皿	(13.8)	3.5	外:蛇ノ目高台,唐草文,内:牡丹文,釉色:内面青釉,胎土:N8/	肥前焼 輪花
	238	色絵碗	(8.9)	6.0	外:高台端部露胎,雷文(呉須),花(赤彩),枝(緑彩),蓮弁(呉須),釉色:透明,胎土 :N8/	中国製
	239	青磁染付蓋	10.3	2.5	外:摘み部露胎,体部暦文,摘み部内「?」,内:「寿」文・太極図,釉色:内面青釉,胎土:N8/	肥前焼

I	図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
	48	240	土師質鍋(焙烙)	(35.0)	(6.6)	外:口縁部回転ナデ,底部未調整,内:口縁部回転ナデ,色調:7.5YR4/2	外面スス付着

P 2

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
48	241	土師質鍋(焙烙)	(25.5)	(5.8)	外:口縁部ヨコナデ,底部未調整,内:口縁部回転ナデ,色調:5YR6/7	外面スス付着

P 23

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
48	242	施釉陶器鍋	7.4	4.7	全面施釉,釉色:黑色,色調:7.5YR4/2	外面スス付着, ミニュチア

P 97

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
48	243	無釉陶器摺鉢	(32.0)	(5.8)	外:口縁部回転ナデ,内:口縁部回転ナデ,摺目(7本1単位),色調:7.5Y4/3	丹波燒

P 122

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
49	244	施釉陶器甕	19.9	27.0	外:回転ナデ、体部上位波状文, 釉流し掛け, 内:回転ナデ, 釉色:10R3/2 色調: 10R2/1	丹波焼

P 134

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
49	245	施釉陶器鍋	(14.6)	7.1	外:受口部.体部下半露胎,回転ヘラケズリ,体部上位鉄泥塗布→トビガンナ,内:受口部露胎、釉色:7.5YR7/4,色調:2.5YR4/6	

包含層

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
49	246	土師質鍋(焙烙)	(28.2)	(5.8)	外:口縁部ヨコナデ,底部未調整内:口縁部ヨコナデ,底部ナデ、色調:5YR6/6	
	247	上石臼	26.7	12.1	主溝8本にて8単位に分割,一単位は副溝4本で構成	花崗岩
	248	下石臼	25.8	10.6	主溝8本にて8単位に分割,一単位は副溝4本で構成	花崗岩

第3節 第99次調査の遺物

表 4 第99次調査出土遺物観察表

溝 1

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	249	土師質皿	(8.0)	1.5	外:体部回転ナデ,底部回転糸きり,内:回転ナデ,釉色:胎土7.5YR7/3	
	250	染付碗	(10.8)	5.0	外:口縁端部露胎,体部回線・草文,内:底部蛇ノ目釉ハギ,色調:透明,胎土:N7/	肥前焼
	251	染付碗	10.6	6.2	外:口縁端部露胎,体部果実,内:底部雲文,色調:透明,胎土N7/	肥前焼

埋甕88

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	252	土師質火舎	(15.1)		脚部焼成前穿孔(1箇所), 外:回転ナデ, 内:横位ナデ, 色調:5YR6/6	

P 01

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	253	瓦質火舎	(25.8)	24.4	外:回転ナデ,黒化,内:回転ナデ,底部不定ナデ,色調:胎土:2.5Y7/2	

P 02

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	254	施釉陶器瓶	18.6		外:底部焼成後穿孔・釉刷毛塗りの痕跡,内:露胎,釉色:10R3/2,胎土10YR5.5/1	

P 05

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	255	施釉陶器甕	30.3	39.5	外:回転ナデ,体部波状文・沈線,黒褐色釉流し掛け→透明釉,底部鉄泥刷毛塗り 内:回転ナデ,色調:外7.5Y6/3,内:7.5Y3/4	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	256	土師質皿	(10.9)	1.8	外:体部指押え→不定ナデ,内:口縁部ヨコナデ,色調:胎土:10YR7/31	
	257	施釉陶器碗	(10.3)	5.7	外:高台部露胎,内:底部ハリ目跡(1箇所残),釉色:7.5YR8/2,胎土:7.5Y6/1	京焼系
	258	染付碗	(10.3)	5.2	外:高台端露胎,体部二重網目文,回線,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	259	染付碗	11.3	6.4	外:高台端露胎,体部菊花(印版) 唐草文(3方),回線,内:底部菊花(印版) · 回線 肥前焼,釉色:透明,胎土:N7/	
	260	染付碗	12.5	6.7	外:高台端露胎,体部山水·船 内:底部驚文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	261	染付仏飯具	7.1	4.9	外:底部露胎(鉄泥塗布),体部笹文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
図版	番号	種別	径cm	厚さcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
50	262	瓦軒丸	9.6	1.3	巴文(巻き),裏面:周縁部ヨコナデ,中央部ナデ	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
51	263	無釉陶器甕	29.2	29.9	外:体部回転ナデ→下位ナデ,上位条線・耳環張り付け→鉄泥刷毛塗り,底部目跡 (4箇所)	丹波焼
					内:回転ナデ→鉄泥刷毛塗り,色調:鉄泥2.5YR3/2	

図別	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
51	264	施釉土師質皿	4.9	1.1	外:露胎,底部回転糸きり,体部回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:5YR6/8,胎土:7.5YR7/4	口縁端部スス付 着(1箇所
	265	染付碗	11.2	5.7	外:高台端部露胎,体部唐草文·回線,内:口·底部回線·字文「寿」釉色:透明,胎 土:N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
51	266	土師質皿	7.1	1.5	外:体部指押之,胎土:10YR7/3	磨滅
	267	土師質皿	6.7	1.5	外:体部指押え,内:不定ナデ,胎土:7.5YR7/4	口端部スス付着 (1箇所)
	268	土師質皿	8.8	1.1	外:口縁ヨコナデ,内:不定ナデ,胎土:10YR7/2	口端部スス付着 (1箇所)
	269	土師質皿	(8.8)	1.4	外:底部回転糸切り, 体部回転ナデ, 胎土:7.5YR7/3	口端部スス付着(2箇所)
	270	土師質栓	(2.6)	2.4	外:回転ナデ,内:回転ナデ,色調:2.5YR8/1	
	271	施釉陶器鍋	(18.0)	8.8	外:底部露胎, 体部回転ヘラケズリ(右ロクロ), 釉色:5YR3/6, 胎土:10YR4/6	把手2箇所
	272	無釉陶器摺鉢	(27.4)	9.8	外:口縁部・体部下位回転ナデ, 体部回転ヘラケズリ, 内:回転ナデ→卸目 (10本1単位), 色調:10R5/6	堺・明石摺鉢
	273	白磁碗	(11.9)	6.5	外:高台端部露胎,外:口縁部回転ナデ,体部横ナデ,内:口縁部回転ナデ,釉色:透明,胎土:N8/	
	274	青磁染付蓋	(11.2)	3.3	外:摘み端部露胎,摘み内字文「福」,内:四方襷・回線,中央果実文,釉色:外青釉,内透明,胎土:N7/	肥前焼
	275	青磁染付蓋	(9.7)	3.7	外:摘み端部露胎,摘み内字文「福」,外面青釉,内:四方欅・回線,中央五弁花,釉 色:外青釉,内透明,胎土:N7/	肥前燒
	276	青磁染付碗	7.4	6.4	外:高台端部露胎,内:口縁部四方襻,底部回線,·五弁花 $($ 印判 $)$,釉色:外青釉,内透明,胎土: $N7/$	肥前燒
	277	青磁染付碗	(11.4)	6.4	外:高台端部露胎,高台內字文「福」内:口縁部四方棒,底部回線·五弁花,釉色:外青釉,内透明,胎土:N7/	肥前焼
	278	青磁染付碗	(11.2)	6.4	外:高台端部露胎,高台内字文「福」内:口縁部四方樓,底部回線・五弁花,釉色:外青釉,内透明,胎土:N7/	肥前焼
	279	染付皿	12.8	3.7	外:高台端部露胎,内:蛇ノ目釉ハギ,体部松葉文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	280	染付碗	(13.3)	6.5	外:高台端部露胎,体部花卉・銀杏・蓮弁,高台部回線,内:底部回線・?,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	281	染付段重	(7.2)	4.2	外:高台端部露胎,口縁部回線,体部回線·花卉文,高台部回線,内:口縁部露胎,釉 色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	282	染付仏飯具	(6.7)	4.5	外:底部露胎,体部笹文,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	283	染付仏飯具	7.5	4.9	外:底部露胎,体部紅葉文(3方),釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	284	施釉土師質皿	(5.8)	1.1	外:体部露胎・回転ナデ,底部回転糸切り,内:回転ナデ,釉色:5YR5/8,胎土:5YR7.5/3	

埋桶103

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	285	土師質皿	8.6	2.1	外:体部指押え→ナデ,口縁部ヨコナデ,内:口縁部ヨコナデ,体部ナデ,口縁端部スス付着(6箇所),色調:10YR8/2	

埋桶148

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	286	施釉土師質皿	(6.2)	1.2	外:回転ナデ,底部回転糸切り,内:回転ナデ,釉色:透明,胎土10YR8/3	釉剝落
	287	施釉陶器皿	2.6	1.1	型作り、外:体部露胎、鎬、釉色:緑色、胎土:2.5Y3/8	
	288	染付碗	(8.6)	4.3	外:高台端部露胎,体部竹文,釉色:透明,胎土:7.5GY8/1	肥前焼

埋桶153

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	289	染付皿	(12.8)	3.1	外:高台端部露胎,内:体部草花文,底部蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	290	染付小鉢	(7.6)	6.0	外:高台端部露胎,体部草花文·回線,釉色:透明,胎土:N7/	肥前燒
図版	番号	種別	径cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	291	瓦軒平	3.7	1.2	中心飾り,唐草文	
	292	瓦軒丸	(10.1)	(1.3)	左巴文	
	293	瓦軒丸	14.5	2.1	左巴文	

埋桶155

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	294	染付碗	(10.0)	4.9	外:高台端部露胎,体部二重網目文,釉色:透明,胎土:N7/	
図版	番号	種別	径cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	295	瓦軒丸	14.7	2.3	左巴文	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	296	土師質皿	(6.7)	1.9	外:底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:調整不明,色調:7.5YR7/4	口縁端部2箇所 スス付着
	297	染付碗	12.4	6.8	外:高台端部露胎,高台内字文「?」,体部草文,高台部回線,釉色:透明,胎土: N7/	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	298	土師質皿	5.5	1.1	外:底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,色調:10YR8/2	口縁端部3箇所 スス付着
	299	土師質皿	5.8	0.9	外:底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,色調:10YR8/2	口縁端部8箇所 スス付着
	300	施釉陶器鍋	_		型造り,表:梅+人物, 釉色:透明, 胎土:10YR8/2	把手部
	301	白磁皿	4.2	1.5	型造り,外:体部露胎,鎬文,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	302	白磁皿	8.2	2.4	外:高台部露胎,底部蛇ノ目,釉ハギ,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	303	染付碗	6.7	5.2	外:高台部露胎,菊花+斜格子(五方),高台部回線,内:体部回線,底部回線,五弁花,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	304	青磁染付蓋	9.8	3.1	外:摘み端部露胎,青釉,摘み部内字文「福」,内:口縁部四方襷,回線,中央五弁花(印判),釉色:外青釉,胎土:N8/	肥前焼
	305	染付蓋	(10.5)	3.1	外:摘み端部露胎,体部花+蝶々,摘み部内花文,内:回線,中央鷺,釉色:透明,胎 土:N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	306	土師質皿	(8.9)	1.4	外:指押さえ,内:調整不明,色調:胎土.5YR5/1	
図版	番号	種別	辺長cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	307	土製品灯篭	3.3	(4.9)	色調:10YR8/3	
図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
52	308	土師質鍋	(27.8)	(5.3)	外:口縁部回転ナデ,底部未調整,内:回転ナデ,色調:胎土:2.5Y7/2	
53	309	無釉陶器摺鉢	(32.0)	(8.8)	外:口縁部回転ナデ,体部回転ヘラケズリ,内:卸目(10本 1 単位) →口縁部回転ナデ 色調:2.5Y5/4	
	310	染付瓶	3.5	(8.5)	外:頚部瓔珞文,内:露胎,色調:釉色無釉,胎土:N8/	肥前焼
	311	施釉陶器瓶	4.5	(8.6)	外:井桁(鉄絵),内:体部露胎,釉色:透明,胎土:5Y7.5/2	
	312	白磁碗	(8.4)	4.1	外:高台脇部露胎,釉色:透明,胎土:7.5YR6/3	肥前焼
	313	陶胎染付小碗	(6.2)	5.6	外:体部菊花重ね,高台部露胎高台脇部「周平造」(呉須描),内:口縁部回線,釉色: N8/,胎土:10YR6/2	
	314	白磁杯	5.4	1.7	外:高台端部露胎,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	315	染付皿	9.1	2.3	型造り(輪花), 外:高台端部露胎, 口縁端部鉄釉, 内:家屋・遠山・干網, 釉色:透明, 胎土:N8/	肥前焼
	316	染付皿	(10.3)	3.0	型造り(輪花),外:高台端部露胎,体部波·舟,内:花文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	317	染付碗	(8.6)	(3.8)	外:体部梅文,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	318	染付碗	(8.1)	6.9	型造り,外:高台端部露胎,体部菊・回線,内:口縁部「田」字文(呉須地に字文白描き), 釉色:透明,胎土:N8/	
	319	染付碗	(8.6)	4.7	外:高台端部露胎,体部竹,内:口縁回線,底部不明文·回線,釉色:透明,胎土: N8/	肥前焼
	320	染付皿	(28.9)	4.9	外:高台端部露胎,体部唐草,高台脇部回線,高台内回線,ハリ目跡(五箇所),内:底部椿,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼 焼継

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
53	321	染付皿	(27.7)	4.3	外:高台端部露胎,体部唐草,高台脇部回線,高台內ハリ目跡 (六箇所),高台內字「渡辺」赤彩,内:口縁部蝶々・山水 (区画文)・半菊花,底部:松・網,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	322	赤絵小碗	(6.4)	2.7	外:高台端部露胎,口縁・高台脇部回線,高台内「□」,内:「万角」呉須描き・赤絵,釉色:透明,胎土:N8/	
	323	染付碗	10.4	5.5	外:高台端部露胎,体部菊花,高台脇部回線,内:口縁部桧垣?,底部回線·不明,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
53	324	土師質鍋(焙烙)	(33.0)	6.9	外:口縁部ヨコナデ,底部未調整,内:磨滅,色調:胎土5YR5/3	
	325	施釉陶器?	2.6	(7.1)	内:無釉, 釉色:緑色.胎土2.5Y8/4	
	326	染付瓶	(1.5)	7.2	外:高台端部露胎,体部竹·梅,内:無釉,釉色:透明,胎土:N8/	肥前燒
	327	施釉陶器皿	2.6	1.1	型造り,外:体~底部露胎,体部鎬,釉色:緑色,胎土:2.5Y8/3	
	328	白磁皿(紅皿)	2.3	1.0	型造り,外:体~底部露胎,体部鎬,釉色:透明,胎土:N8/	
	329	施釉陶器碗	(10.5)	4.5	外:高台端部露胎,体部刷毛目,内:体部刷毛目,蛇ノ目釉ハギ,釉色:5YR3/3,胎 土7.5YR5/4	肥前焼
	330	染付碗	(10.3)	6.1	外:高台端部露胎,体部唐花唐草,口縁·高台部回線,内:雷文,底部回線,十字花,釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼, 焼継き

埋桶63

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
53	331	土師質壷	(18.7)		外:回転ナデ,体部下位回転ヘラケズリ,内:回転ナデ,色調:胎土7.5Y8/4	内面底部スス付 着 胞包壺
54	332	施釉陶器蓋	(9.2)	2.8	外:体部露胎,回転ヘラケズリ,内:摘み部貼付け,釉色:2.5Y8/2,胎土2.5Y8/4	
	333	施釉陶器土瓶	(10.7)	13.7	外:体~底部露胎,回転ヘラケリズリ,内:口縁・体~底部露胎,回転ナデ,注口部 4 穴,色調:10YR6/2,胎土5Y8/1	肥前焼
	334	無釉陶器摺鉢	(32.0)	12.8	外:ロ~体部回転ナデ,体部下位,ヘラケズリ,内:ロ~体部鉄泥塗布,口縁部回転ナデ,色調:2.5YR4/3	丹波焼
	335	染付碗	(7.6)	5.6	外:高台端部露胎,体部蝶々・回線,折れ松葉,内:口縁回線・底部?,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼

埋桶65

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	336	施釉土師質皿	5.8		外:底部回転糸切り, 体部露胎, 回転ナデ, 内:回転ナデ, 釉色:7.5YR6/8, 胎土:7.5YR7/4	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	337	施釉土師質皿	(6.6)	1.2	外:底部回転糸切り,体部露胎,回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:7.5YR6/6,胎土: 10YR5/4	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	338	白磁皿	(4.1)	1.6	型造り,外:体部露胎,鎬,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	339	白磁皿	(5.1)	1.5	型造り,外:体部露胎,鎬,釉色:透明,胎土:N7/	肥前燒
	340	色絵蓋	8.3	2.4	外:摘み端部露胎,脇部呉須回線,体部丸文・竹・松(赤絵)・梅(呉須),釉色:透明,胎土:N8/	肥前焼
	341	青磁染付碗	(11.4)	6.1	外:高台端露胎,体部青釉,内:口縁四方襮,底部回線・?,釉色:外5G7/1,内:透明,胎土:N8/	肥前焼系

埋桶83

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	342	施釉土師質皿	6.4	1.3	外:底部回転糸切り, 体部露胎, 回転ナデ, 内:回転ナデ, 釉色:5YR5/8, 胎土:7.5YR7/4	
	343	染付蓋	8.9	(2.6)	外:口縁端露胎,体部牡丹唐草,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	344	無釉陶器植木鉢	(16.5)	12.6	外:回転ナデ,内:回転ナデ,色調:胎土5YR3/3	
	345	染付鉢	(18.2)	7.2	外:高台端部露胎, 体部?, 高台脇部回線, 内:底部蛇ノ目釉ハギ, 底部五弁花(印判), 回線, 釉色:透明, 胎土:N8/	肥前焼

埋桶90

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	346	土師質皿	(6.5)	1.1	外:底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,色調:胎土7.5YR8/	口縁端部スス付着(1ヶ所)

埋桶103

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	347	白磁皿	(4.2)	1.3	型造り,外:体部露胎,鎬,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼
	348	青磁染付碗	7.5	6.0	外:高台端露胎,体部青釉,内:口縁四方襷,底部回線・?,釉色:外5G7/1,内:透明,胎土:N8/	肥前焼系
	349	青磁染付碗皿	(12.7)	7.0	外:高台端露胎,体部青釉,高台内字文「福」,内:口縁四方襻,底部回線·?,釉色:外5G7/1,内:透明,胎土:N8/	肥前焼系
	350	染付碗	11.7	6.1	外:高台端露胎,体部丸文(3方)·回線,高台内字文「寿」,内:口縁四方襮,底部五弁花,(印判)·回線,釉色:透明,胎土:N7/	肥前焼

図版	番号	種別	口径cm	器高㎝	成形・調整技法の特徴・文様	備考
54	351	土師質皿	(6.5)	1.1	外:底部回転糸切り,体部回転ナデ,内:回転ナデ,色調:胎土7.5YR7/4	口縁端部スス付 着(一箇所)
	352	無釉陶器摺鉢	(31.0)	11.7	外:体部回転ナデ,下位ヘラケズリ,内:回転ナデ→卸目(6本1単位),色調: 10R5/4	丹波焼

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
55	353	土師質皿	(9.8)	(1.9)	外:口縁部ヨコナデ,体部指オサエ,内:口縁部ヨコナデ,体部ナデ,色調:胎土 2.5Y7/1	口縁端部スス付着
	354	施釉陶器鉢	(19.0)	7.2	外:高台部露胎,体部回転ヘラケズリ,内:底部蛇ノ目釉ハギ,体部回転ナデ,刷毛目文,釉色:2.5Y6/4,胎土2.5Y7/3	肥前焼
	355	白磁皿	(8.7)	2.3	外:高台部露胎,内:底部蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土N7/4	肥前焼
	356	染付碗	(9.5)	5.7	外:高台端部露胎,体部菊(印判)·蘭(3方),高台脇回線,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
	357	染付碗	(3.0)		外:高台端部露胎,体部風景,高台脇回線,内:底部回線·?, 釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
	358	染付碗	10.0	5.2	外:高台端部露胎,体部梅(3方),釉色:透明,胎土N7/	肥前焼

包含層

包含層											
図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考					
55	359	土師質火爐	(17.5)	14.4	外:体部下位穿孔 (1箇所),口縁部ヨコナデ,体部ナデ,内:回転ナデ,色調: 2.5Y8/2						
	360	施釉陶器皿	(22.4)	7.4	外:高台部露胎,体部回転ヘラケズリ,内:白化粧→菖蒲(鉄絵),釉色:透明,胎土: 7.5YR7/2	輪花					
	361	染付蓋	(10.1)	5.3	外:摘み部露胎,摘み部内松,体部松,内:回線,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼					
	362	染付碗	10.0	5.2	外:高台端部露胎,体部山水,高台内回線,内:口縁·底部回線,釉色:透明,胎土 N7/	肥前焼					
	363	赤絵段重	(8.4)	4.2	外:体部窓(呉須), 花(赤絵), 下位露胎, 内:口縁部露胎, 釉色:透明, 胎土N8/	肥前焼, 焼継ぎ					
	364	染付碗	(9.8)	5.1	外:高台端部露胎,口縁部回線,体部菊花(印判),高台部回線,釉色:透明,胎土: N8/	肥前焼					
	365	染付碗	(10.1)	5.2	外:高台端部露胎,体部折枝花,高台部回線,内:,蛇ノ目釉ハギ,釉色:透明,胎土 :N8/	肥前焼					
	366	染付碗	(10.1)	5.2	外:高台端部露胎,体部草,高台脇回線,高台内回線·字文「?」,釉色:透明,胎土 :N8/	肥前焼					
図版	番号	種別	幅cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考					
55	367	軒丸	13.8	2.0	左巴文						
	368	丸瓦	13.8	2.0	外:筒部縦位ナデ,内:布目(縦本/cm,横本/cm)						
図版	番号	種別	径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考					
55	369	石製品五輪塔	22.6	17.0	風・水輪部	花崗岩					

第4節 第114次調査の遺物

表 5 第114次調査出土遺物観察表

溝 1

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
56	370	施釉陶器蓋	5.5	(1.2)	外:底部回転糸切り,底部露胎,回転ナデ,内:回転ナデ,釉色:透明,胎土5Y6/3	
	371	赤絵鉢(輪花)	(9.7)	3.9	外:高台端部露胎,内:底部草花(花部赤彩)釉色:透明,胎土N8/	

溝 3

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
56	372	染付碗	(10.0)	5.0	外:高台端部露胎,体部草花,高台脇·内部回線,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼

溝 5

図版	番号	種別	全長cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考	
56	373	丸瓦	(17.2)	2.0	外:縦位ナデ,内:布目(縦 5 本/2.7cm,横位4本/2.7cm,),色調:N2/,胎土N6/		

溝 8

図版	番号	種別	全長cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
56	374	丸瓦	(11.4)	1.9	外:縦位ナデ,内:布目,色調:N2/,胎土N6/	
	375	丸瓦	34.1	2.3	外:縦位ナデ,内:布目→ナデ,色調:N2/,胎±N6/	
	376	丸瓦	(20.1)	1.9	外:縦位ナデ,内:布目,色調:N2/,胎土N6/	
	377	丸瓦	34.0	2.1	外:縦位ナデ,内:布目→ナデ,色調:N2/,胎土N6/	

溝 9

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
56	378	白磁皿	(4.0)	1.5	型造り,外:鎬,体部下位,露胎,釉色:透明,胎土N7/	肥前焼
図版	番号	種別	径cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
56	379	石製品碁石	2.2	0.8	色調:N8/	

溝18

図版	番号	種別	全長cm	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
57	380	丸瓦	(19.4)	2.2	外:縦位ナデ,内:布目,色調:N2/,胎土N6/	
	381	丸瓦	26.6	2.2	外:縦位ナデ,内:布目→ナデ,色調:N2/,胎土N6/	

井戸 2

図版	番号	種別	幅em	厚みcm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
57	382	軒丸瓦	(8.1)	1.8	瓦当左巴文,色調:N2/,胎土N6/	
	383	軒平瓦	(8.1)	1.8	中心飾り,色調:N2/,胎土N6/	
	384	軒丸瓦	13.7	2.0	瓦当左巴文,色調:N2/,胎土N6/	
	385	軒平瓦	3.7	1.5	中心飾り, 色調:N2/, 胎土N6/	

井戸35

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
57	386	染付碗	(7.2)	(5.3)	外:遠山·舟·回線,内:口縁部四方襻,底部回線,釉色:透明,胎土N8/	
	387	染付碗	(9.8)	4.9	外:口縁端部露胎,体部渦・回線,内:口縁部太線,底部回線,釉色:透明,胎土N8/	
	388	施釉陶器土瓶		(10.5)	外:体~底部露胎,体部回転ヘラケズリ,底部脚部(3箇所),内:体部上位露胎(鉄泥塗),回転ナデ,釉色:10YR2/3,胎土7.5YR7/4	外面底部煤付着 布

井戸39

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
57	389	無釉陶器摺鉢	(5.0)		外:口縁部回転ナデ,内:回転ナデ,色調:胎土2.5Y4/3	丹波焼

土坑27

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
58	390	土師質蓋	15.1	3.8	外:口縁部回転ナデ,体部ナデ,内:回転ナデ,色調:胎土7.5YR7/4	胞衣壷
	391	土師質蓋	11.1	18.1	外:ロ~体部回転ナデ,底部砂付着,繊維状圧痕,内:回転ナデ,底部指押さえ,色調:胎土7.5YR7/4	胞衣壷

土坑17

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
58	392	土師質鍋(炮烙)	11.1	18.1	外:口縁部ヨコナデ,体部ナデ,内:口縁部ヨコナデ,色調:胎土10YR7/3	内面黒化

土坑15

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
58	393	施釉陶器碗	(10.0)	7.1	外:体部下位露胎・回転ヘラケズリ,釉色:5Y5/4,胎土5Y8/2	瀬戸・美濃焼系

P-23

図片	〔 番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
58	394	土製品面子	3.3	0.7	型造り	表面墨塗布

土坑 8

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
58	395	染付瓶	1.9	3.9	外:高台端部露胎,体部竹·草花,内:体部露胎,釉色:透明,胎土N8/	肥前焼
	396	染付碗	(11.5)	6.4	外:高台端部露胎,体部雲?,内:口縁部回線,底部銀杏·回線,釉色:透明,胎土 N8/(広東形)	肥前焼

包含層

図	板 番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
5	397	瓦質焜炉	22.5	20.1	外:刻印?	
	398	施釉陶器鉢 (植木鉢)	(15.9)		外:体部下位~底部露胎,体高台部抉り1部回転ナデ,高台内回転ヘラケズリ,内:体部下半露胎,釉色:7.5YR2/2,胎土クリ-ム色	

図版	番号	種別	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴・文様	備考
59	399	施釉陶器碗	(7.8)	13.0	外:体部下位~高台部露胎,体部白泥・鉄泥描き,釉色:5Y7/,胎土2.5YR6/4	萩焼
	400	白磁皿	9.3	1.8	外:高台端部露胎,内:底部幾何学(陰刻),釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼系
	401	赤絵瓶	(10.5)		外:高台端部,体部花卉(3方)·若杉·梅·花(赤彩),内:体部露胎,釉色:透明胎土 N8/Y	肥前焼
	402	染付蓋	7.8	2.2	外:摘み端部露胎,体部蓮弁,内:口縁部雲,四葉・回線,釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼
	403	染付蓋	7.8	2.2	外:摘み端部露胎,体部丸文,内柳・人物,雁・松・水辺,捻文,内:鷺・回線,釉色:透明,胎土:N8/Y	肥前焼
	404	白磁瓶?		(6.0)	外:体部下位~高台端部露胎,高台内施釉,体部回転ヘラケズリ,内:露胎,回転ナデ釉色:7.5YR3/4,胎土7.5YR4/3	肥前焼
	405	染付椀	(9.5)	4.2	外:高台端部露胎,体部花唐草,回線,高台脇部回線,内:口縁部帯線・回線,底部回線・?,釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼
	406	染付皿	(19.8)	6.3	外:高台端部露胎,体部唐草·回線,高台脇部回線,高台內渦「福」,内:体部?·回線,底部五弁花(印判),釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼
	407	染付水滴	5.4	2.2	外:青海波·亀陽刻印(呉須塗布),釉色:透明,胎土N8/Y	肥前焼

表 6 金属器出土遺構一覧表

		_					_														
図版	番号	番号 種別 出土調査区 出土遺構 図版 番号 種別 出土		出土調査区	ŀ	出土遺構	図版	番号	種別	出土調査区	Н	土遺	葬								
65	1	J	ウ	ガ	イ	第75次調査区		溝	65	11	籍	第75次調査区	柱	3	弋 65	21	釘	第75次調査区	柱		穴
	2	煙			管	第75次調査区	包	含層		12	簪	第75次調査区	土	į	亢	22	釘	第75次調査区	土		坑
	3	煙			管	第114次調査区	サフ	プトレンチ		13	簪	第75次調査区	柱	3	7	23	釘	第75次調査区	埋	桶	6
	4	刃	物	の中	子	第75次調査区	土	坊		14	簪	第75次調査区	土	坑	3	24	釘	第84次調査区	包	含	層
	5	環	状	製	品	第84次調査区	土	坊		15	針 金 状 製 品	第75次調査区	土	坑	3	25	釘	第75次調査区	包	含	層
	6	環	状	製	品	第84次調査区	サフ	ド トレンチ		16	独楽状製品	第75次調査区	土	坑 4	5	26	釘	第75次調査区	土		坑
	7	環	状	製	品	第75次調査区	溝	3		17	筒 状 製 品	第75次調査区	井	Ī	ī	27	釘	第75次調査区	柱	穴	7
	8	環	状	製	品	第75次調査区	土	坑 20		18	釘	第75次調査区	土	坑 3	8	28	釘	第75次調査区	柱	穴	7
	9	用:	途不明	用環状	鉄器	第75次調査区	包	含 層		19	釘	第75次調査区	埋	桶	3	29	釘	第75次調査区	土		坑
	10			簪		第75次調査区	土	坑 19		20	釘	第75次調査区	土	ţ	t						



整理作業の状況 (平成8年度)

第5節 出土の金属器

今回報告を行う4箇所の調査区からは、鉄釘をはじめ数十点の金属製品が出土しているが、その多くは用途不明の製品であるため、ここではその内の29点を報告する。器種的には、煙管・簪・鉄釘・用途不明品に分類できるものである。なお、出土調査区・出土遺構については、表22のとおりである。

篦状製品 (1) : 篦部分の周辺は腐食のために欠損するするが、現長約25.5cmを測る。篦部分の最大 遺存幅は約5.1cmである。基部は幅約0.9cm、厚さ0.5cm~0.6cmの断面長方形の角材とし、約13.2cmの長 さを以て折り返している。折り返したその先端は、装着し易いように箆部との間に約4.5mmの間隔を設けている。銅製品である。

煙管(2・3):2は銅製の火皿部分である。頸部から上方の皿部分は欠損するが、管内には竹管の一部が残存する。板材の接合箇所は錆のためにはっきりしない。火皿部の現長約10.5cm、管挿入口の口径約2.1cm、竹管を含めた残存現長約13.4cmを測る。3は吸口金具であるが、口の先端部分をわずかに欠損しており、現長約13.5cmを残す。管挿入部の口径は約2cmであり、内部に竹製の管材が残存する。こちらは板材の接合部を明確に見て取ることができる。材は銅であり、表面に塗銀を施している。

刃物の中子(4):小型の刀類もしくは包丁の中子と思われるが、本体部分がないため明確ではない。 表面には把手の木質が錆化して残存している。 X 線写真で見るかぎり、固定用の木釘穴が穿孔された痕跡は確認できない。現長約10.8cm、最大幅約3.6cm、最大厚約1.2cmの鉄製である。

環状製品 $(5 \sim 8)$: $5 \cdot 6$ は大型の鉄製品であり、 $7 \cdot 8$ は小型の銅製品である。5 は外径約5.6cm、内傾約3.7cmであるが、断面は厚さ約3 cmの扁平なものとなる。6 は楕円形平面であり、外径約3.8cmと2.9cm、内傾約3 cmと2.2cmを測る。断面は基本的には3 mm程度の方形であったと思われるが、現状は角が欠落し、隅円となる。7 は外径約2.1cm、内傾約1.6cmの正円形を呈する。断面も径約2 mmの円形のため、全体的にかなり細身となる。8 の平面は正円形であり、外径約2.2cm、内傾約1.4cmを測る。基本的に断面は円形と思われるが、腐食が著しく、表面がかなり荒れた状態となっている。いずれとも単品で使用するものではなく部品の一部と考えられるため、その用途については明確でない。

用途不明環状鉄器 (9) :外径約3.6cm、内傾約2.8cmの環状製品に現長約1.7cmの棒状品を接合した 形態となる。環状部分の断面は一辺4mm程度の方形であり、棒状部は一辺が約5mmの角材である。ただ し、この棒状部は先端に向かって、上下方向から削り込んで尖らせているため、この部分を木質部に打 ち込んで使用したものと思われるが、明確な使用方法は不明である。

笄(10~14):10は下半を欠損しており、現長約4.7cmを測る。下方は断面が扁平で、そこに方形の穿孔が行われており、その部分で破損している。上方に向かっては断面が次第に円形となり、耳搔部分を作り出している。11は全長約16.2cm程度になる。中央部分でL字形に屈曲し、その下方が小さく波打つがほぼ完在状態にある。断面は円形にあり、上端を叩いて耳掻部分を作り出している。12は全長約16.3cmの完形品であるが、全体が複雑に折れ曲がる状態となっている。身部の断面は円形で、先端に向かって次第に細くなる。上端には細い頸部を設けて、円形の頭部を作り出している。13は全長約13.8cmを測る完形品である。全体がゆるやかなへの字形の状態にある。断面は薄い杏種形であり、先端部は両側より削って尖らせる。上端は円く納め、頭部を作り出さない形態にある。14は基本的に12と同様の形態になるものと思われるが、頭部が欠損している。断面は円形になるが、12よりはやや太めとなる。現長は約11.3cmで、先端部は尖るものと思われる。全体は釣針形に屈曲する。この5点は、いずれも銅製

品である。

針金状製品(15):現長は約7.5cmであるが、全体はU字形に大きく曲がっている。針金様に細く、断面は円形となる。銅製品である。

独楽状製品 (16) :全体の形状が独楽の形態に近い銅製品である。基部は平面形円形の笠形であるが、 周囲辺部は欠損し、最大径で約3.1cmを測る。笠部の内側からほぼ垂直に、長さ約1.5cm、径約5mmの棒 状部が付く。飾り金具等とも考えられるが、性格は不明である。

筒状製品(17):口縁部に比べて底径のやや大きくなる、銅製の筒状製品である。口縁部径は約6.7cm になるものと推定されるが、その先端は内側に水平になるように折り返している。現高は約6.5cmを残し、底径は約7.5cmとなるものと思われる。底部をほとんど欠損するが、底径部よりも若干下がるものと推定される。花器・仏具・部材等の用途が考えられるが、明確ではない。

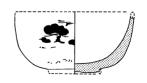
釘(18-29): $18\cdot25\cdot27$ は大型となるものである。18は頭部を欠損するが、現長約12.5cmを残存する。断面は最大で一辺が約1cmの方形となる。25は全長約15.4cmを測り、先端部分はゆるやかにカーブした状態にあり、その先端をわずかに欠損する。頭部は片側に小さく折り曲げる形態である。表面の剝脱は著しく、遺存状況は悪い。27も18とほとんど同様の状況にある。現長は8.5cmを測り、方形断面の最大一辺は約1cmである。これ以外は小型に属する鉄製の角釘である。26が全長を知り得るが、約8.9cmを測る。これ以外は、頭部もしくは先端部を欠損している。頭部の形態は一方向に折り返すタイプと考えられる。ただし、20のみ円形となる可能性もある。

銅銭(30~76):30~75までは寛永通宝であり、76は文久永宝である。46枚の寛永通宝のうち12枚は古寛永である。型式的には、元文元年山城鳥羽銭が5枚と最も多く、以下寛永14年松本銭・明暦2年駿河沓谷銭・享保13年仙台石ノ巻銭が各4枚、宝永5年江戸四ツ宝銭・元文年間紀伊中島銭が各3枚、寛永14年吉田銭・寛文8年江戸亀戸銭・正徳4年江戸浅草銭・元文2年江戸小梅銭・元文3年出羽秋田銭・元文4年江戸十万坪銭・寛保元年長崎一ノ瀬銭が各2枚あり、仙台銭・駿河井之宮銭・京都七条銭・江戸十万坪銭・江戸亀戸銭・江戸平野新田銭・相模吉田島銭・江戸亀戸銭・不明各1枚と続く。出土地区別には第99次の調査区からの出土が最も多く16枚、続いて第114次調査12枚、第75次調査11枚、第84次調査8枚となる。古寛永銭の出土は第114次で5枚が出土し、その他の調査区では2から3枚が出土している。銅銭の概略については、表22のとおりである。

第6節 出土の木器

今回の発掘調査では埋桶に用いられた桶材などの木製品が出土 しているが、ほとんどの遺存状態が悪く、図化できたものは第75 次調査の電1-1の埋土中から出土した漆椀1点のみである。

漆椀:口径約12.5cm、底径約5.5cm、器高約6.1cmの大きさをもち、内面は朱漆、外面は黒漆地に朱描きで松と笹、対面には萩を描いている。広葉樹の横木取りの木胎は肉厚で口縁部の布着せなども見られない。



第5図

第75次調查区出土漆器

表 7 銅銭一覧表

表 /	ず 門 支戈 「	- 筧表			
	調査次	出土遺構	区分名称	鋳造年(西暦)	観察事項
30	第75次	土坑20	松本銭	寛永14年(1637)	「寛永」の文字がやや腐食する
31		包含層	駿河沓谷銭	明暦 2 年(1656)	やや「寛」の文字が崩れるが、遺存状態良好
32		土坑54	江戸浅草銭	正徳 4 年(1714)	全体的にやや腐食し、文字が薄くなる
33		土坑43	京都七条銭	享保11年(1726)	若干の磨滅のために文字がわずかに型崩れする
34		ピット74	江戸十万坪銭	享保11年(1726)	「寛」の字がやや磨滅
35		土坑20	仙台石ノ巻銭	享保13年(1728)	腐食が著しく、文字も辛うじて判読できる状態
36		ピット86	山城鳥羽銭	元文元年(1736)	「永」の下方を欠損するが、表面の状態は良好
37		包含層	山城鳥羽銭	元文元年(1736)	絶対的な遺存状況は良好
38		ピット76	江戸平野新田銭	元文4年 (1739)	文字部分がかなり腐食
39		土坑7	紀伊中島銭	元文頃	遺存状況良好、文字も鮮明
40		石列裏込	紀伊中島銭	元文頃	表面が腐食し、文字もやや不鮮明
41	第84次	撹乱 —————	松本銭	寛永14年(1637)	わずかに腐食し、「永」以外の3文字がやや不鮮明
42		土塁上	駿河非之宮銭	寛永16年(1639)	腐食により文字がわずかに低くなる
43		土塁上	駿河沓谷銭	明暦 2 年(1656)	腐食により文字が若干不鮮明
44		埋甕56	江戸四ツ宝銭	宝永5年 (1708)	腐食により文字がかなり不鮮明
45		土坑25	仙台石ノ巻銭	享保13年(1728)	遺存状況良好、文字も鮮明
46		撹乱	仙台石ノ巻銭	享保13年(1728)	腐食のため文字が少々低くなる
47		土塁上	仙台石ノ巻銭	享保13年(1728)	遺存状況良好、文字も鮮明
48		撹乱	不明		腐食が著しく文字体の判断ができない
49	第99次	土坑39	吉田銭	寛永14年(1637)	腐食のため文字は著しく不鮮明
50		土坑130	駿河沓谷銭	明暦 2 年(1656)	遺存状態は良好、文字の鮮明
51		サブトレンチ		寛文8年 (1668)	遺存状態は良好、背面に「文」文字あり
52		包含層	江戸亀戸銭	寛文8年 (1668)	遺存状態は良好、背面に「文」文字あり
53		土坑39	江戸四ツ宝銭	宝永5年 (1708)	若干腐食するが文字は鮮明
54		土坑66	江戸四ツ宝銭	宝永5年 (1708)	腐食にため文字がかなり不鮮明
55		土坑81	山城鳥羽銭	元文元年(1736)	腐食のため文字部分が若干低くなる
56		土坑74	山城鳥羽銭	元文元年(1736)	周縁部はやや腐食するが、文字は鮮明
57		土坑110	江戸小梅銭	元文2年(1737)	文字はやや低くなる、背面に「文」文字は無い
58		包含層	江戸小梅銭	元文 2 年(1737)	遺存状態は良好、背面に「文」文字は無い
59		土坑73	出羽秋田銭	元文 3 年(1738)	腐食が著しく文字体は不明確
60		土坑130	出羽秋田銭	元文 3 年(1738)	文字が若干潰れる
61		包含層	相模吉田島銭	元文 4 年(1739)	腐食のため文字体不明確
62		包含層	江戸十万坪銭	元文4年 (1739)	文字が若干磨滅して低くなる 「寶」字が若干不鮮明となる
63		包含層	長崎一ノ瀬銭	寛保元年(1741) 	質」チが右下不軒切となる 背面に波文あり、遺存状態良好
64	Man 12	包含層	文久永宝		表面が若干腐食し、文字がやや不鮮明となる
65	第114次	包含層	仙台銭	寛永14年(1637)	文字がわずかに低くなる
66		土坑 7	松本銭	寛永14年(1637)	表面が若干腐食し、「寛」・「寳」の文字が不鮮明
67		包含層	松本銭	寛永14年(1637)	表面が著しく腐食、文字はまったく不鮮明
68		溝08	吉田銭	寛永14年(1637)	比較的良好に遺存、「寛」字がやや不鮮明
69		包含層	駿河沓谷銭	明暦 2年(1656)	正教的良好に退付、「見」子がでで小野切 表面が腐食し、文字もかなり不鮮明となる
70		包含層	江戸浅草銭	正徳 4 年(1714)	表面が若干腐食、「寛」字がわずかに不鮮明となる
71		土坑24	山城鳥羽銭	元文元年(1736)	表面がわや腐食し、文字がやや不鮮明となる
72		包含層	江戸亀戸銭	元文2年(1737)	表面がやや腐食し、メチがやや小軒切となる 腐食のため文字がかなり不鮮明となる
73		撹乱 	江戸十万坪銭	元文4年(1739)	「寶」字の部分を欠損、遺存状況は良好、文字鮮明
74		溝01 	紀伊中島銭	元文頃 宮 保元年 (1741)	・質」 キの前がを入損、履行が心は及対、 ステキャラ 全面腐食のため、文字は不明確
75		包含層	長崎一ノ瀬銭	寛保元年(1741) 	宝田腐良のため、又子は小明曜 遺存状態は良いが、文字はかなり磨滅し不鮮明
76		包含層	江戸亀戸銭	明和5年(1768)	退什仏忠は良V*ル、人士はルなり岩版し小評労

まとめにかえて

伊丹郷町に関しては、近世以降の絵図が9枚伝えられている。寛文9年(1669)の「伊丹郷町絵図」が最も古く、最新のもので明治6年(1873)の「伊丹郷町地引絵図」である。この9枚の絵図と今回の発掘調査結果とを対比しながら、「伊丹郷町」の北西部の一角を占める昆陽口村の変遷とその屋敷地割りについて、簡単に触れてみたい。

まず、9部の絵図の概要については以下のとおりであるが、これは伊丹市立博物館編集、伊丹資料叢書6『伊丹古絵図集成』(1982年)の内容に基づいたものである。

1:「文禄伊丹之図」作成年代不明

近世後期に古野将盈が文禄当時を推定して描いたものを、天保七年(1836)に伊東景直が写したもの。絵図を描いた目的は不明である。郷町内の15の町名を明示している。

2:「寛文九年伊丹郷町絵図」1669年(カラー写真図版1)

寛文年間の近衛家領時代を描いたもの。郷町内には17町が存在することが知れる。

3:「延宝5年伊丹郷町地味委細絵図」1677年

幕府の派遣した巡見使に提出した巡見絵図である。代官小堀源兵衛正憲配下の北少路・昆陽口・北中少路の三村の田畑を記したもの。

4:「延宝5年外崎・外城・高畑村巡見絵図」1677年

3と同様、代官小野宗左衛門貞久の支配する外崎・外城・高畑の三村の巡見絵図である。伊丹郷町 の総構え範囲については支配外のため、極簡単に描かれている。

5:「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」1694年

柳沢吉保領八カ村の住人名、職業、敷地の規模を個別に記載している。また、本百姓の場合にはその旨を記し、借家の場合には借家人とともにその屋敷主も明示している。

6:「寛政八年伊丹細見図」1796年 (カラー写真図版2)

伊丹郷町内27町とその区画を記している。

7:「文化改正伊丹之図」作成年代不明(カラー写真図版3)

上記の古野将盈が描いたものを、天保七年(1836)に写したもの。1の図とその表現に共通すると ころが多い。特徴的な地形が良く表現されている。

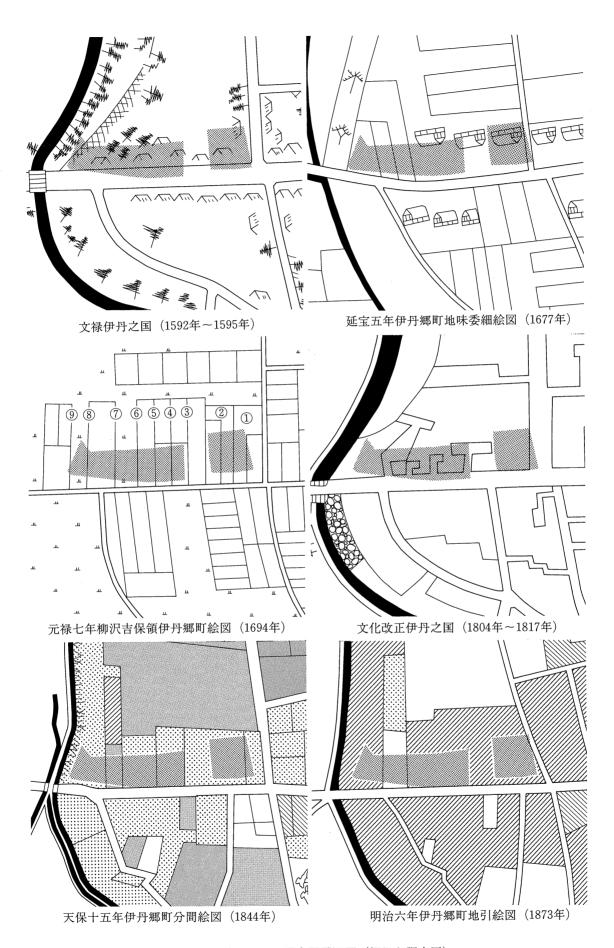
8:「天保十五年伊丹郷町分間絵図」1844年(カラー写真図版4)

伊丹郷町全域の屋敷地の状態を示した絵図である。町内の町筋名が記されている。

9:「明治六年伊丹郷町地引絵図」1873年(カラー写真図版5)

地券証を発行するために、兵庫県の命により作成した地引絵図であるが、8の絵図をもとにして作成されたと考えられ、町域が色分けによって表されている。

そのうち、今回の調査区付近の当時の状況が描かれたものは、第5図に示す6枚の絵図である。ただし、これらの絵図は上記したようにその目的が異なるため、その内容も一律にはなっていない。よって、まず調査区周辺の屋敷割り(町割り)を検討するために各絵図を比較してみたい。これ以後、各絵図を「延宝五年伊丹郷町地味委細絵図」は「延宝五年図」のように、年名で呼称することとする。第5図の各絵図に示した横長の網点範囲は、今回の発掘調査区の大まかな位置に相当するものである。また、比



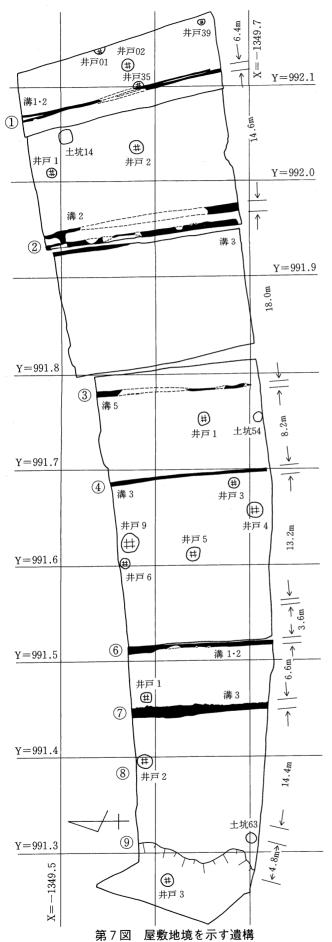
第6図 絵図にみる調査区周辺図 (網目が調査区)

較の際の位置的な基準とするのは現宮ノ前通りに相当する南北方向の道路(各絵図によって呼称が変化している)と、調査区の東端部分にあたる箇所から北と南に枝分かれする路地、西端部で南側にのみ分岐する路地とする。また、「元禄七年図」には欠落するが、西端部に南北方向に描かれている堀の跡と思われる水路がある。「文化改正図」以降の絵図にも描かれているため、「元禄七年図」では絵図の目的上必要ないとして描かなかったものと考えられば、この水路に関しても共通に描かれた要素とすることができる。この道路・路地・水路は地割りの基準として、現在にまで継続している。

後世に推定さて描かれた「文禄図」には数件の民家が描かれているが、後の「寛文九年図」ではまったく家屋がないため、少なくともこの時点では調査区近辺には町屋並みは広がっていなかったものと思われる。明確な町屋が存在したのを確認できるのは「延宝五年図」からとなるが、描かれている建物の位置が調査区内にあたるのか、「元禄七年図」の北側の建物部分に相当するのか厳密にはその位置を確定できない。また、「文化改正図」は一見区画内に入り込む路地を表記しているようにもみえるが、「元禄七年図」と比較すると、路地と思われる箇所は建物の存在していた範囲を示していることが分かる。それ以外の範囲には建物は無く、「元禄七年図」と同様畑地あるいは水田であり、一円に町屋の屋敷地として利用されていたのではなく、建物と生産地が混在する状況にあったことが想定できる。その後の「天保十五年図」には、伊丹郷町の一円が"建家鋪地"として色分けされており、調査地区はそのほとんどが昆陽口村の"建家鋪地"となっていることから、江戸時代末期には一帯が市街地化・商業地化したものと考えられる。

発掘調査による出土遺物・遺構からみても、最も古い時期の遺構は17世紀から18世紀にかけてのものであり、「文禄図」に相当する有岡城期のものは確認されていない。この時期の調査区域は郷町の郭内であるが、まだ建物は建てられていなかったようである。このことからも、「文禄図」の記載内容が事実と異なっており、後世に推定して作成されたことを傍証している。ただし、17世紀から18世紀にかけての明確な遺構も第75次調査の土坑54、第84次調査の土坑63、第99次調査の土坑14のみであるため、「延宝五年図」当時は居住域としては十分に活用されていなかったと思われる。遺構が著しく増加するのは18世紀代からであり、19世紀にかけてその数が顕著となる。ちょうど「元禄七年図」・「文化改正図」頃に相当するわけであり、屋敷地割りが明示されている絵図と発掘調査の年代・結果がほぼ一致する。

次に、「元禄七年図」に示されている屋敷地割りと調査によって確認した遺構との整合関係についてみてみたい。特に、この絵図には各屋敷地毎の間口の間数が明記されているため、厳密な比定が可能と思われる。測定の起点としては、絵図当時から現在にまで存続する調査区東端部から北へ伸びる路地とする。第5図の「元禄七年図」の敷地境の①となっているのが第114次調査区の溝2・3であり、順次②が第99次調査区の溝2・3、③が第75次調査区の溝5、④が同溝3、⑥が第84次調査区の溝1・2、⑦が同溝3、⑧が同溝6、⑨が同堀肩部にあたることが分かる。⑤に関しては、明確に遺構としては確認することができない。さらに、④・⑤間は「善四郎 日用五兵衛」と「日用善兵衛」の屋敷地がそれぞれ三間六寸の間口となっているが、これについてもその遺構を特定することはできていない。また、①・②間の「三右衛門」の敷地、⑥・⑦間および⑧・⑨間の水田(畑地)の間口の幅についても絵図に記載がないため、前後の敷地境から推定したが、全体的な割り振りに不整合がないため、上記の位置・規模で問題ないものと思われる。そうすると西端の「三郎右衛門 日用太兵衛」の屋敷地は完全に郷町の堀の中に当たることとなることから、この時期堀は幅を狭め、その一部が宅地等に利用されていたこ

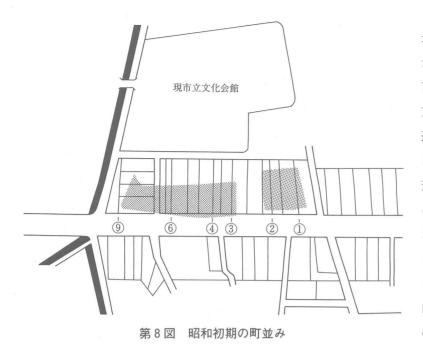


とも想像できる。堀に伴う土塁についても、「文禄図」・「延宝5年図」では水路に沿って 道路より東側にのみ描かれているため「天保十 五年図」まではその存在を確認することができ るが、「明治六年図」では消失しているようで ある。また、場所によっては「元禄七年図」の 寸法と遺構間の実測値の間に一・二尺の長さの 違いは見られるものの、この絵図の屋敷地割り が遺存することが確認できる。

ただし、時期的にこの絵図の時期にまで遡る 遺構は第114次調査区の溝3のみであり、他の 遺構はそれ以降の時期となるが、第114次調査 区の溝1・2、第99次調査区の溝2・3、第75 次調査区の溝3、同溝5・第84次調査区の溝 1・2のように、屋敷地の境となっている溝は 重複もしくは隣接する状況にあり、前代のもの を同一場所で改修してる可能性が高い。現に、 大正末から昭和初期の昆陽口通の町並みを示し た第7図でも、遺構(溝)で確認できた屋敷地 境と当時のものが6箇所で一致していることか ら、この境が厳然と後世まで継続されたことが 知れる。

このように、南北方向の屋敷地割は後世にまで継続されるが、「元禄七年図」にみる東端の「三右衛門」と「三郎右衛門 日用利兵衛」宅地の北の境界、あるいは中程の「善四郎 日用五兵衛」・「日用善兵衛」とその北に居住した「糸引たけ」・「日用勘四郎」との境などのように、東西方向を限っていた遺構はまったく確認できない。ただ、屋敷地の裏に存在したといわれる井戸、同じく裏手あるいは横手に設置されていたと思われる埋甕・埋桶等の分布状況から推定して、第84次調査区の井戸1・2・3、第75次調査区の井戸6・9、第99次調査区の井戸1、第114次調査区の井戸1・2を結ぶライン付近がその境に相当するものと思われる。

このように、東から西に緩やかに傾斜する地 形的な制約もあり、あくまでも南北方向の屋敷



したい。それも通りに面した側のみの間口の幅とその奥行きの長さが示されている。これにより屋敷地の面積を算出すると、本調査対象区などは、実際の広さよりかなり広い敷地として登録されたこととなる。もし仮に、この絵図を台帳として屋敷地の広さに対し、江戸町の公役銀に相当するような租税が各戸に課せられたとすれば、伊丹郷町内におけるその全差額は膨大なものになったことと思われる。

今回の発掘調査により、「元禄七年図」をはじめとして各絵図の蓋然性がある程度実証できたが、その本来的な目的の内容を明らかにするには、いましばらく伊丹郷町全域の調査成果の集積が必要かと思われる。



郷町の境界となった段丘崖と堀部の現状 (第84次調査区の北側の箇所)

図版











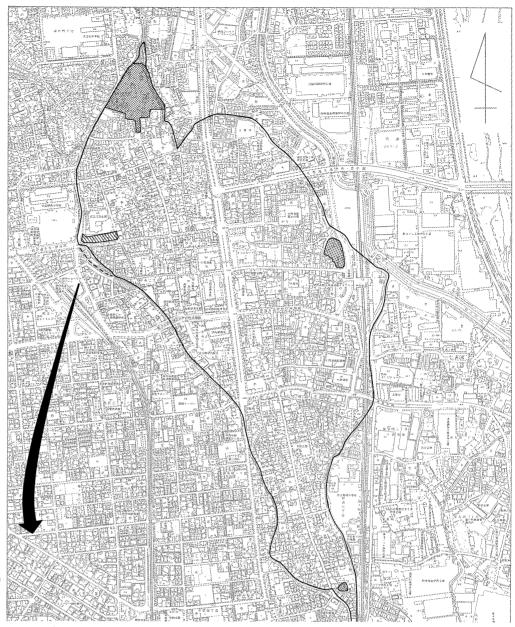






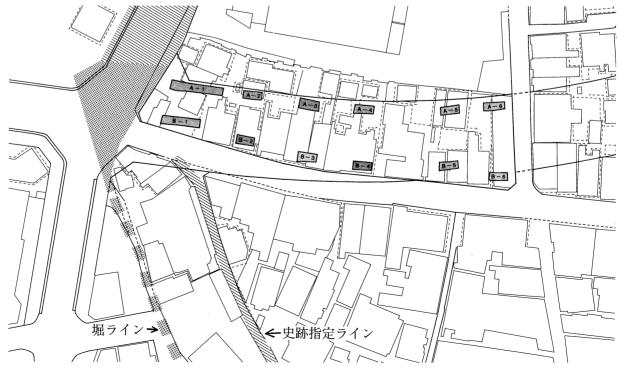


(本遺跡出土の土面子)



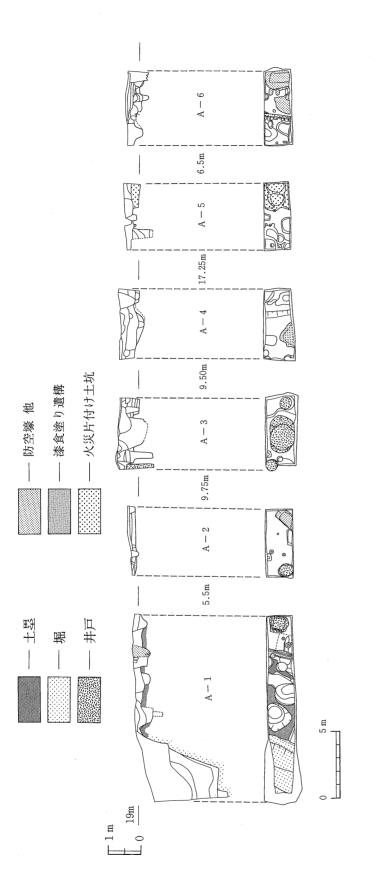
S = 1/10,000

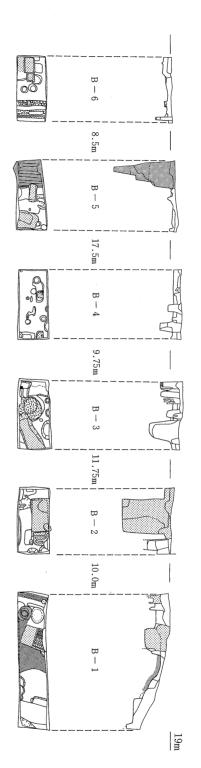
昭和62年度調査地点



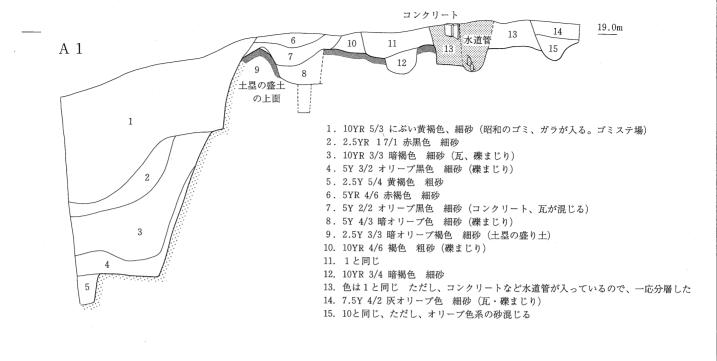
位置図とトレンチ配置図

S = 1/1,000

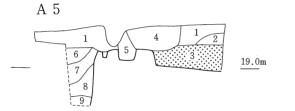




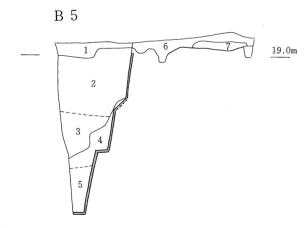
平面図および土層断面図



9. 7と同じ



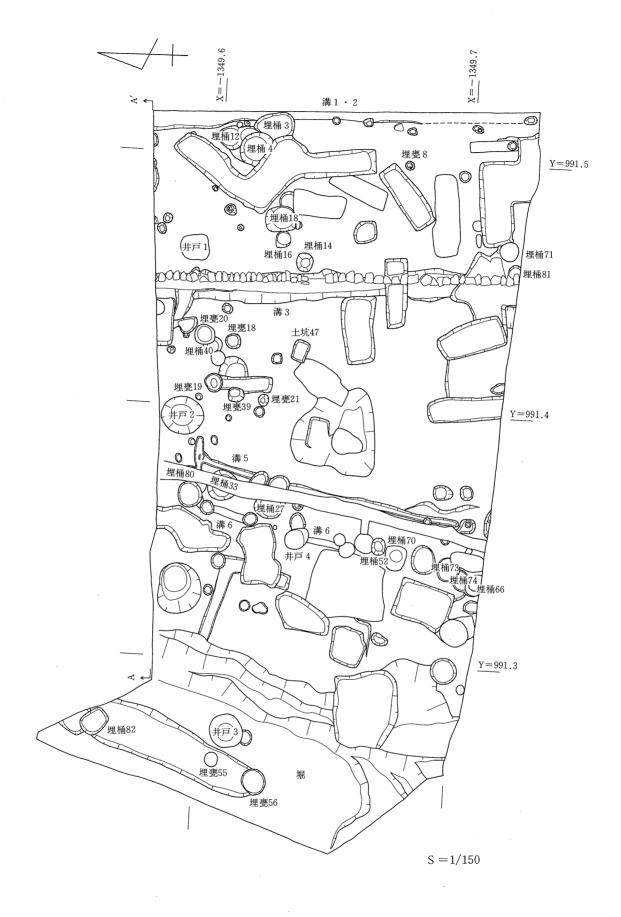
7.5YR 3/1 オリーブ黒色 砂礫
 2.2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 砂礫
 2.5YR 2/1 赤黒色 砂礫 (焼土層、瓦、炭混じり)
 7.5Y 5.2 灰オリーブ色 砂礫 (瓦まじり)
 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 細砂 (瓦まじり)
 7.5YR 5/8 明褐色 細砂 (礫まじり)
 5Y 4/2 灰オリーブ色 細砂
 6と同じ



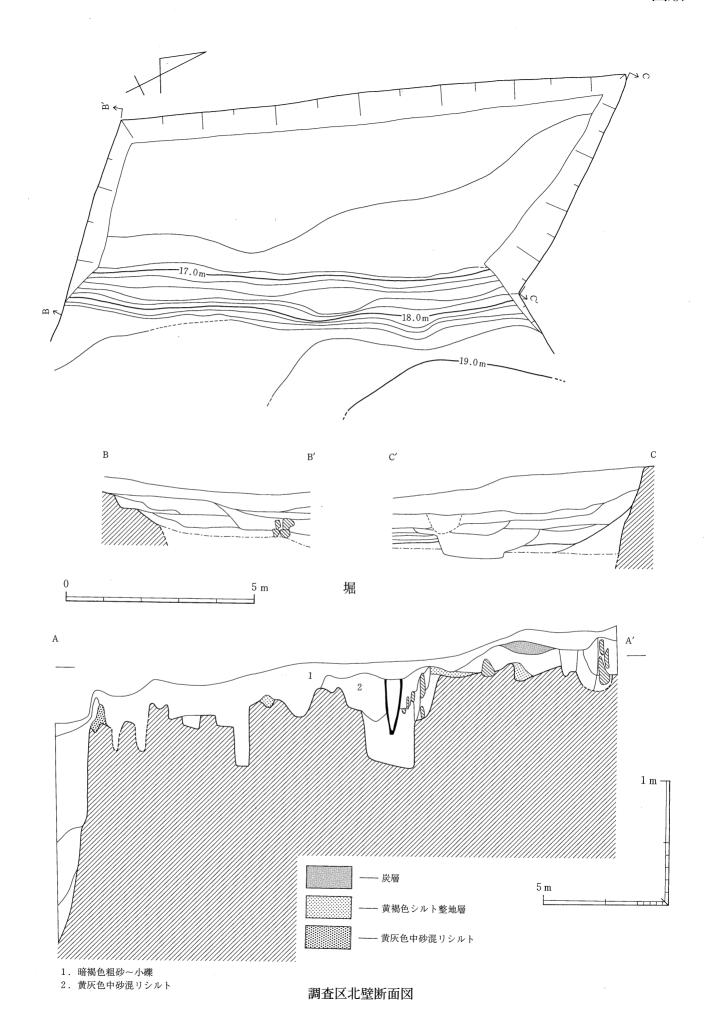
1. 7.5YR 4/1 褐灰 砂礫土 (下部 5 cm はバラス及びコンクリート)
2. 7.5YR 3/1 黒灰 砂礫土 (炭・灰多く含む)
3. (瓦片、多量、埋込)
4. 7.5YR 7/8 黄橙、シルト質極細砂
5. (シックイ壁片、多量、埋込)
6. 10YR 4/1 褐灰 砂礫土 (7.5YR 6/8 橙 シルト質 極細砂、レンズ状に含む)
7. 2.5Y 4/1 黄灰 シルト質 極細砂 (比較的密)

S: $9 \bar{r} = 1/20$ $3 \bar{r} = 1/50$

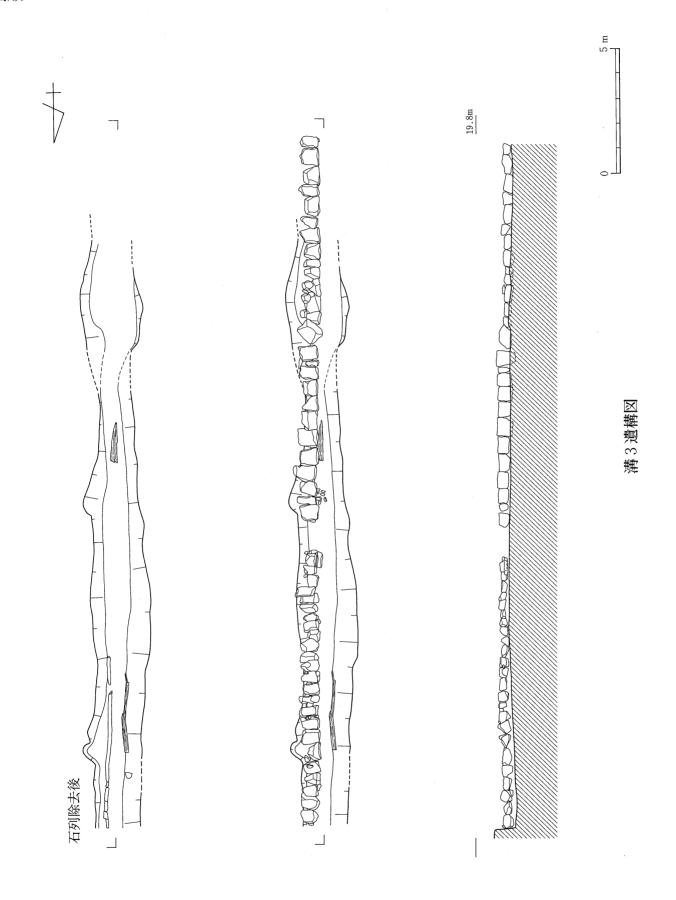
土層断面図

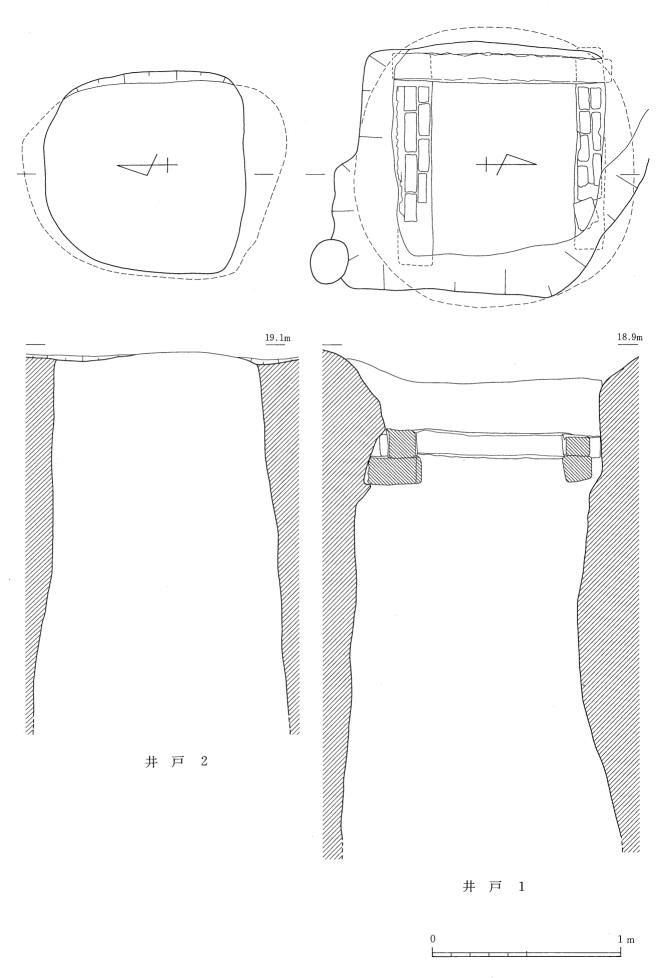


遺構配置図

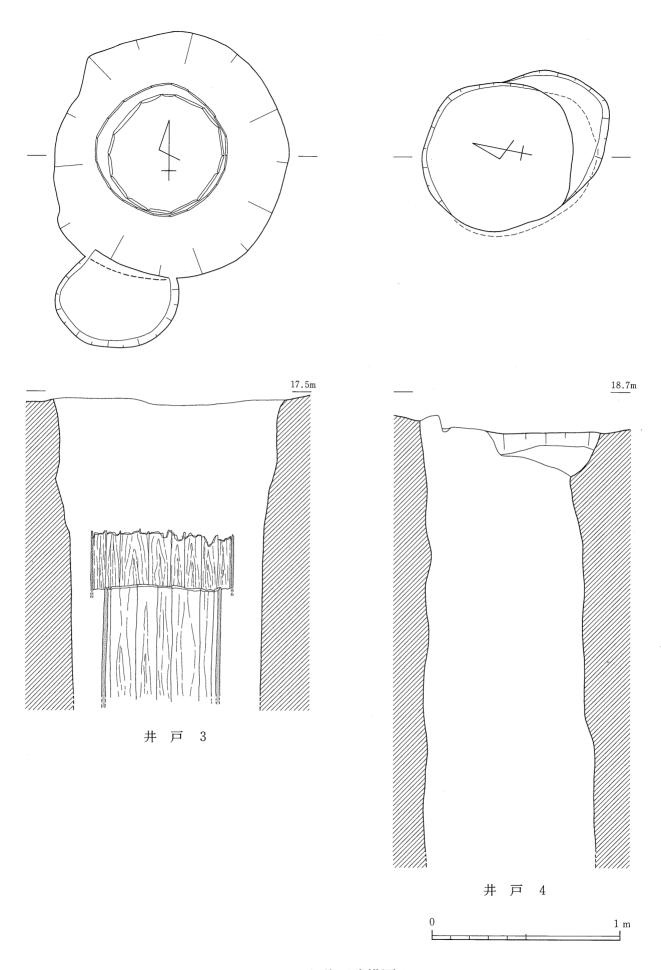


堀と調査区北壁断面図

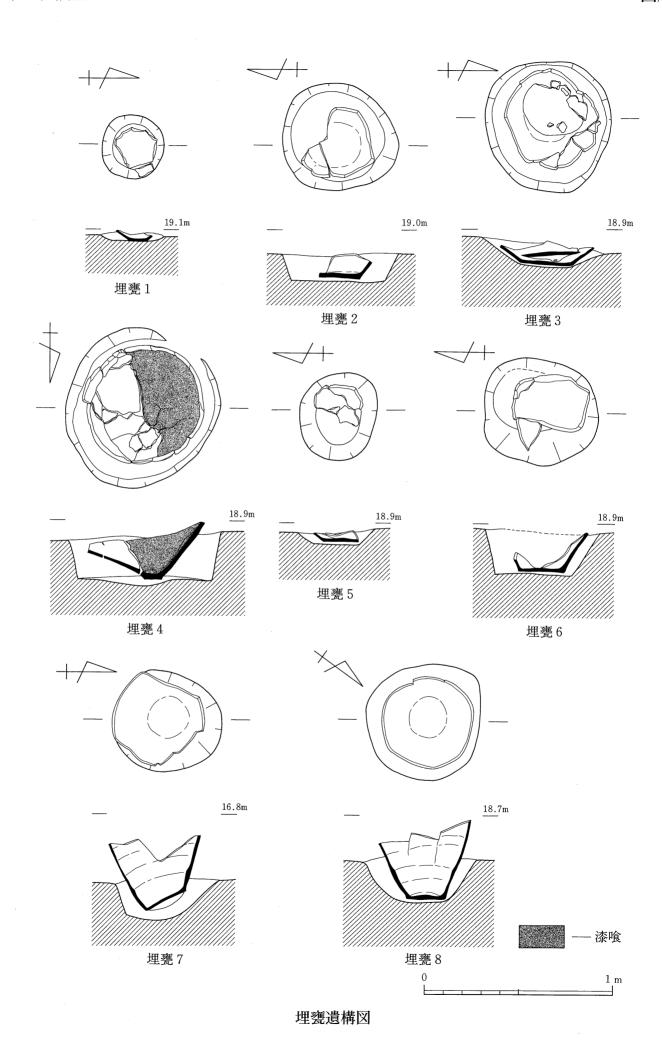


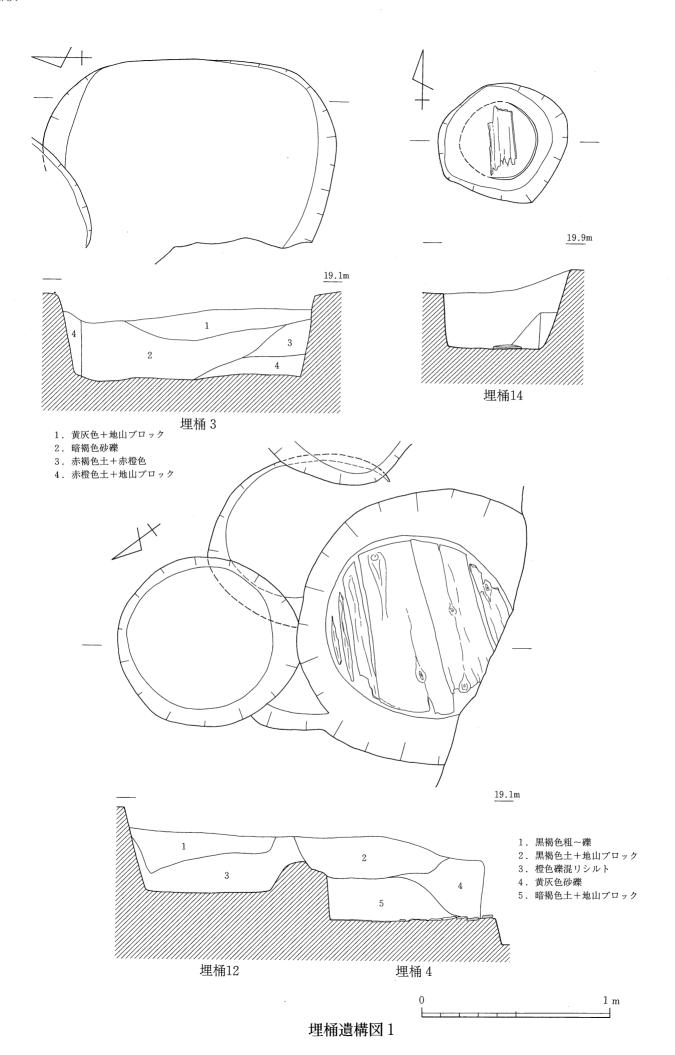


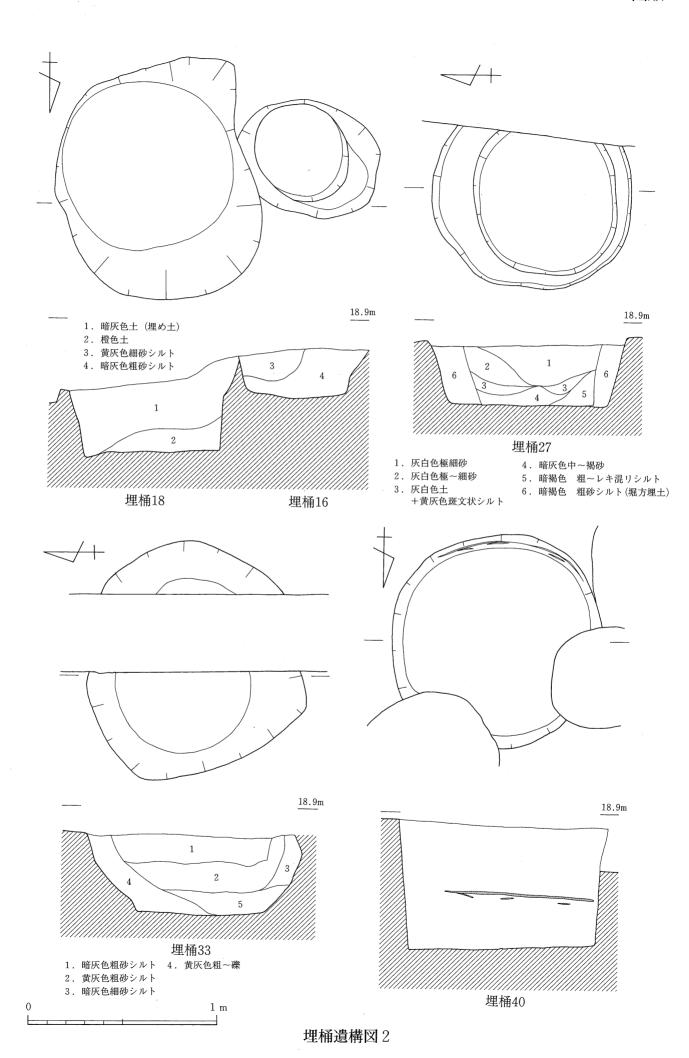
各井戸遺構図1

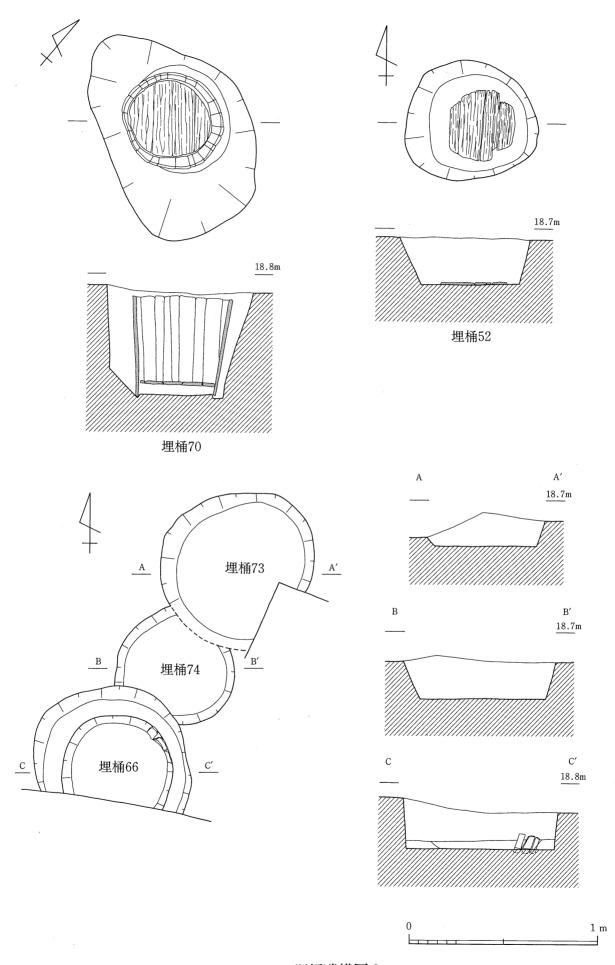


各井戸遺構図2

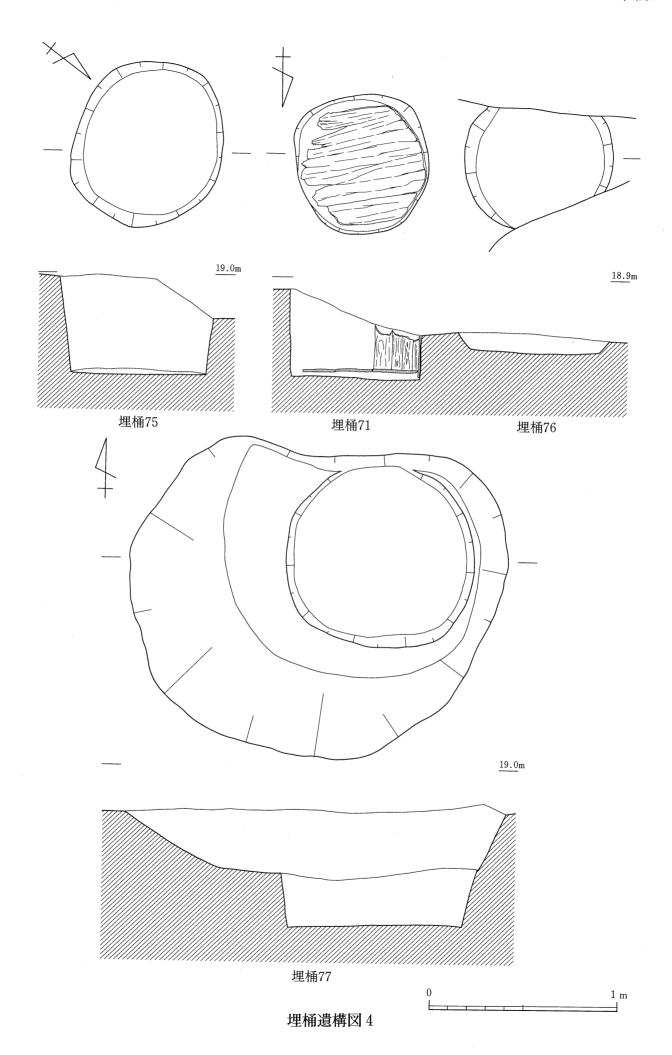


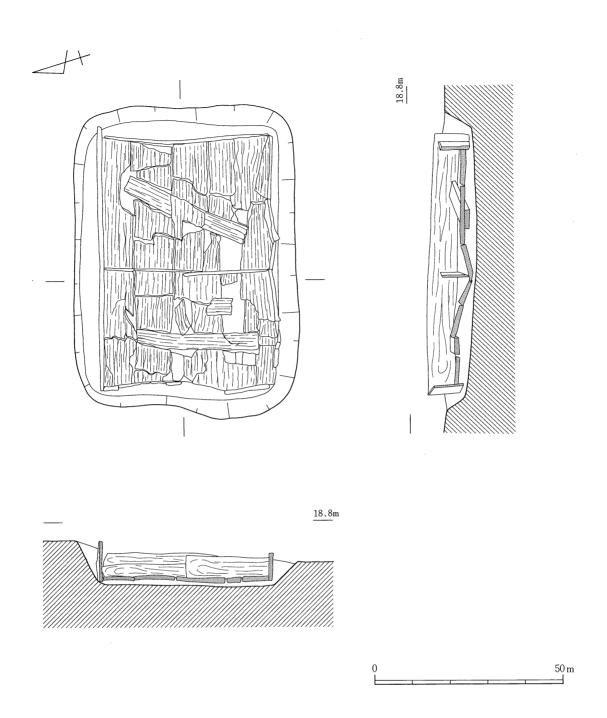




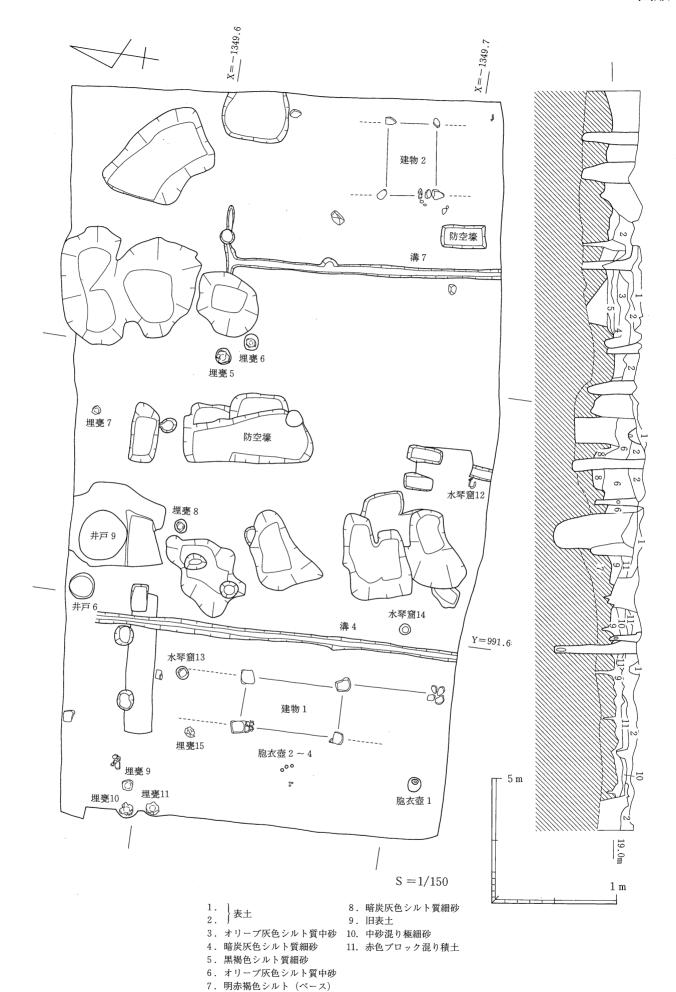


埋桶遺構図3

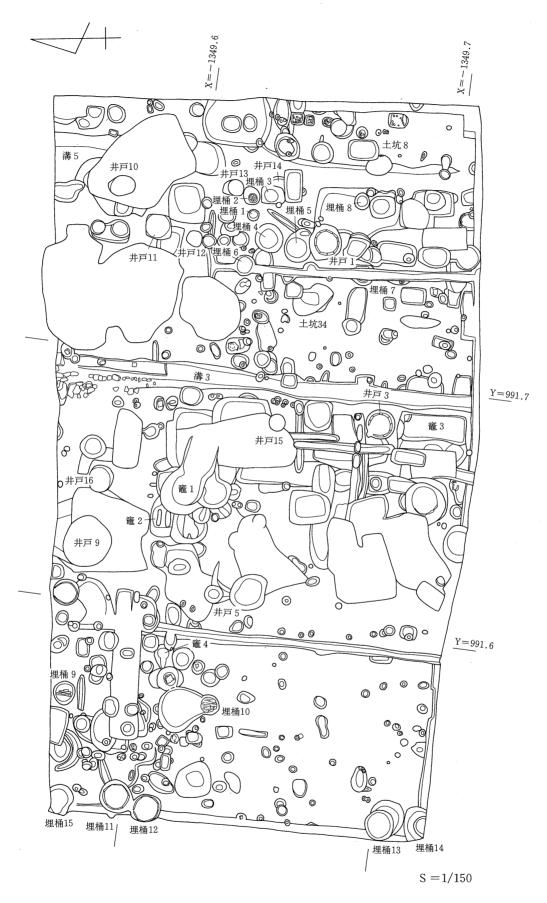




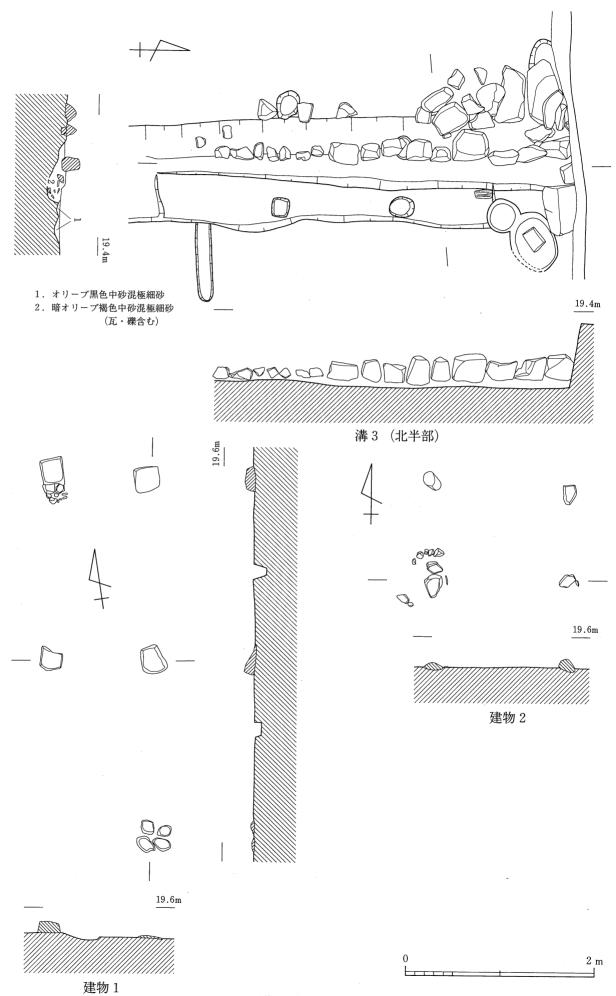
土坑47遺構図



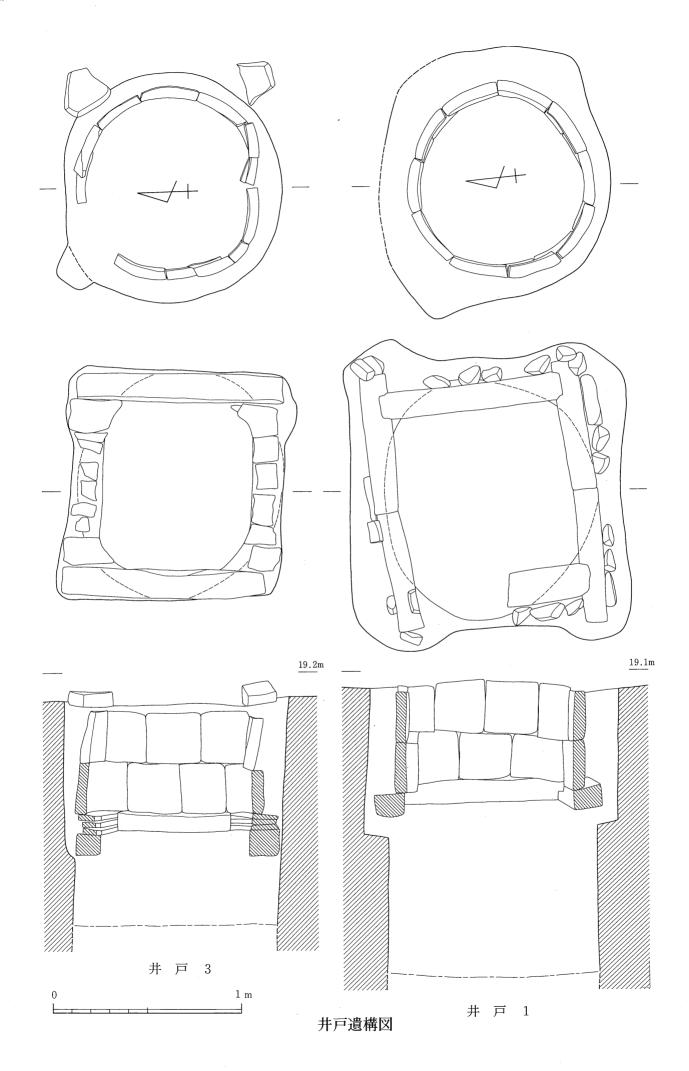
遺構配置図1

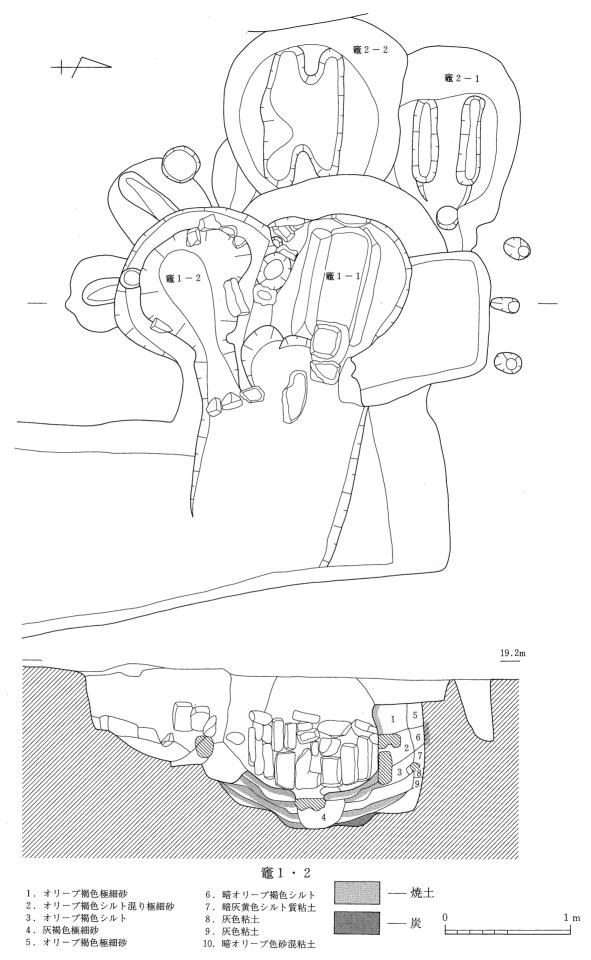


遺構配置図2

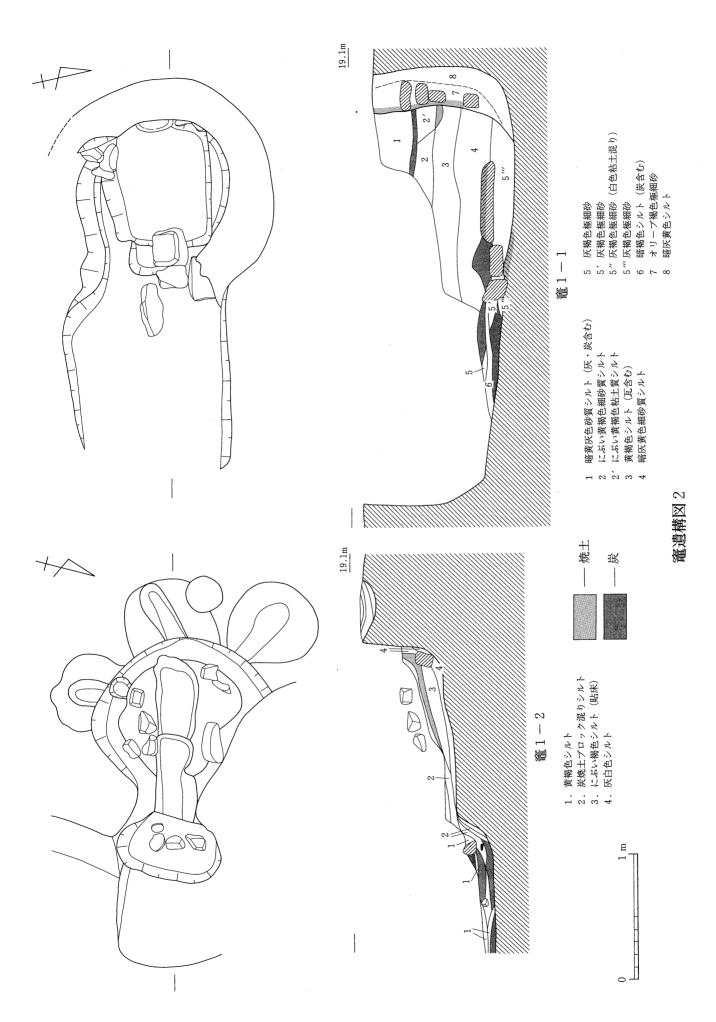


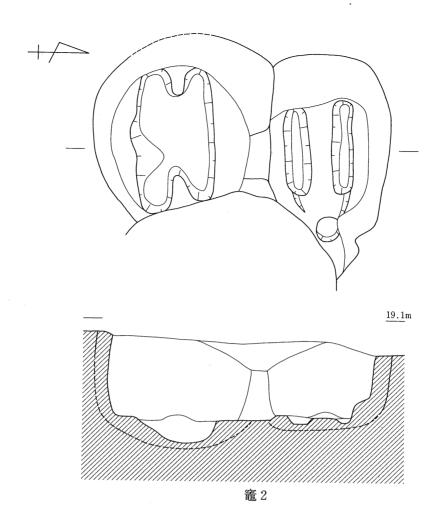
溝・礎石建物遺構図

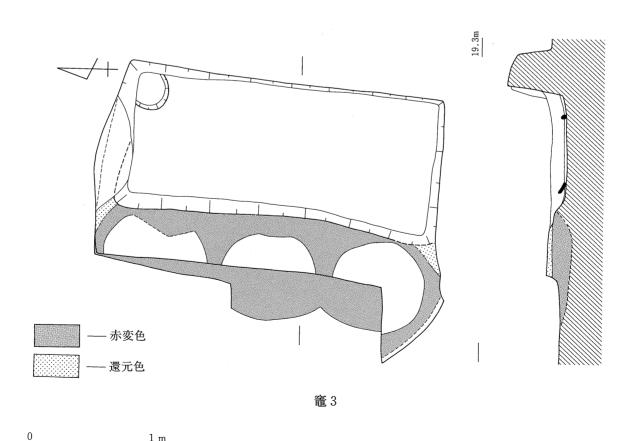




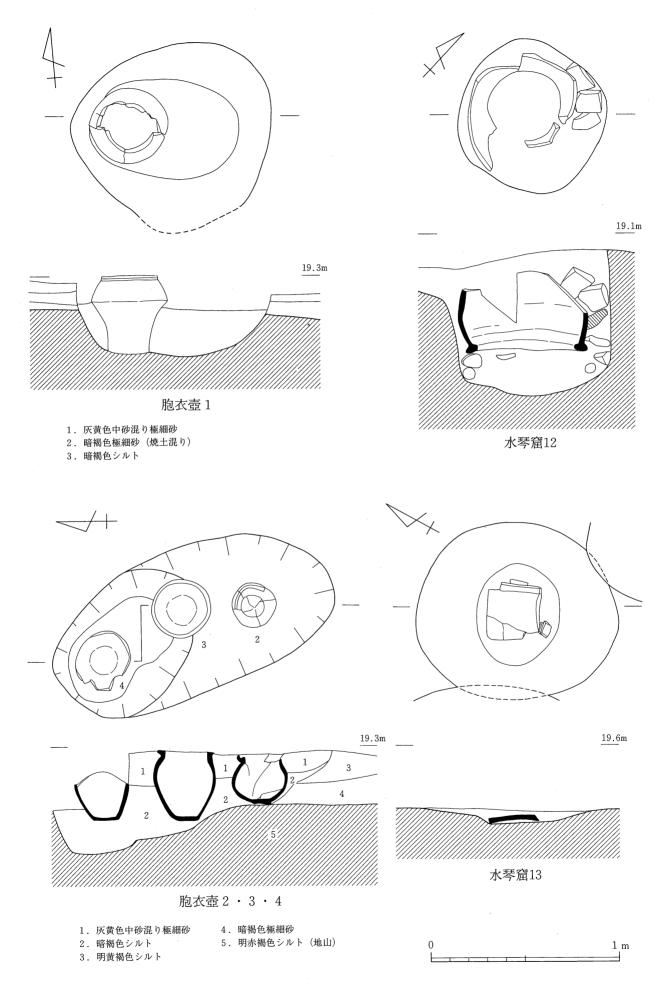
竈遺構図1



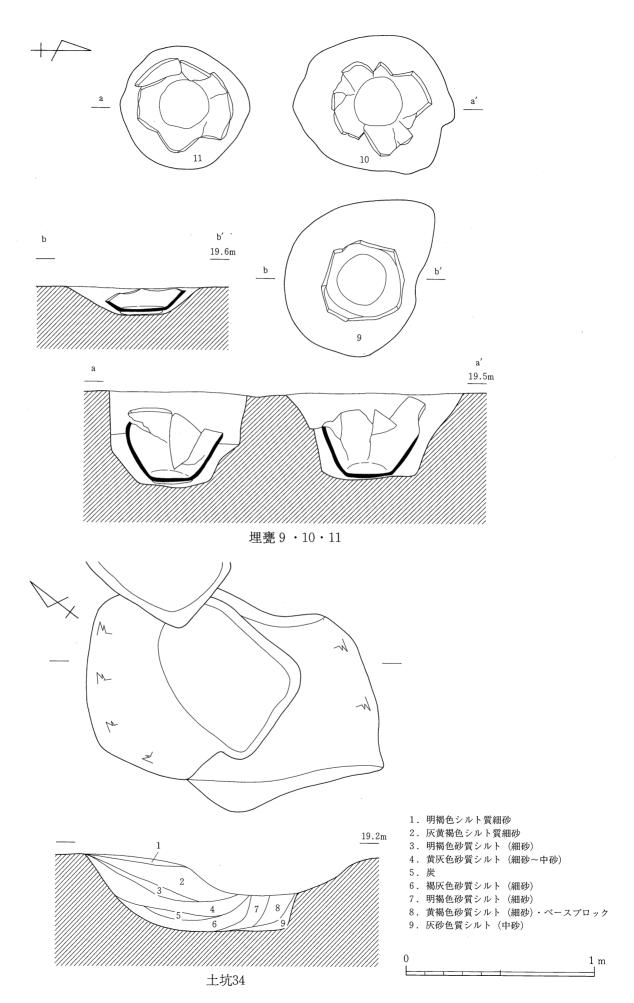




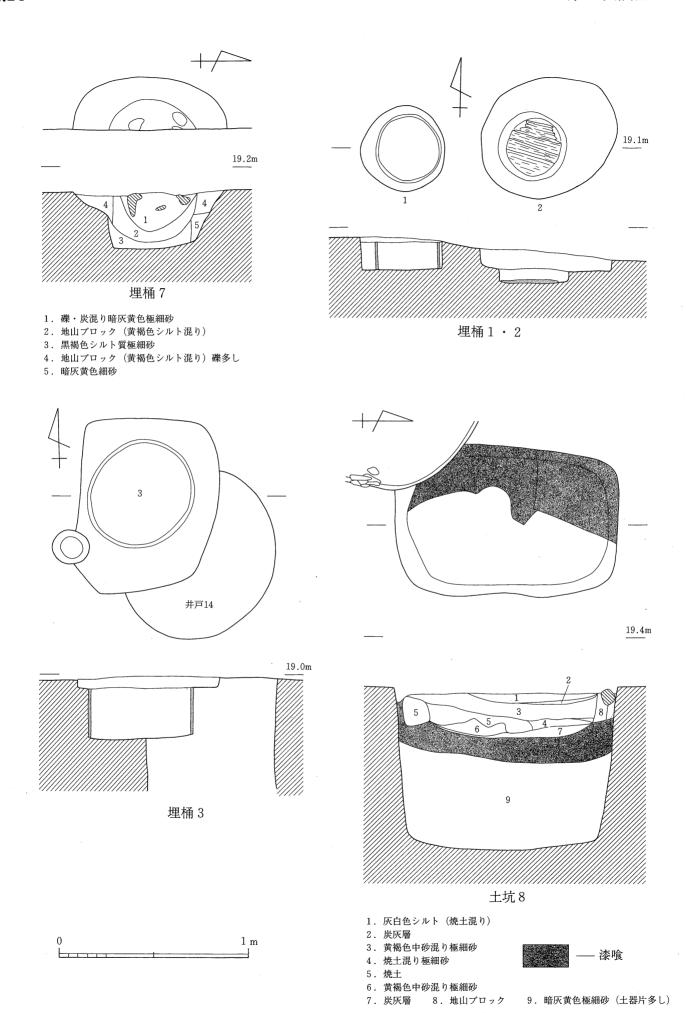
竈遺構図3



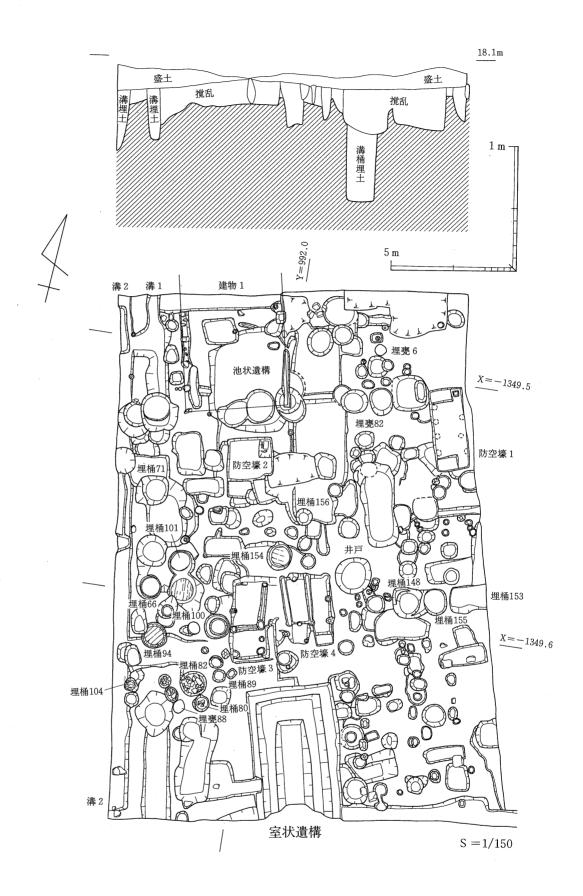
胞衣壺・水琴窟遺構図



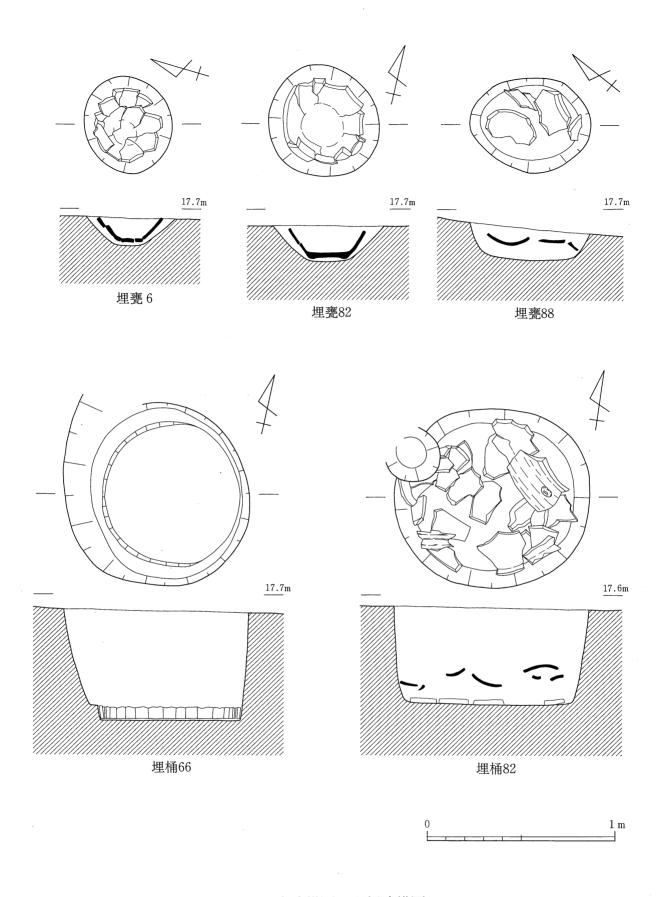
埋甕・土坑遺構図1



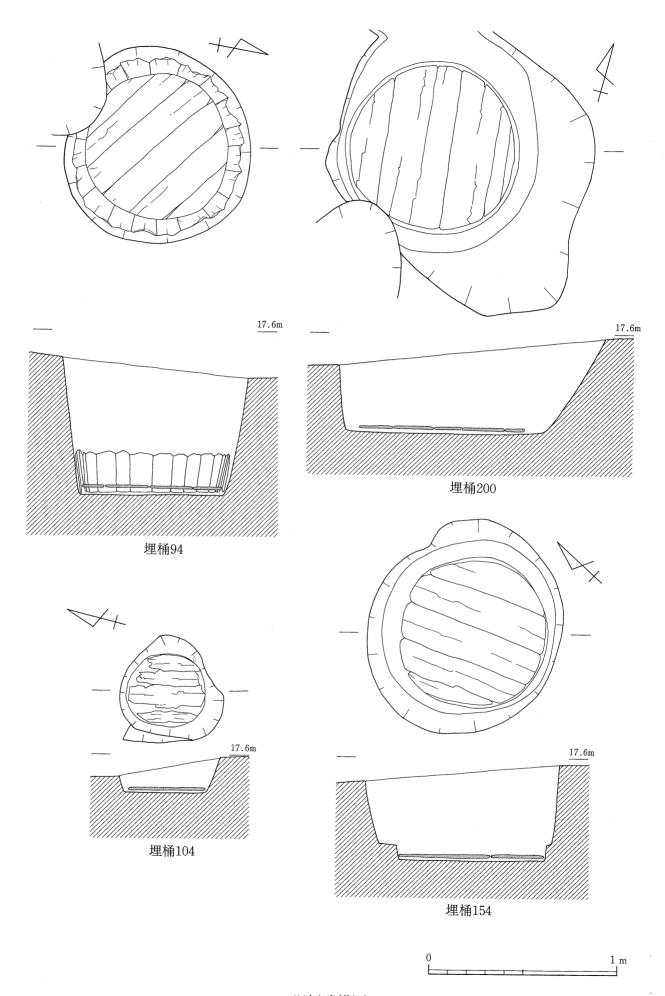
埋桶・土坑遺構図



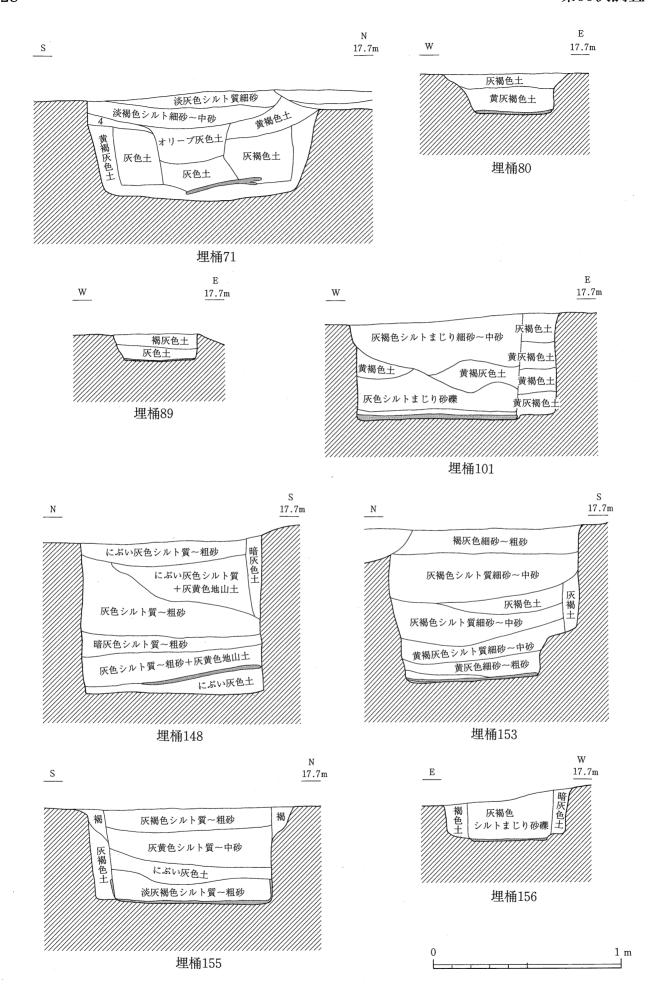
遺構配置図

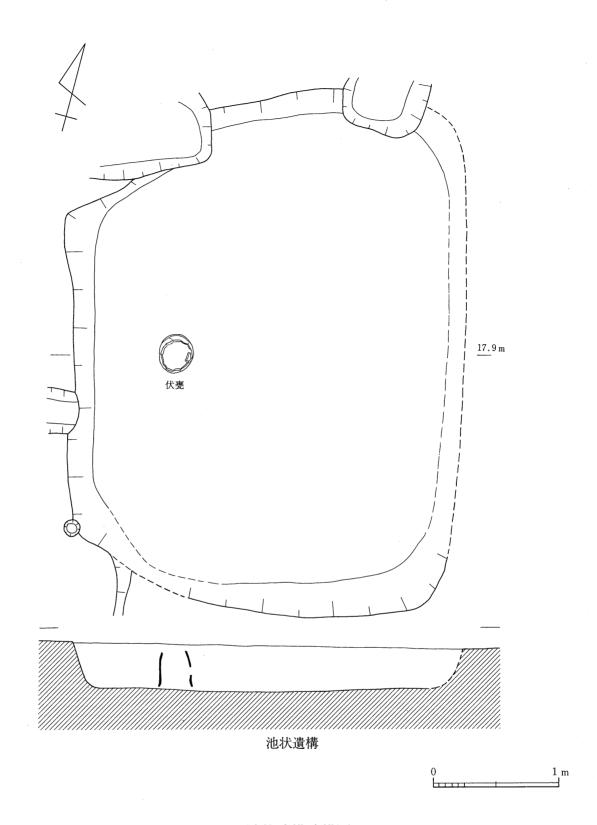


埋甕遺構図・埋桶遺構図1

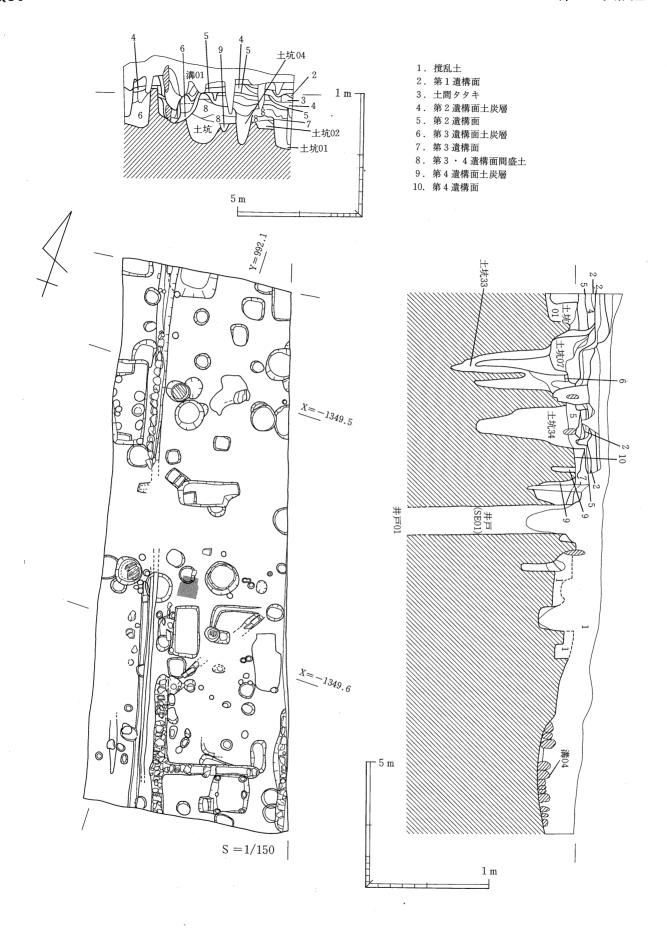


埋桶遺構図2

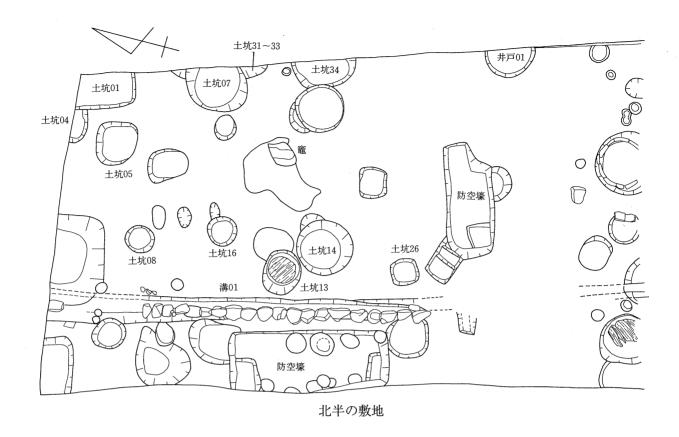


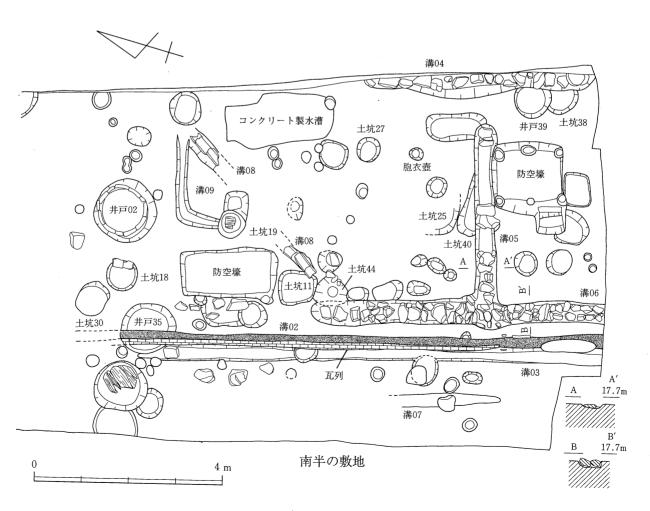


池状遺構遺構図

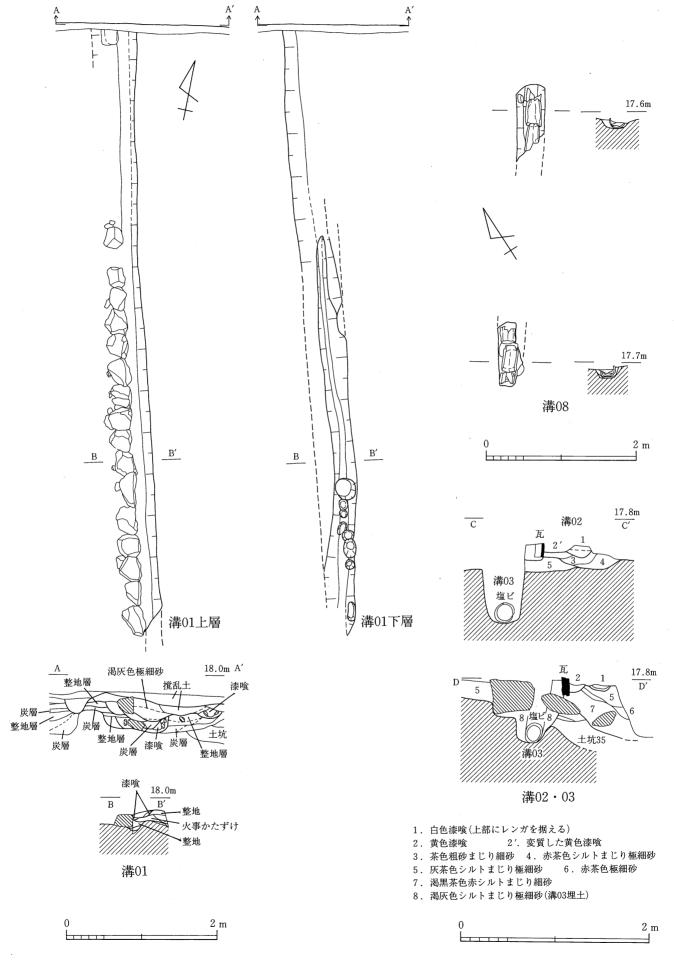


遺構配置図

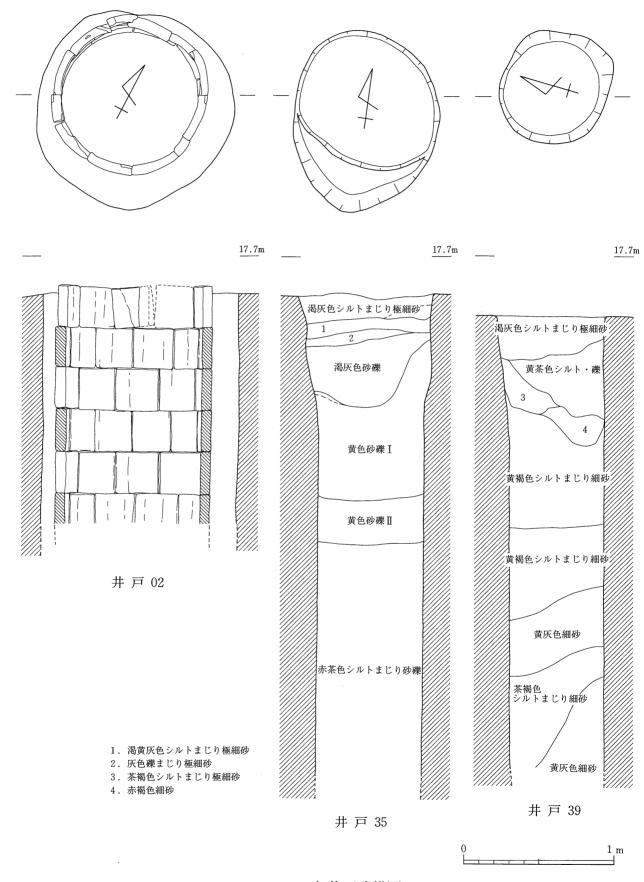




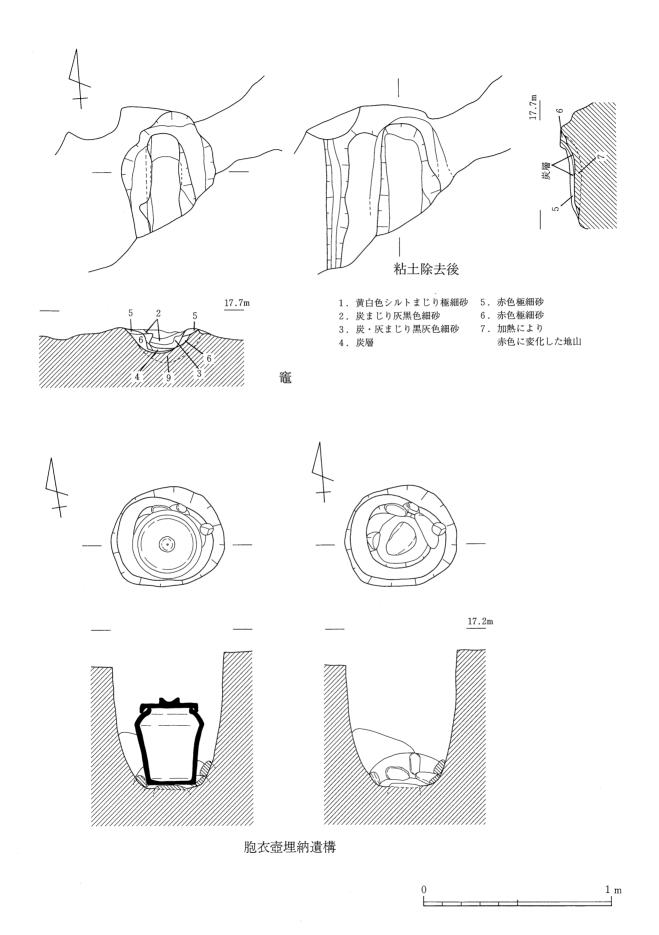
遺構配置詳細図



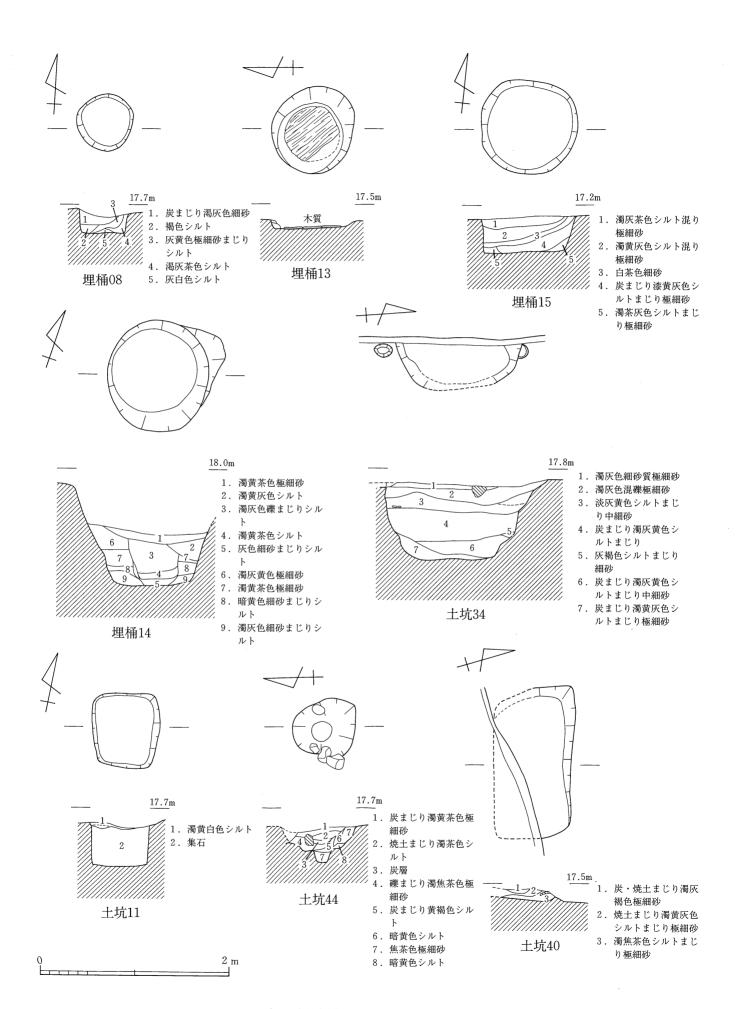
各溝遺構図



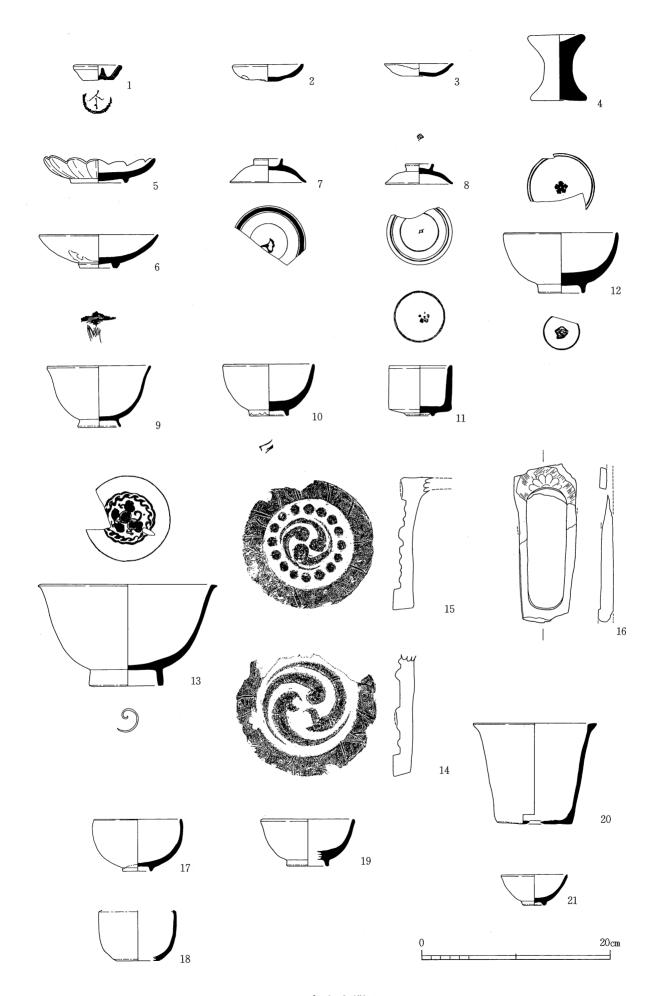
各井戸遺構図



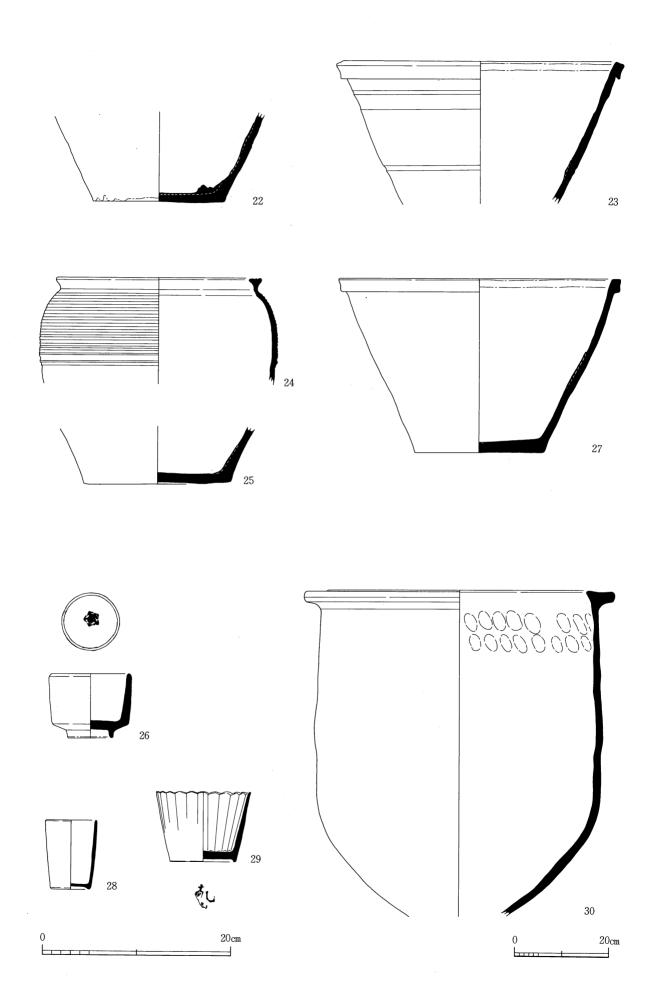
竈遺構図·胞衣壺埋納遺構図



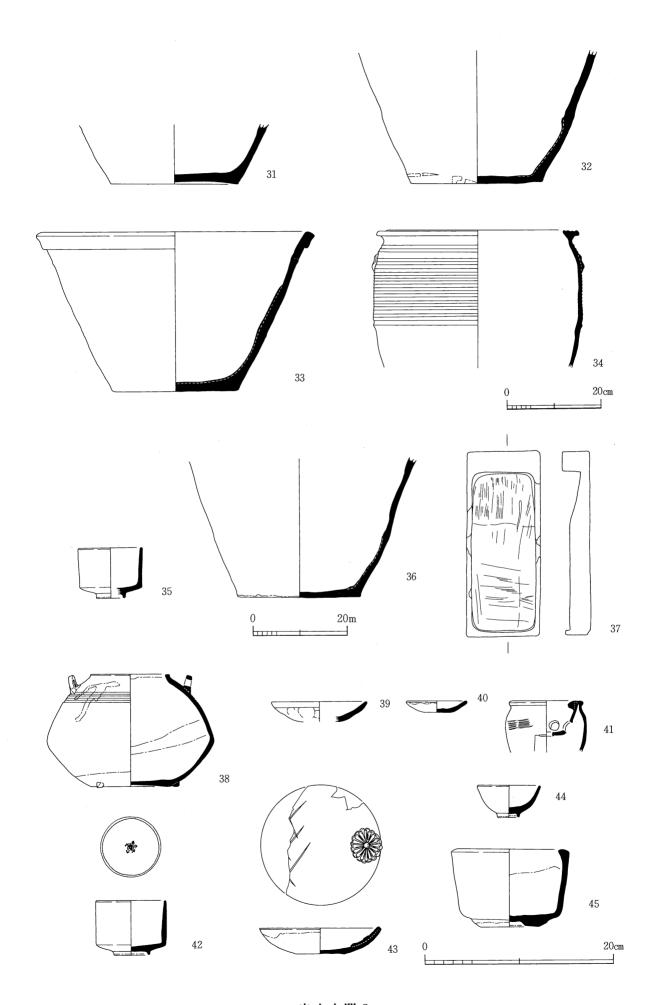
各埋桶遺構図・各土坑遺構図



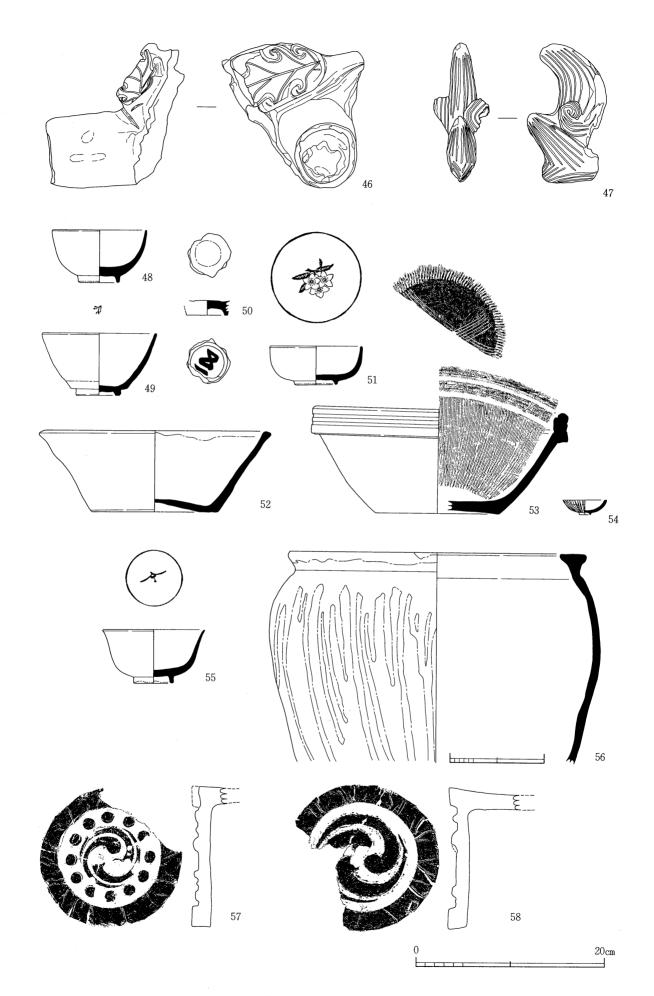
出土土器1



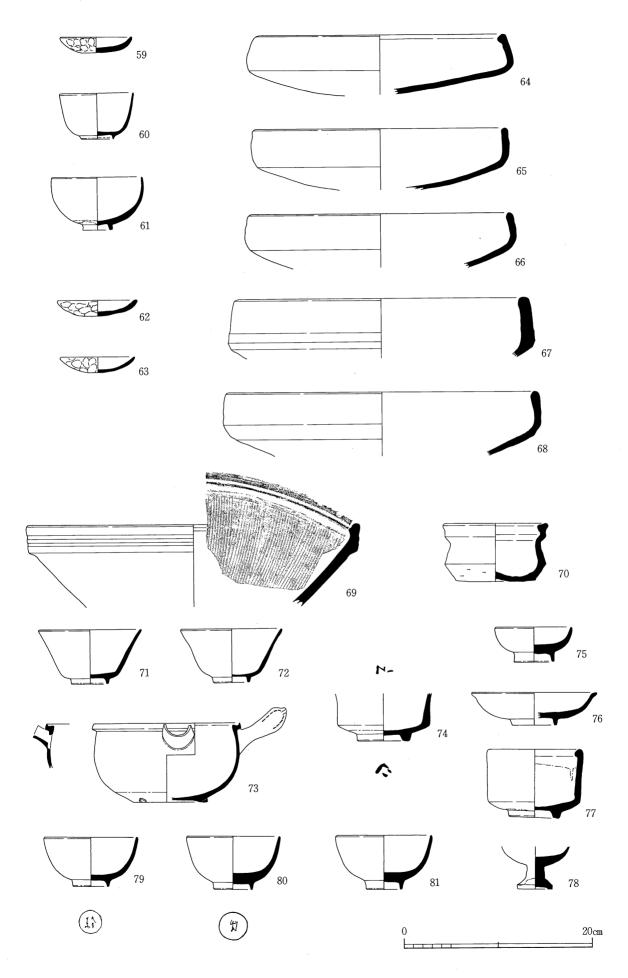
出土土器 2



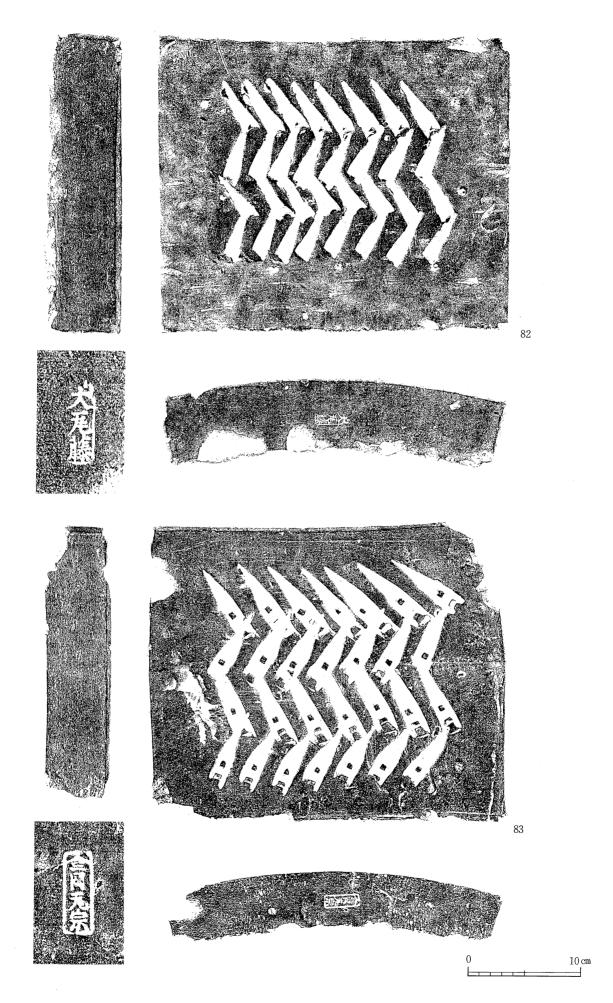
出土土器3



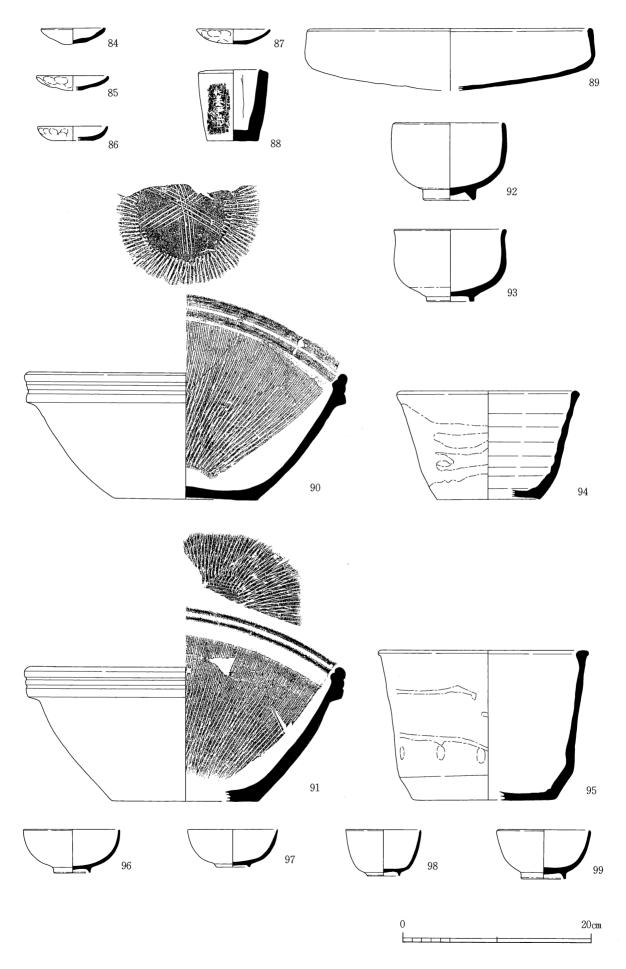
出土土器 4



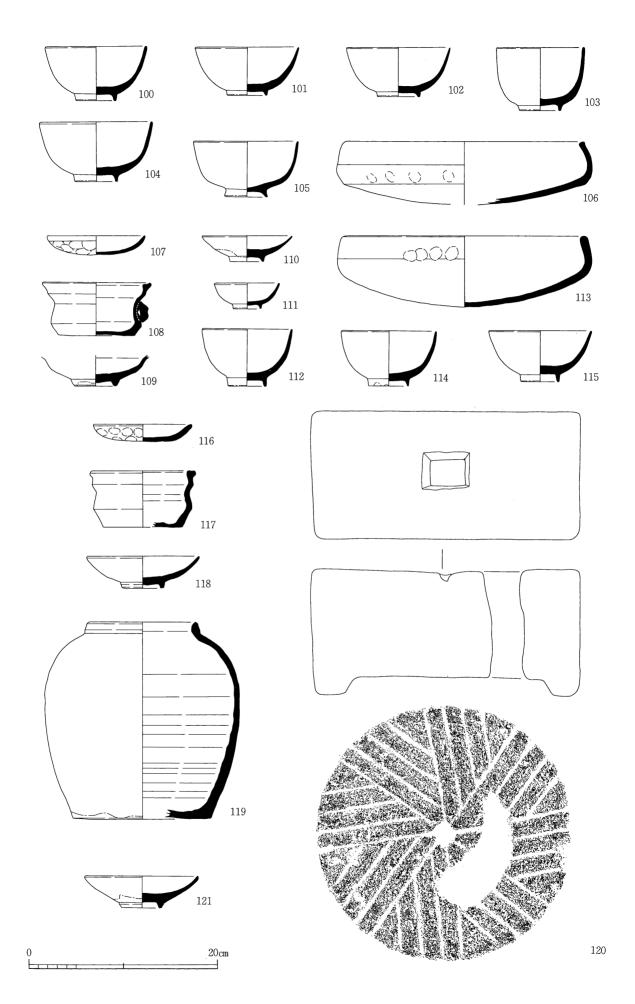
出土土器 5



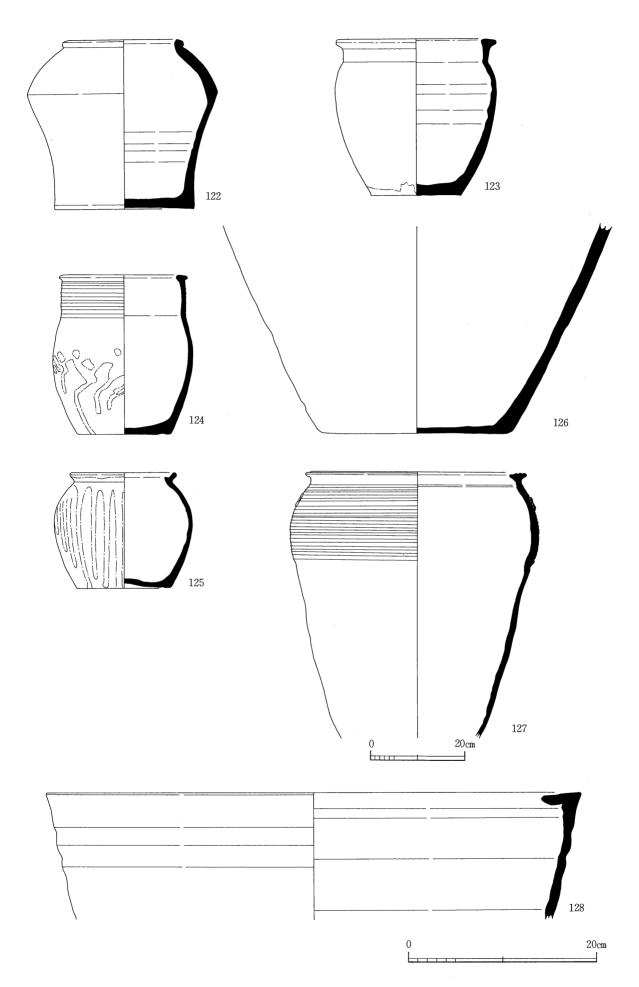
出土土器 6



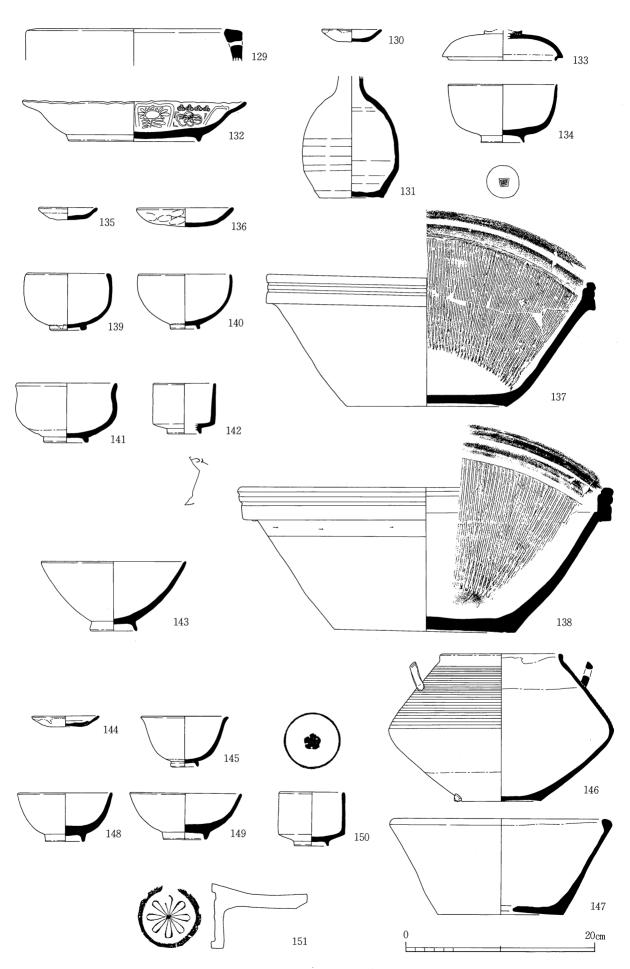
出土土器7



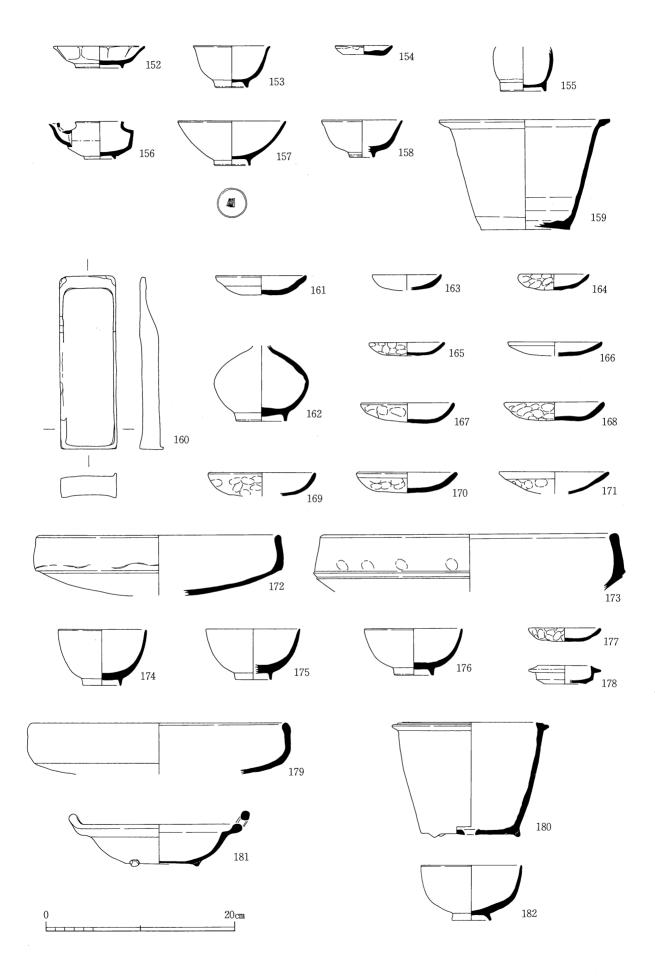
出土土器8



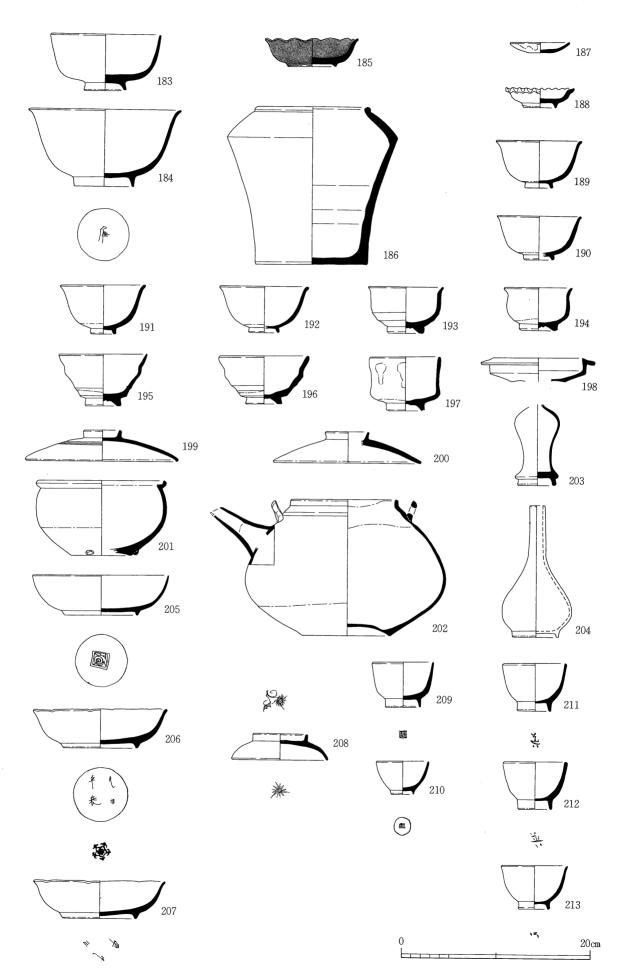
出土土器 9



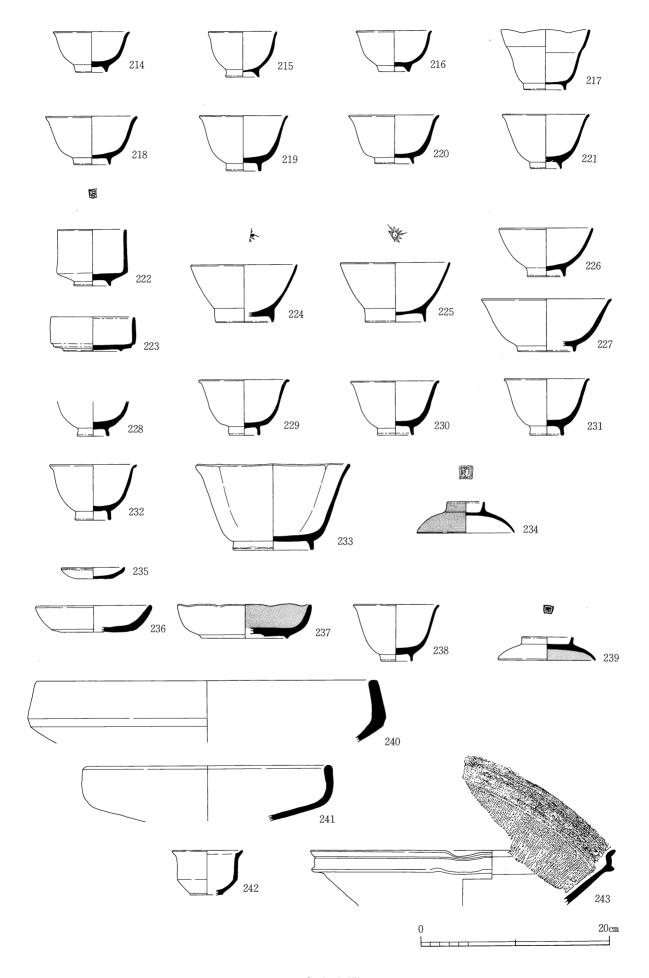
出土土器10



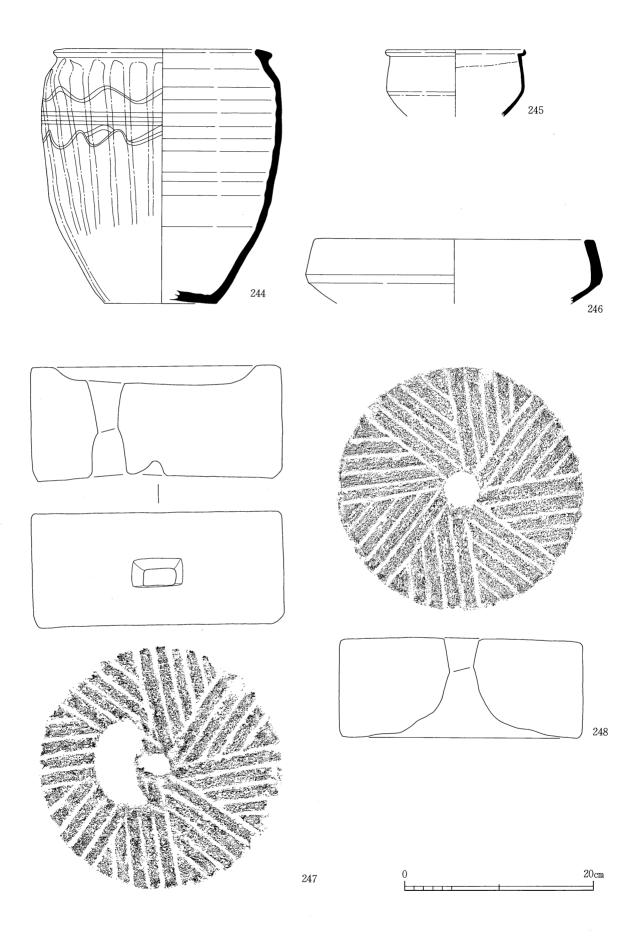
出土土器11



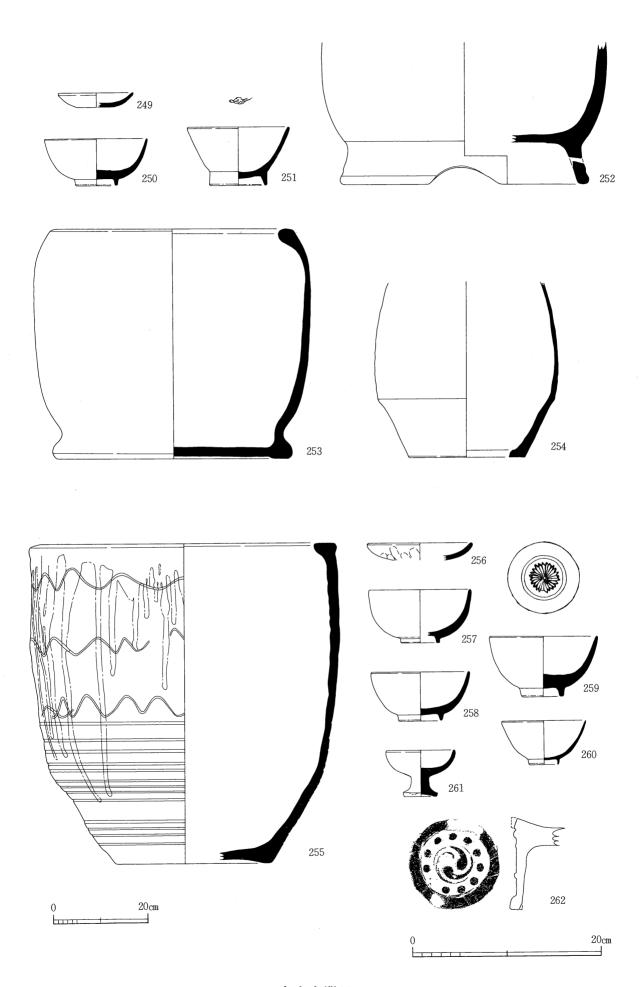
出土土器12



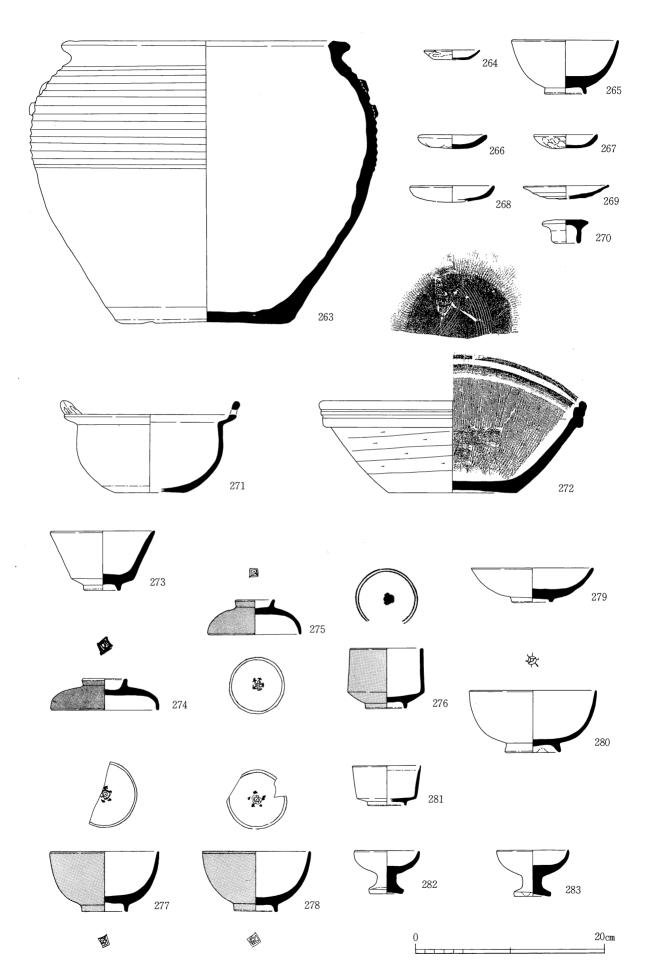
出土土器13



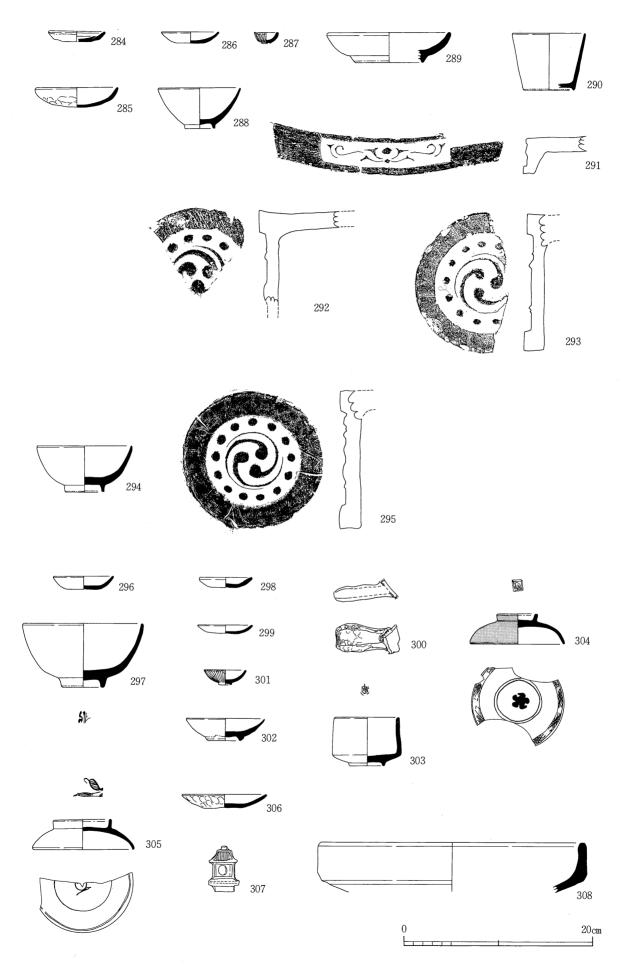
出土土器14



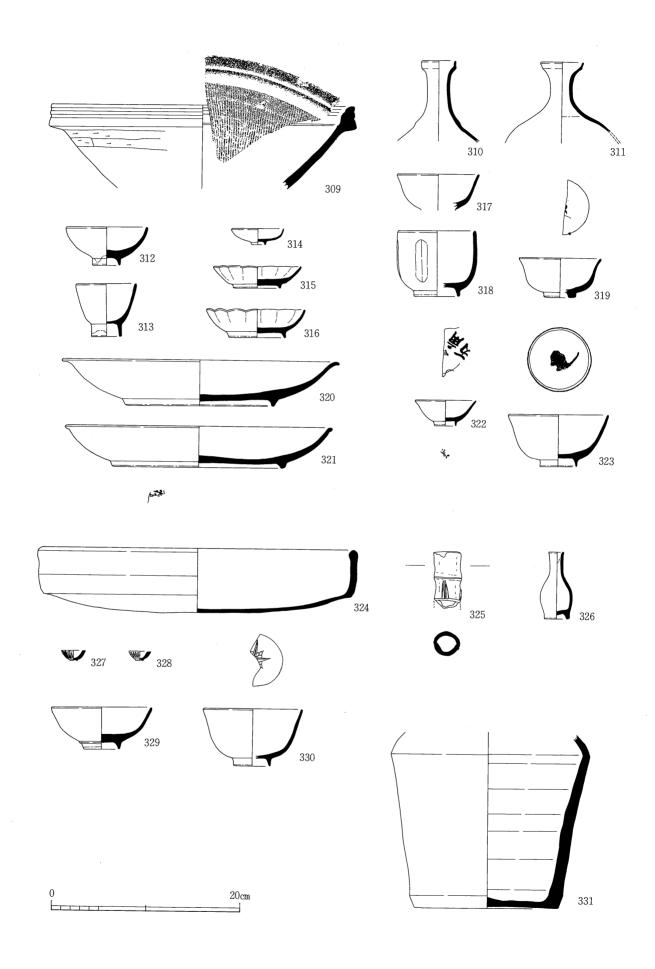
出土土器15



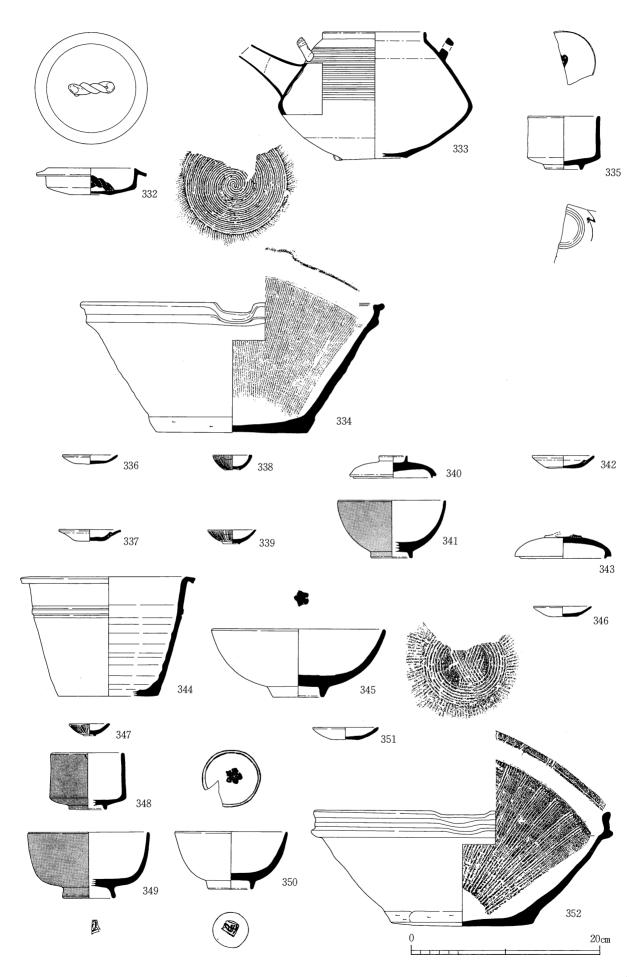
出土土器16



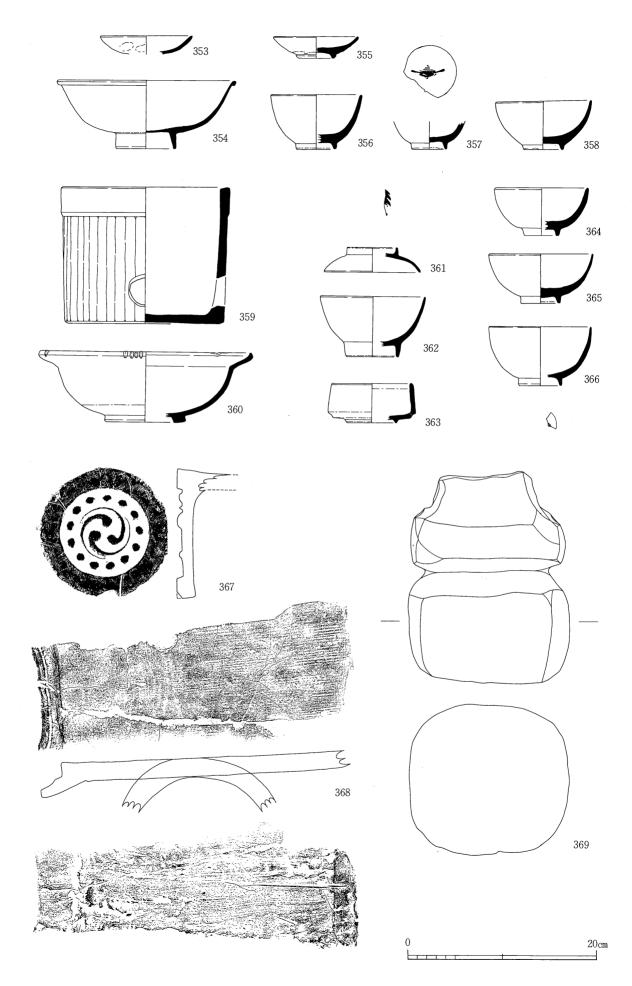
出土土器17



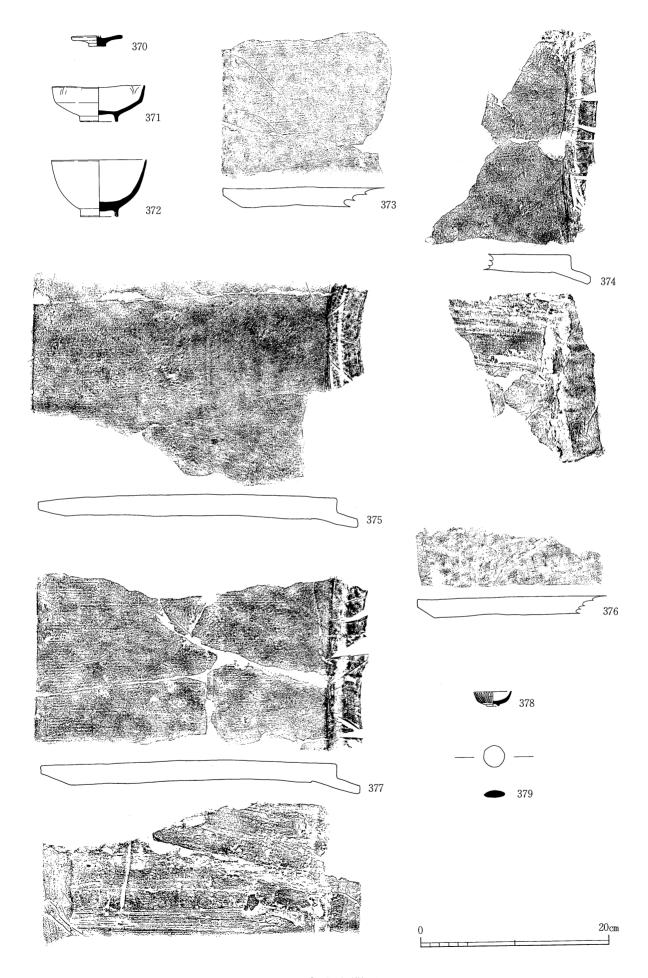
出土土器18



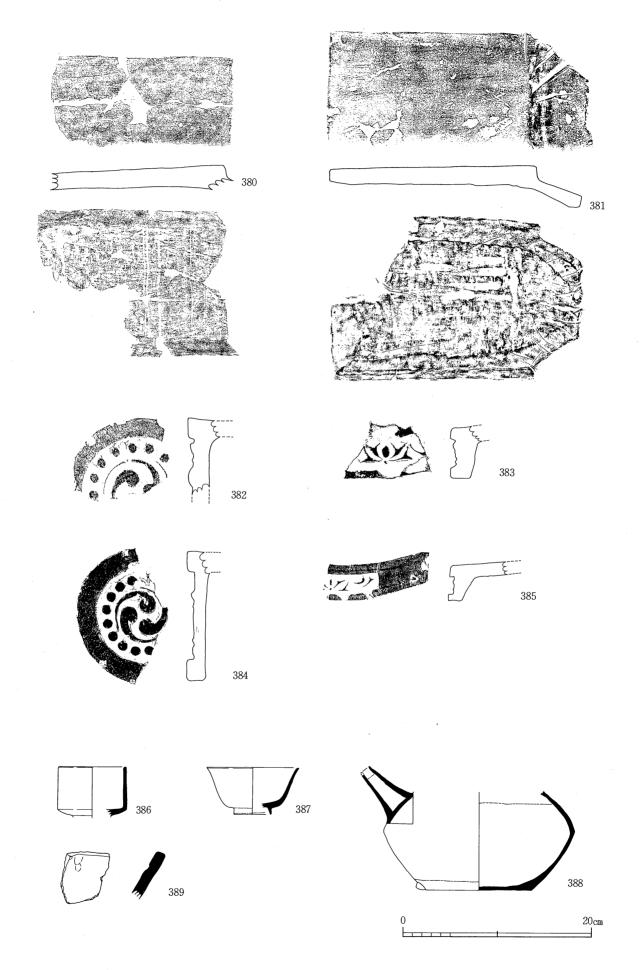
出土土器19



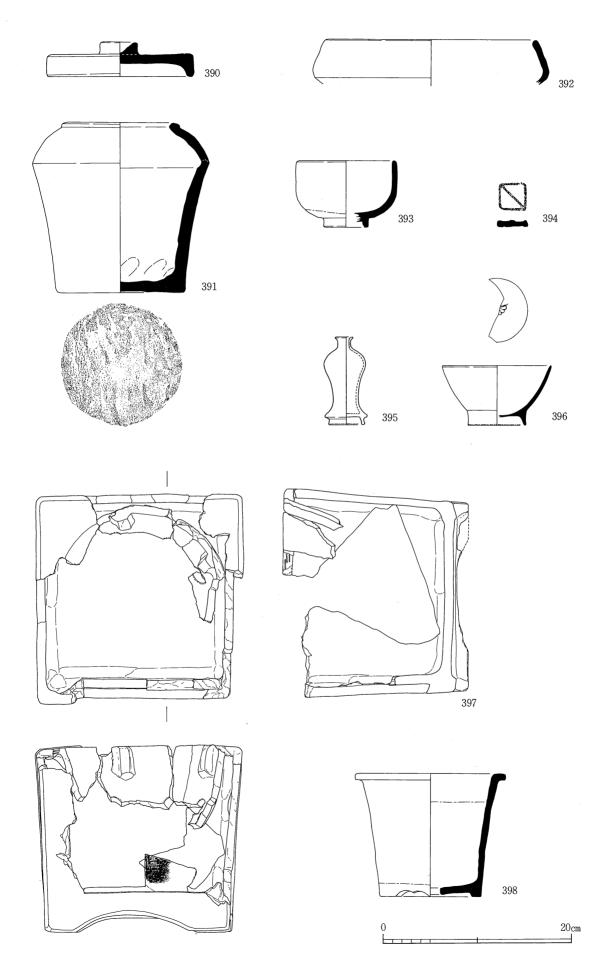
出土土器20



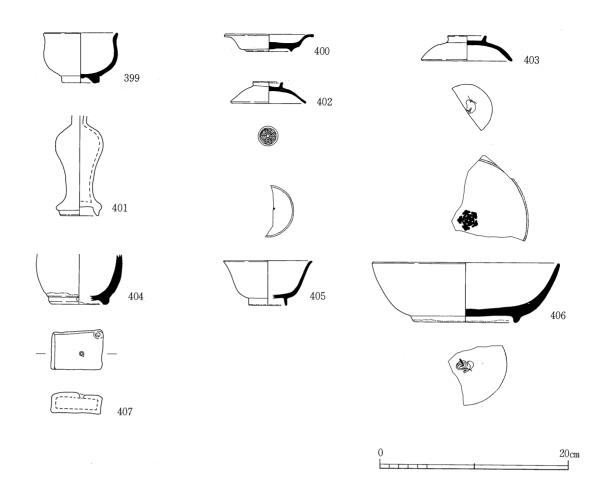
出土土器21



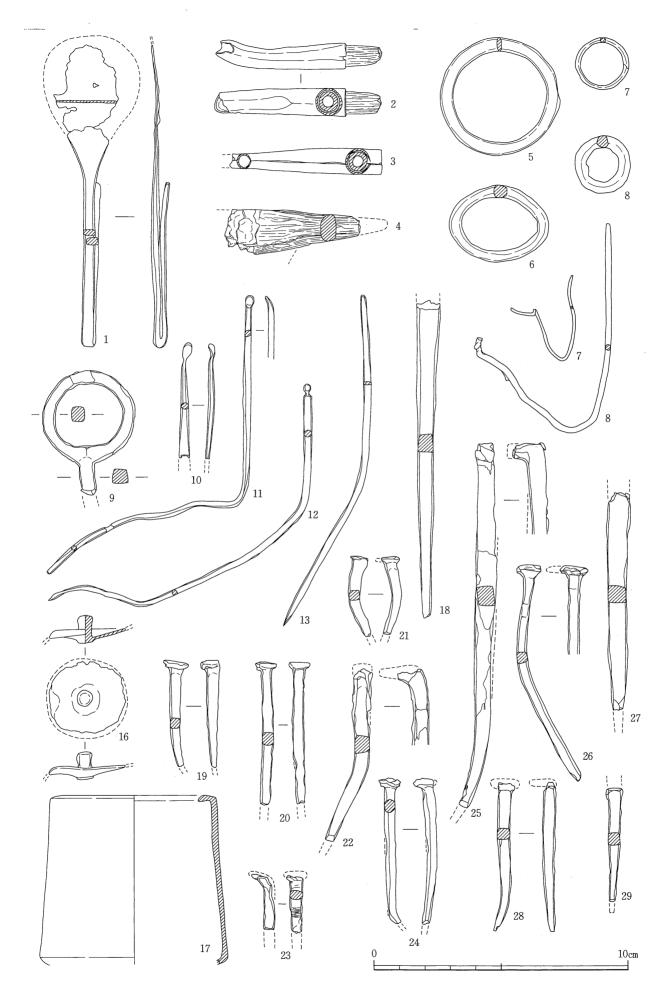
出土土器22



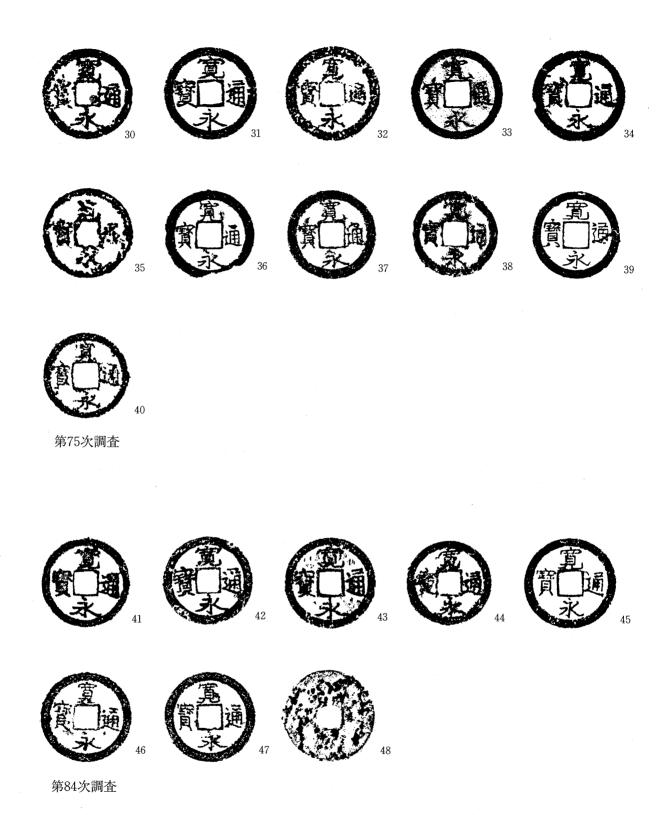
出土土器23



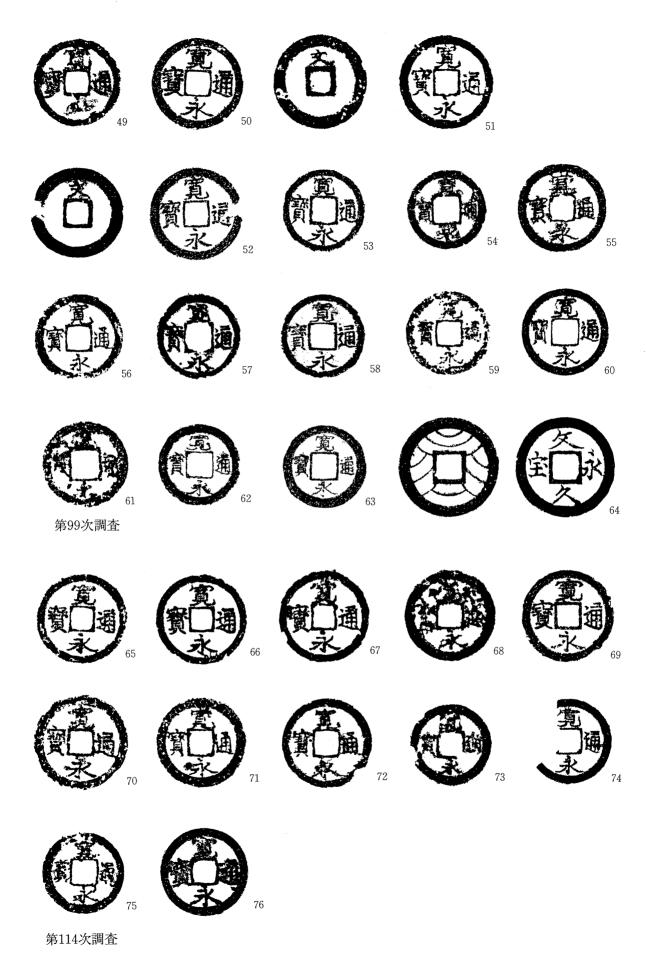
出土土器24



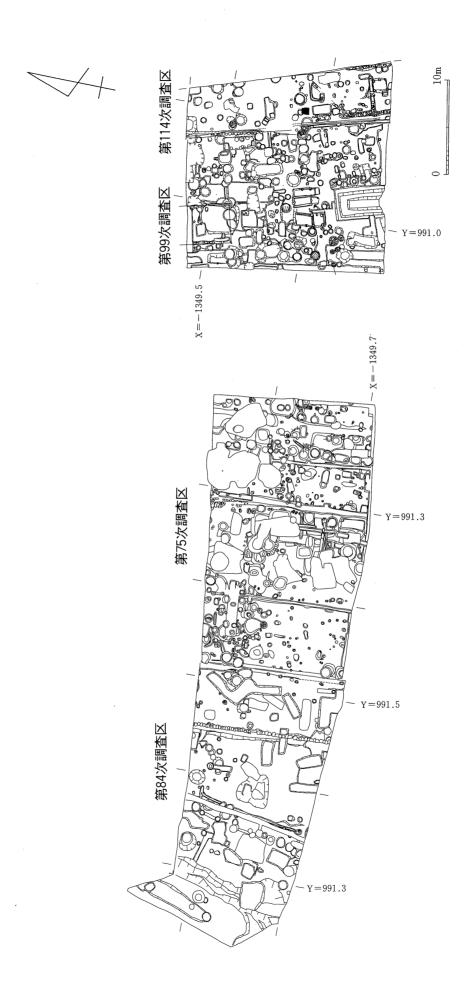
各調査次出土金属器

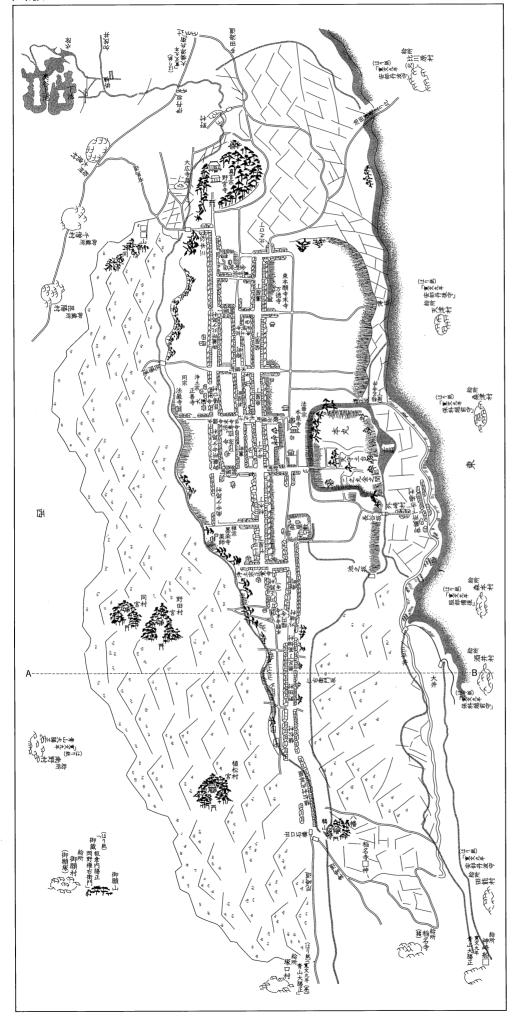


第75次・第84次調査出土銅銭

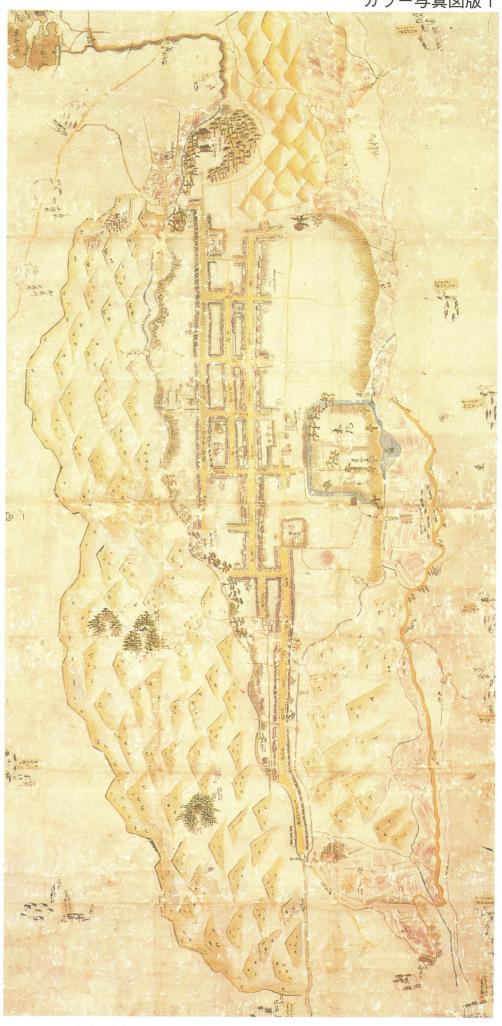


第99次・第114次調査出土銅銭





寛文9年伊丹郷町絵図解説図〔伊丹市立博物館所蔵〕

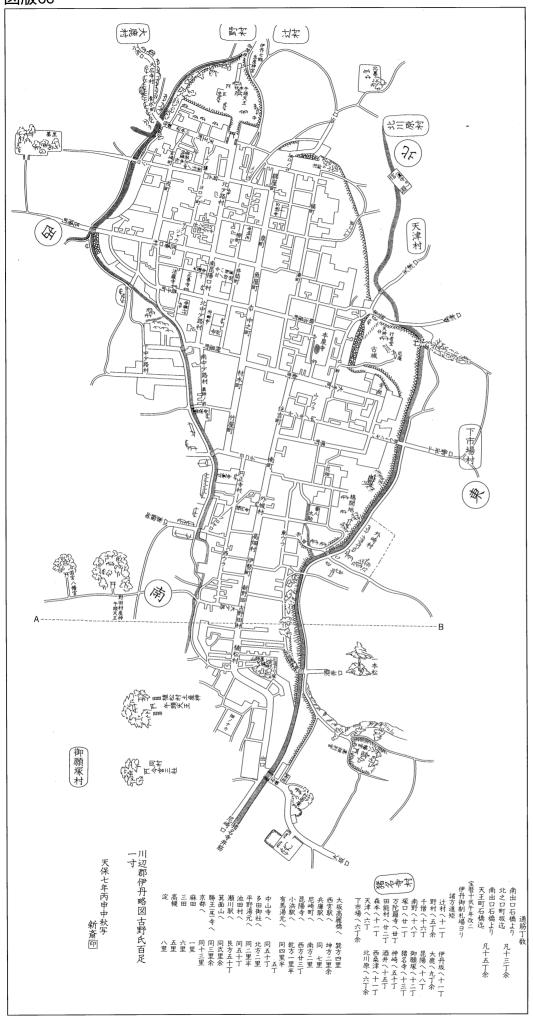


寛文9年伊丹郷町絵図〔伊丹市立博物館所蔵〕(187.1×90.1cm)

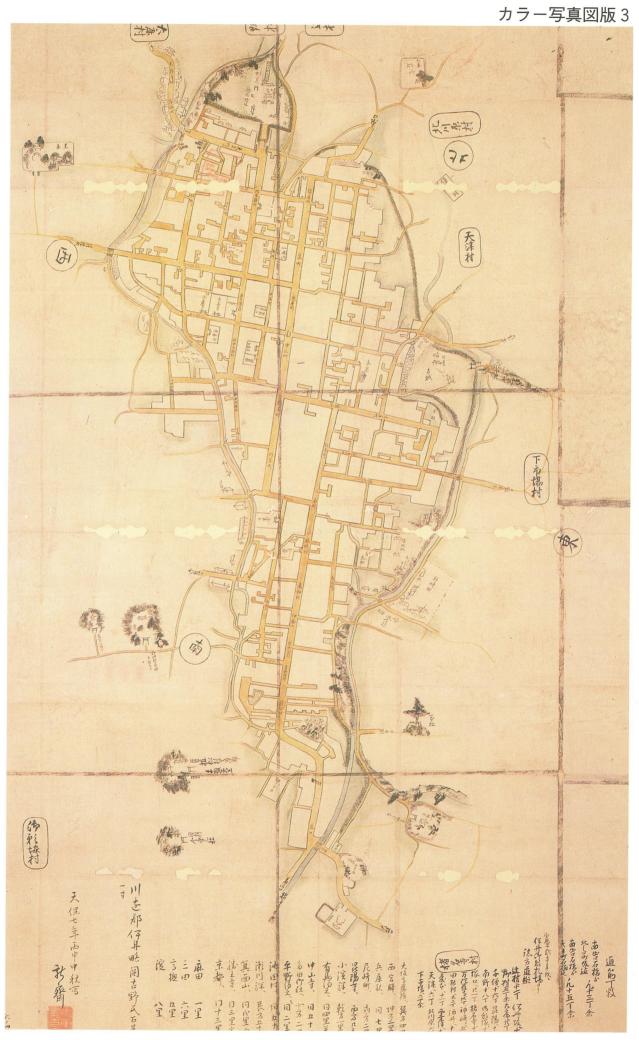




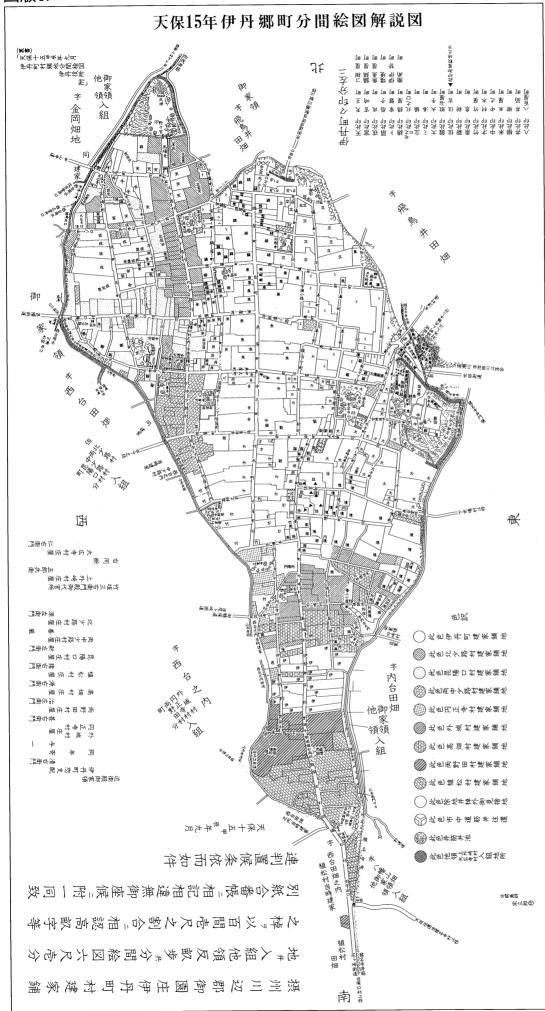
寛政8年伊丹細見図〔伊丹市立博物館所蔵〕(100.0×52.0cm)



文化改正伊丹之図解説図〔伊丹市立博物館所蔵〕

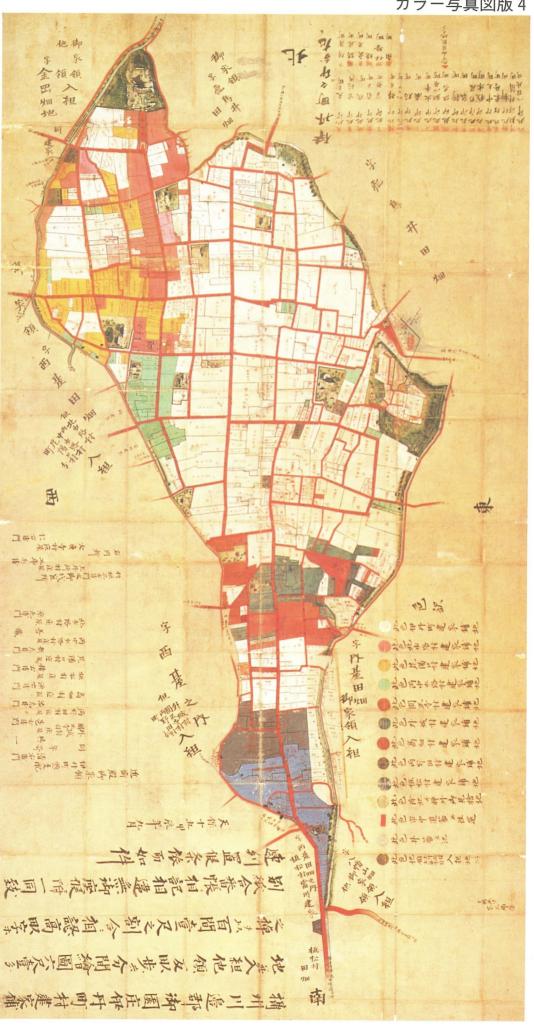


文化改正伊丹之図〔伊丹市立博物館所蔵〕(148.5×78.5cm)

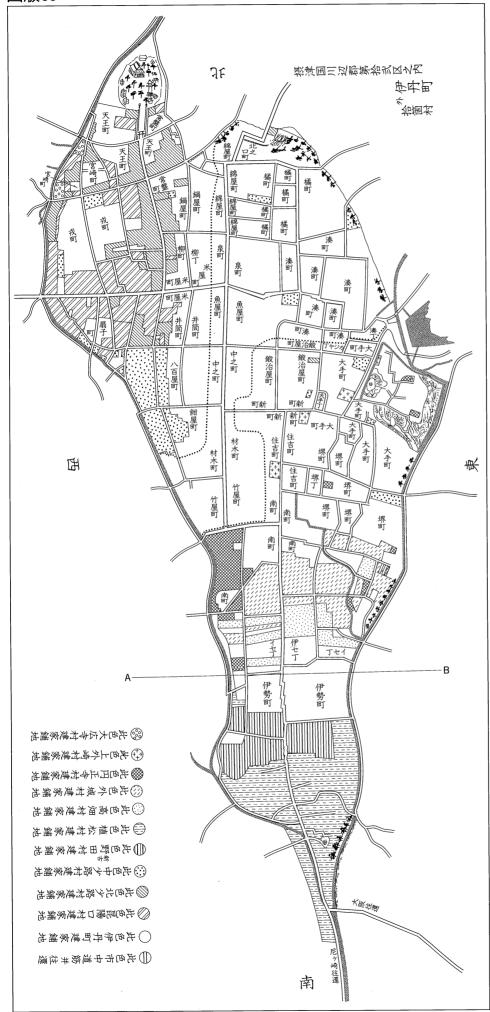


天保15年伊丹郷町分間絵図解説図〔伊丹市立博物館所蔵〕

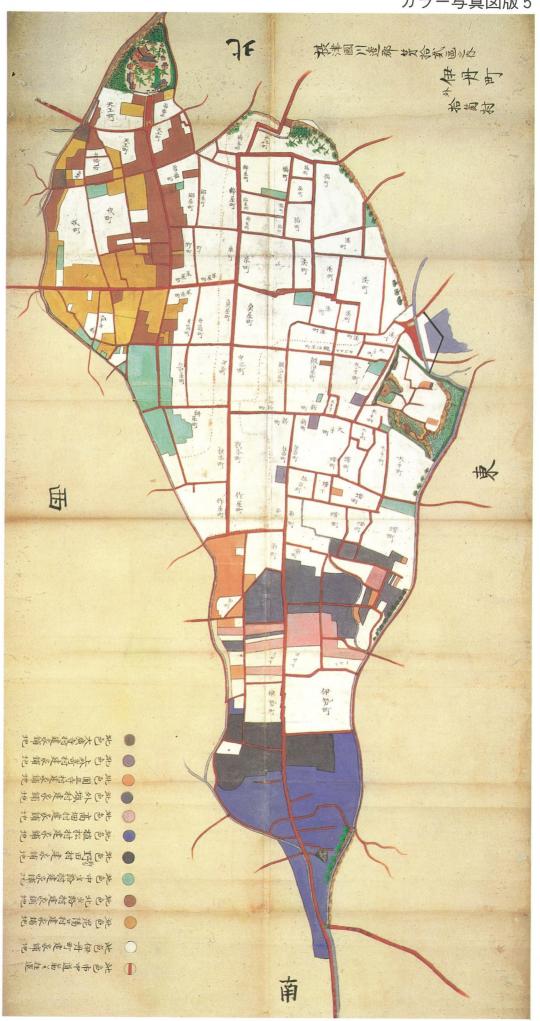
カラー写真図版 4



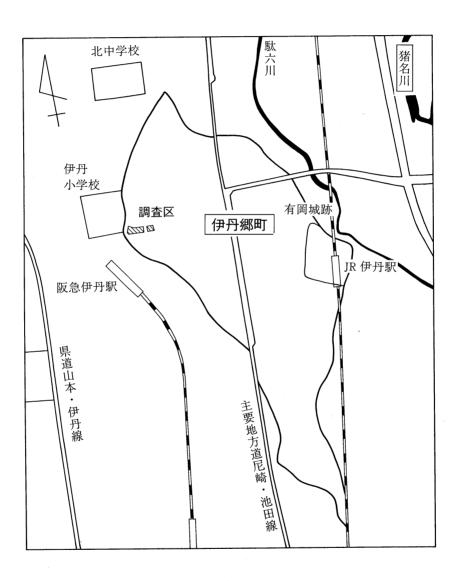
天保15年伊丹郷町分間絵図〔武田八郎氏所蔵〕(325.8×167.0cm)

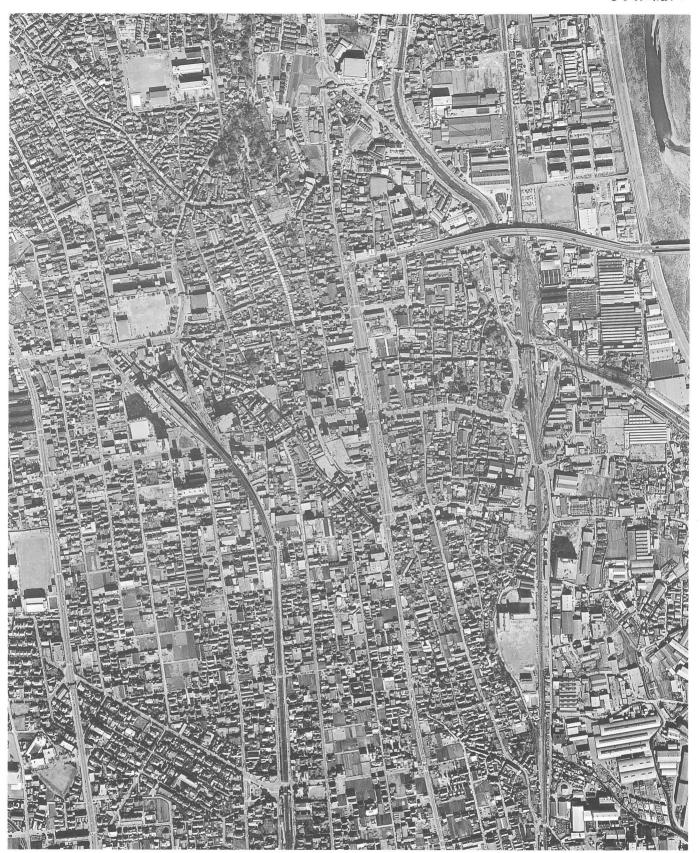


明治6年伊丹郷町地引絵図解説図〔伊丹市立博物館所蔵〕



明治6年伊丹郷町地引絵図〔伊丹市立博物館所蔵〕(127.2×65.3cm)





伊丹郷町遺跡周辺空中写真

写真図版 2



昭和62年頃の昆陽口通り(東から)



75次調査区と調査域全景(西から)



調査区の現状〔平成9年〕(西から)

調査前遠景 (A1·A2·B1·B2)



調査後遠景 (A1·A2·B1·B2)





調査後遠景 (A3·A4·B3·B4)





調査後遠景 (A5·A6·B5·B6)





1:A1トレンチ (東から) 2:A2トレンチ (西から)

3:A3トレンチ (東から) 4:A4トレンチ (西から)

作業状況

確認調査

写真図版 4









左1:A5トレンチ (東から)

右1:B3トレンチ (東から)

右2: B5トレンチ (東から)

左2:A6トレンチ (西から)

右3:B6トレンチ

左3:B1トレンチ (東から)

(西から)

左4:B2トレンチ右 右4:出土遺物 I (東から) 右5:出土遺物Ⅱ













調査区全景



堀近景



堀近景 (東から)

写真図版6



堀内北壁土層断面(南東から)



堀内南壁土層断面(北から)

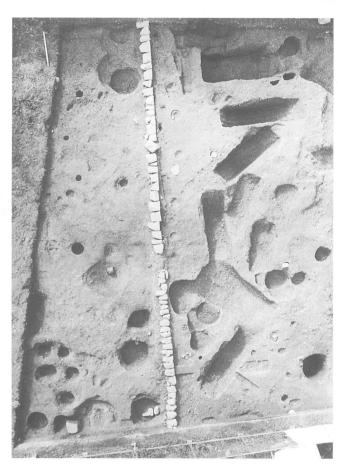


井戸4 (西から)

写真図版7



溝3石列除去(南から)



溝1・2東側石列



写真図版8



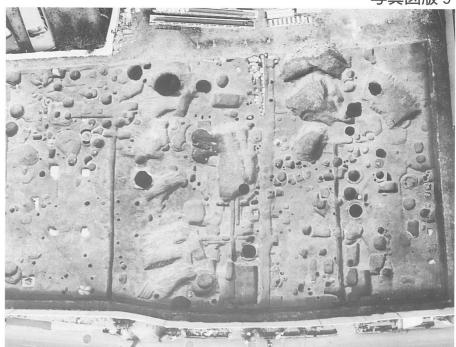
調査区西側埋甕群(北から)



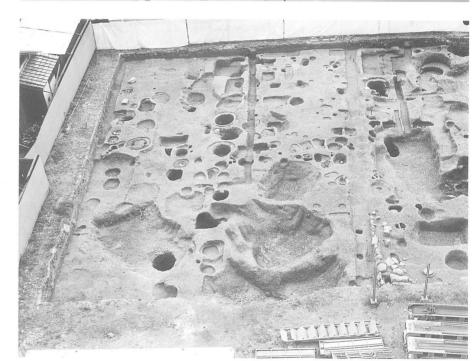
埋桶4 (西から)



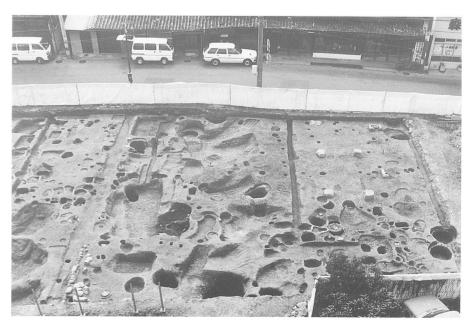
土坑47 (南から)



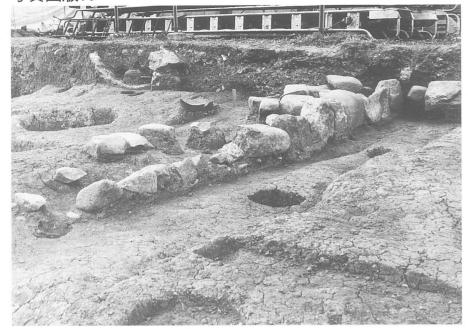
調査区全景(南から)



調査区東半部 (北から)



写真図版10



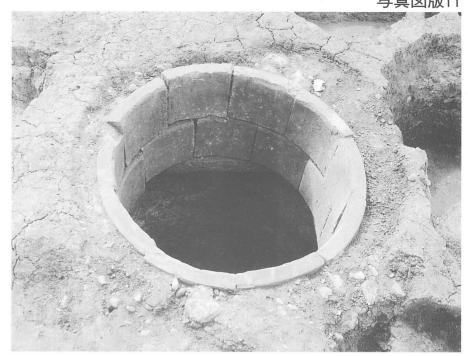
溝3石列(南東から)



建物址1 (北から)



建物址2 (北から)



井戸1瓦積み井側 検出状況(東から)



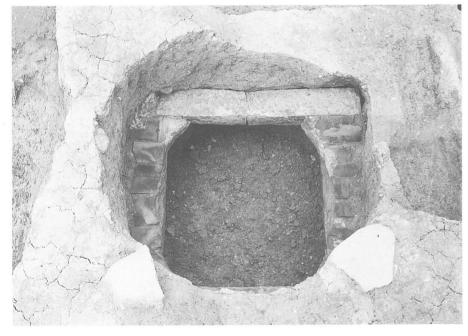
同上井側下部石材 検出状況(東から)



同上石材の 組合わせ状況(東から)



井戸3瓦積み井側検出状況(西から)



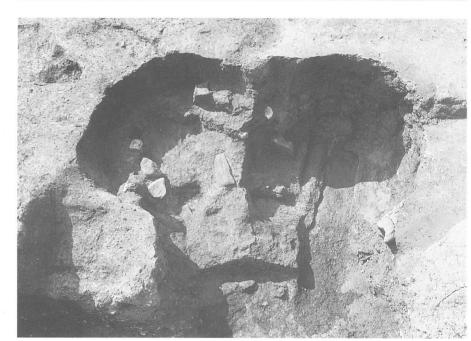
同上井側下部石材・瓦積み状況(東から)



同上石材据付けのための掘込み(東から)



竈1 (東から)



同上下面 (東から)

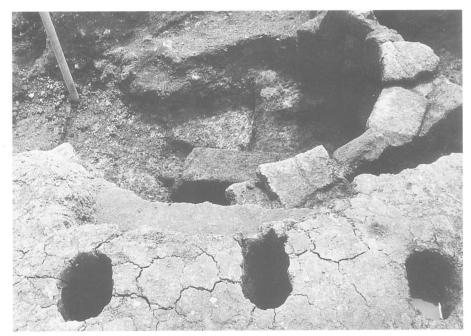


竈1-1埋土土層断面(北から)

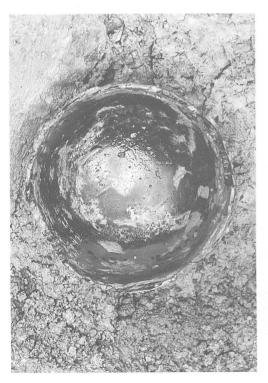
写真図版14



同上ブロック積み状況 (東から)



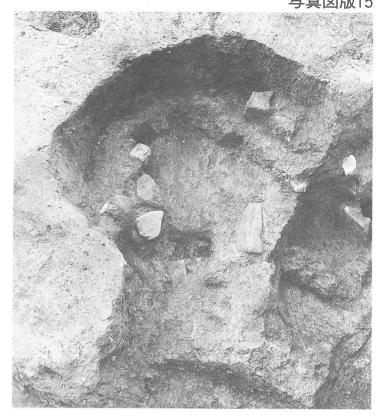
竈1-1ブロック積み状況と上屋に伴う柱穴(北から)





左:竈1-1埋土内出土 漆器椀

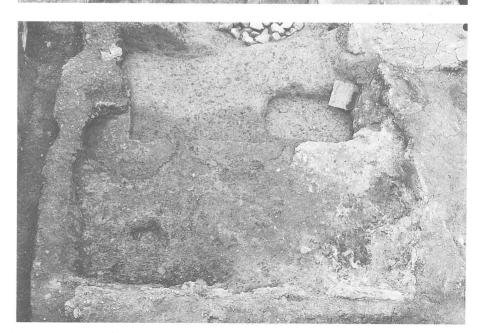
右:竈1-2煙道部



竈1-2 (東から)

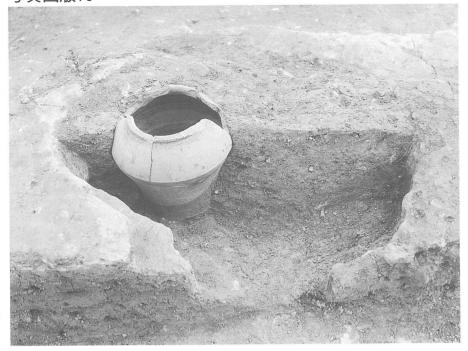


竈 2 (東から)



竈 3 (東から)

写真図版16



胞衣壺半裁状況 (北から)



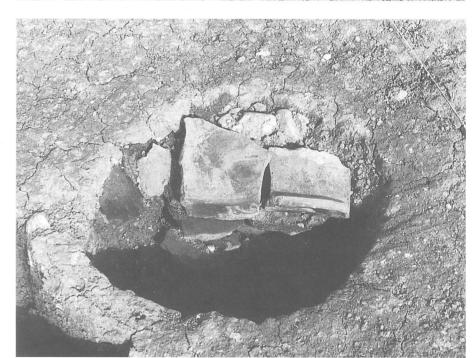
胞衣壺 2・3・4 半裁状況 (西から)



埋甕9・10・11 (東から)



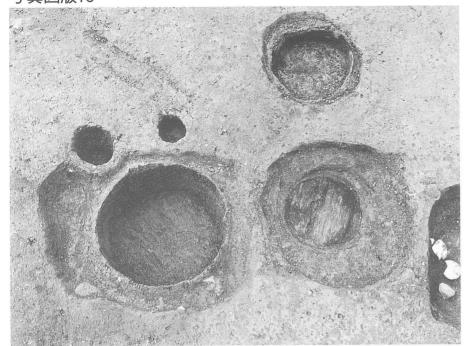
水琴窟12 (東南から)



水琴窟13 (西から)



写真図版18



埋桶1・2・3 (東から)

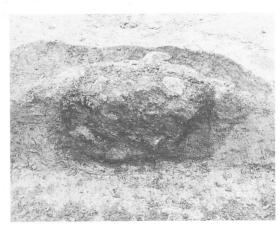






右:埋桶2検出状況 (東から)



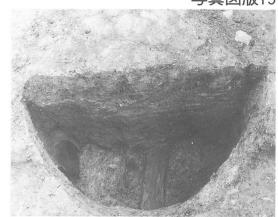


左:埋桶4半裁状況 (南から)

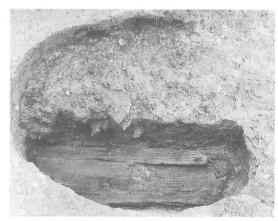
右:埋桶7半裁状況

(東から)

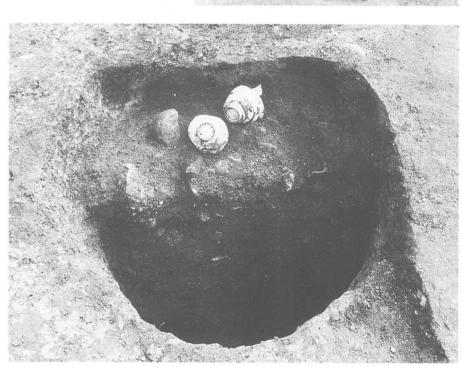




左:埋桶 8 (西から) 右:埋桶 9 半裁状況 (北から)



埋桶10半裁状況 (東から)

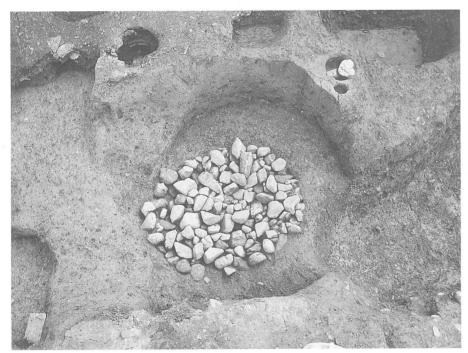


井戸13遺物出土状況(北から)

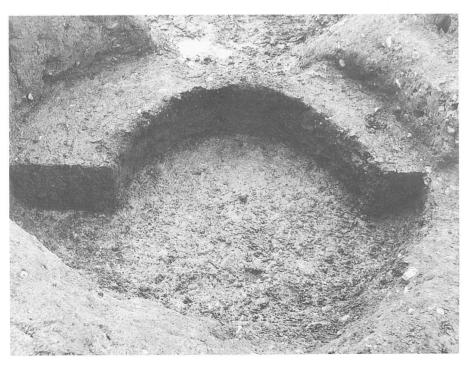
写真図版20



土坑8漆喰検出状況(北から)



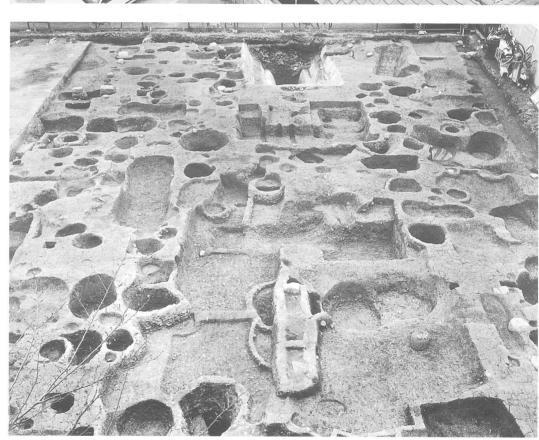
土坑101 (東から)



同上断割り状況(東から)



調査区全景 (北西から)



調査区近景(北から)

写真図版22



調査区中央部(東から)



建物址1礎石(西から)



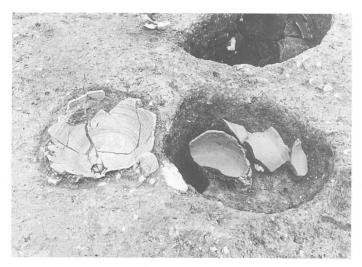






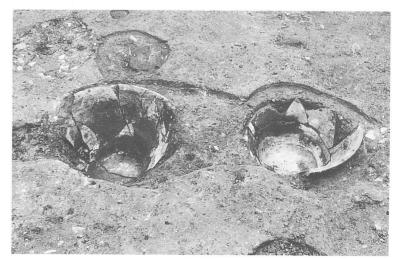
左:埋甕1 断割り状況

右:埋甕3

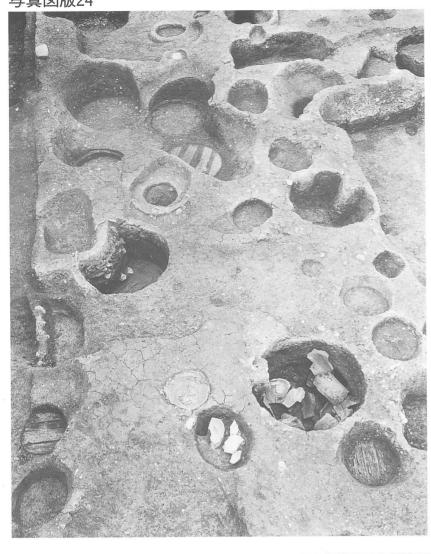




左:埋甕5·6 右:池状遺構内 伏甕



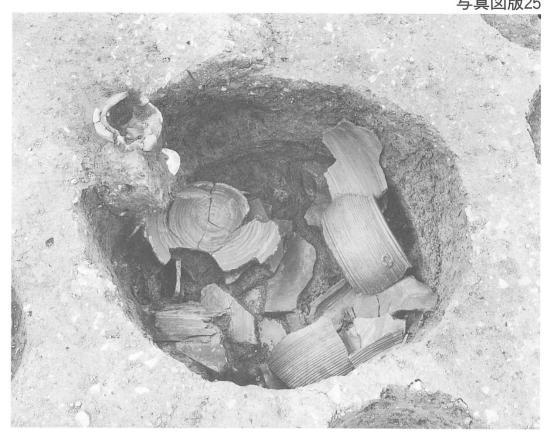
写真図版24



調査区南西部埋桶群(南から)



埋桶66・100・101 (北から)



埋桶82内土器出土状況



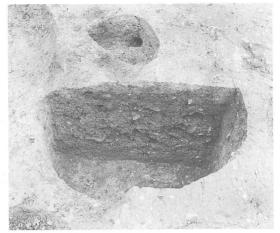
埋桶62~64



第99次調査

写真図版26







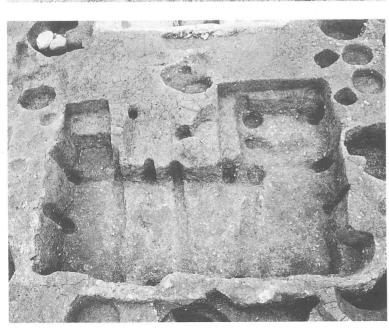




左:埋桶100 右:埋桶101



埋桶103・106





第1面検出状況(南から)



第2面検出状況 (北から)

写真図版28



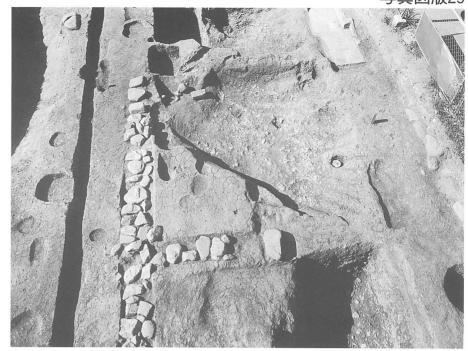
第2面の遺構(南半部)



第2面の遺構(中央部)



第2面の遺構(北半部)



建物基礎および胞衣壺検出状況 (南から)



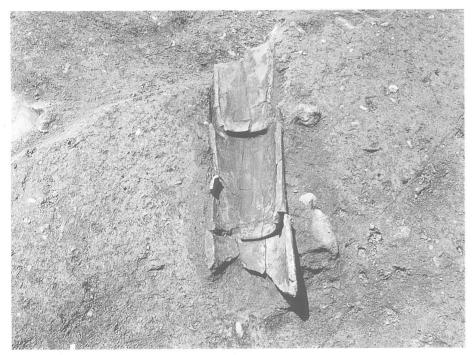
胞衣壺検出状況



写真図版30



溝08検出状況 (西から)



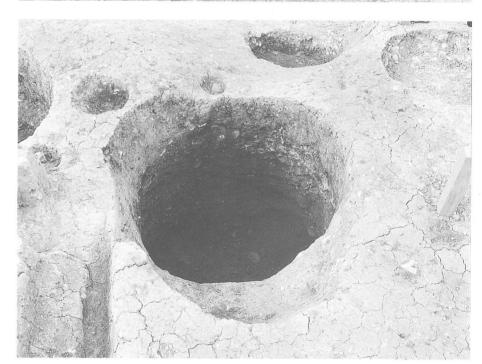
同上細部 (東側)



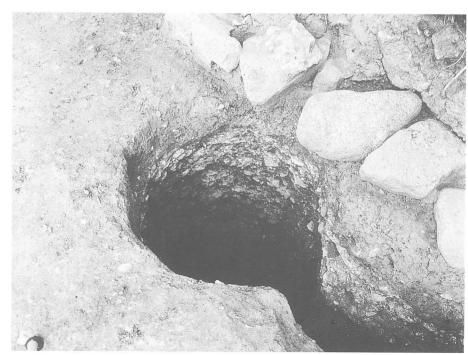
同上細部 (西側)



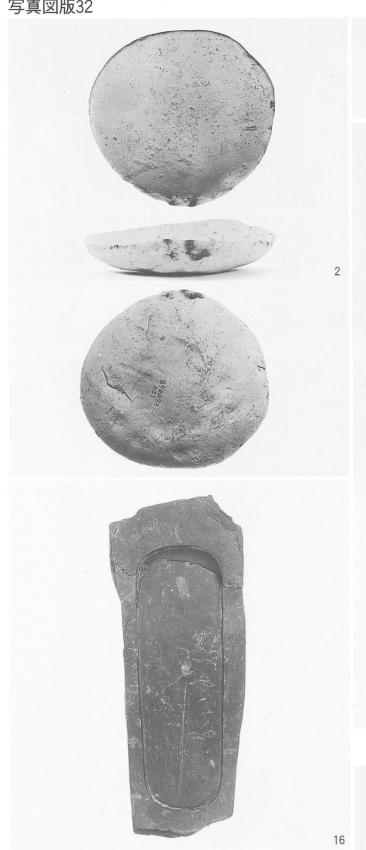
井戸02 (瓦井戸)



井戸35 (素掘り井戸)



井戸39 (素掘り井戸)



















37





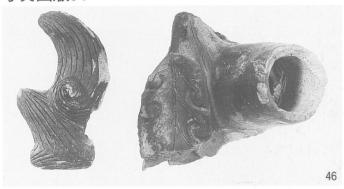






第84次調査

写真図版34



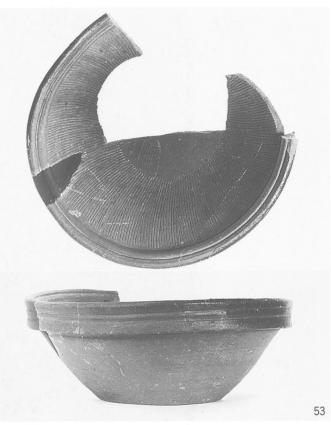










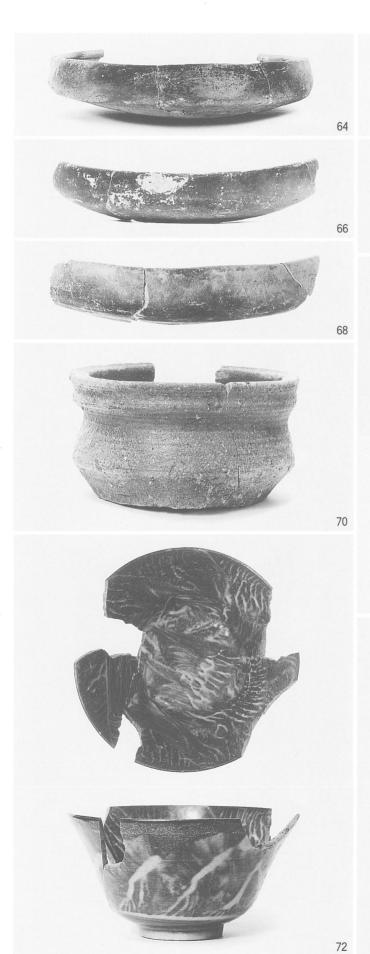


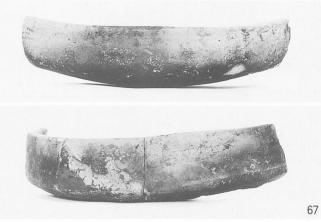






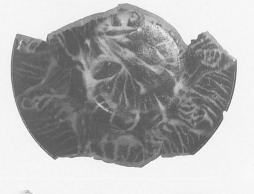




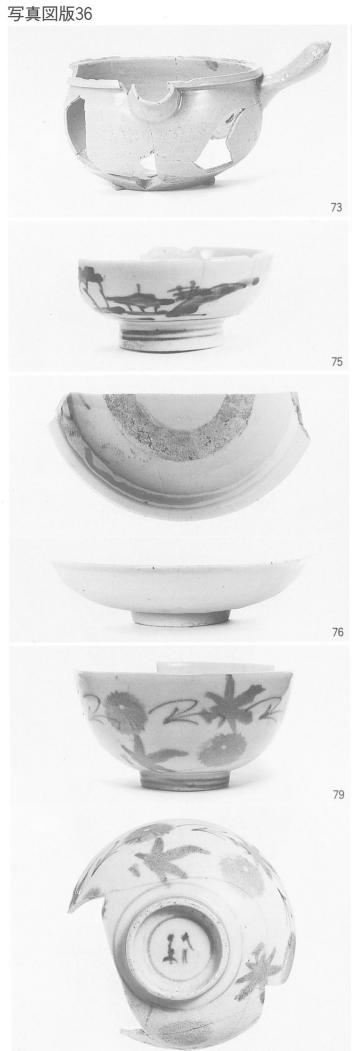


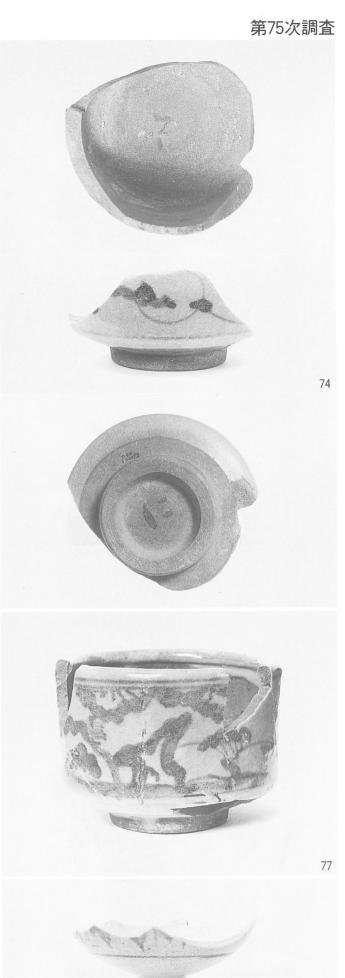


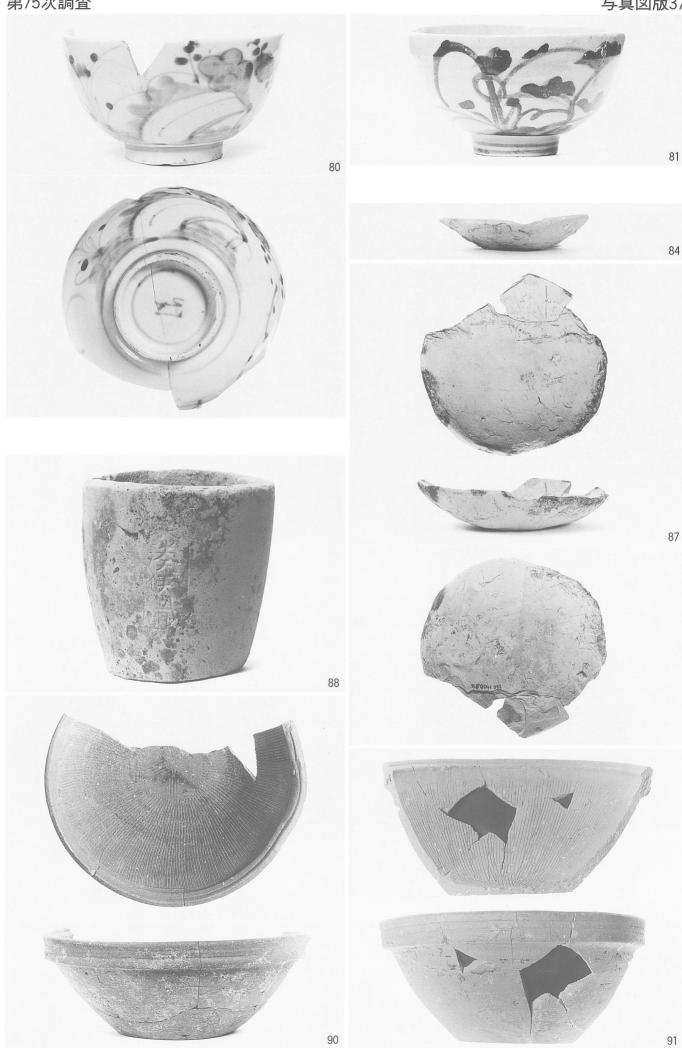


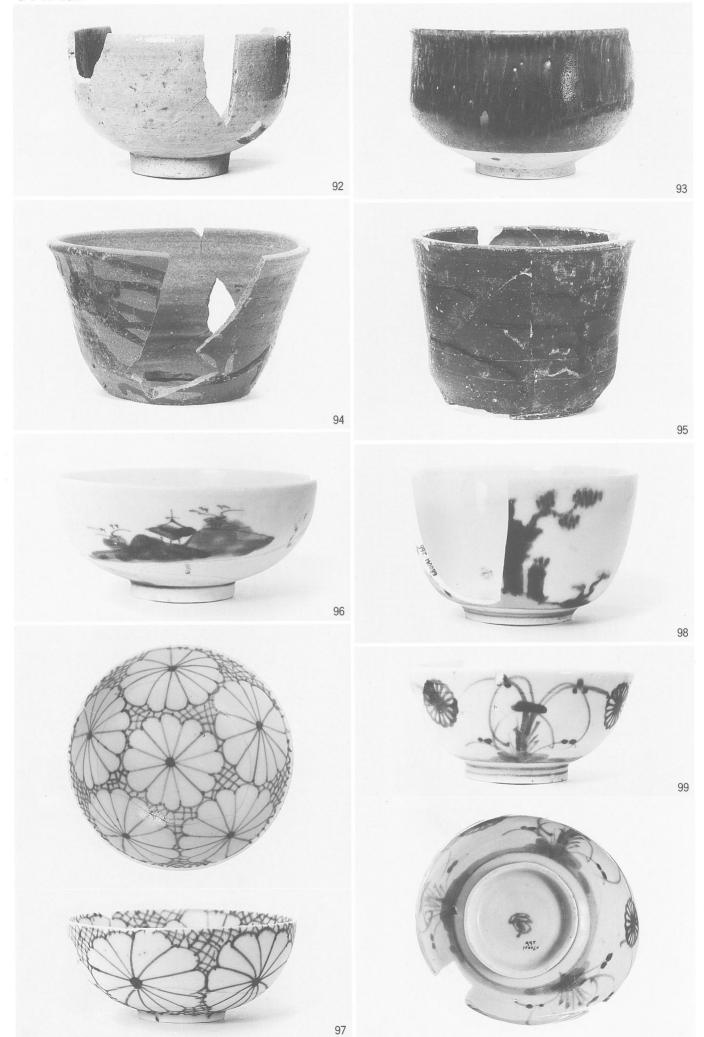








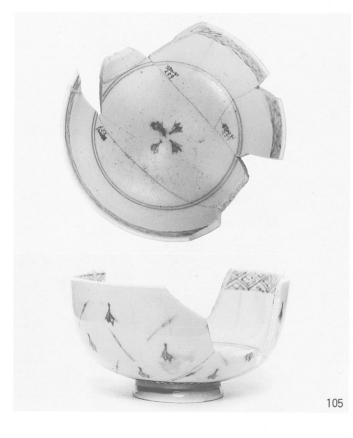


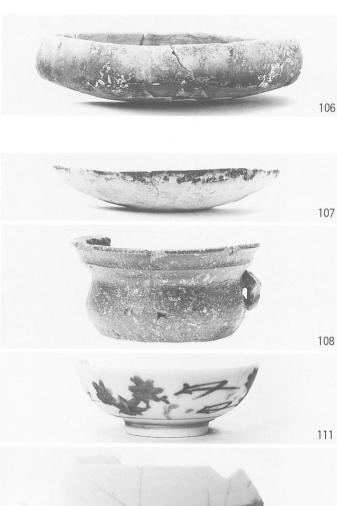


104



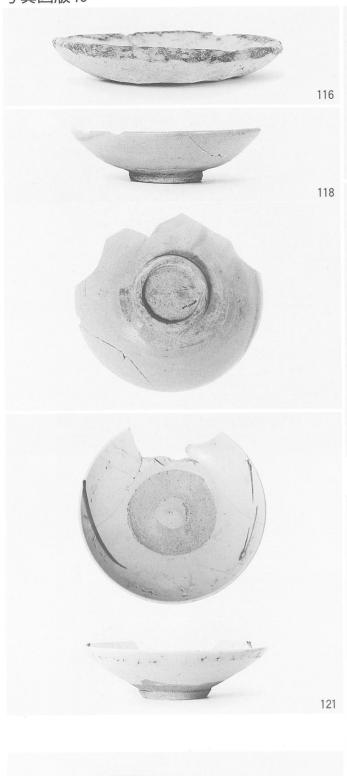
















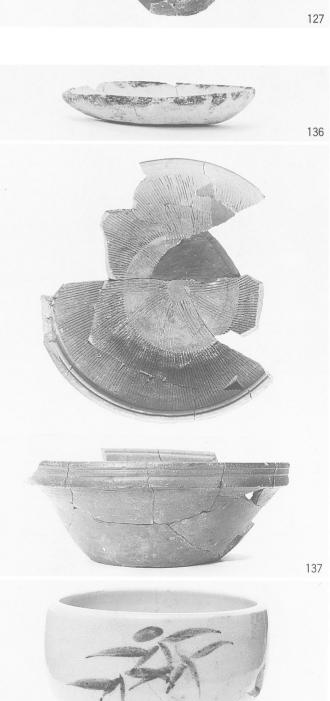




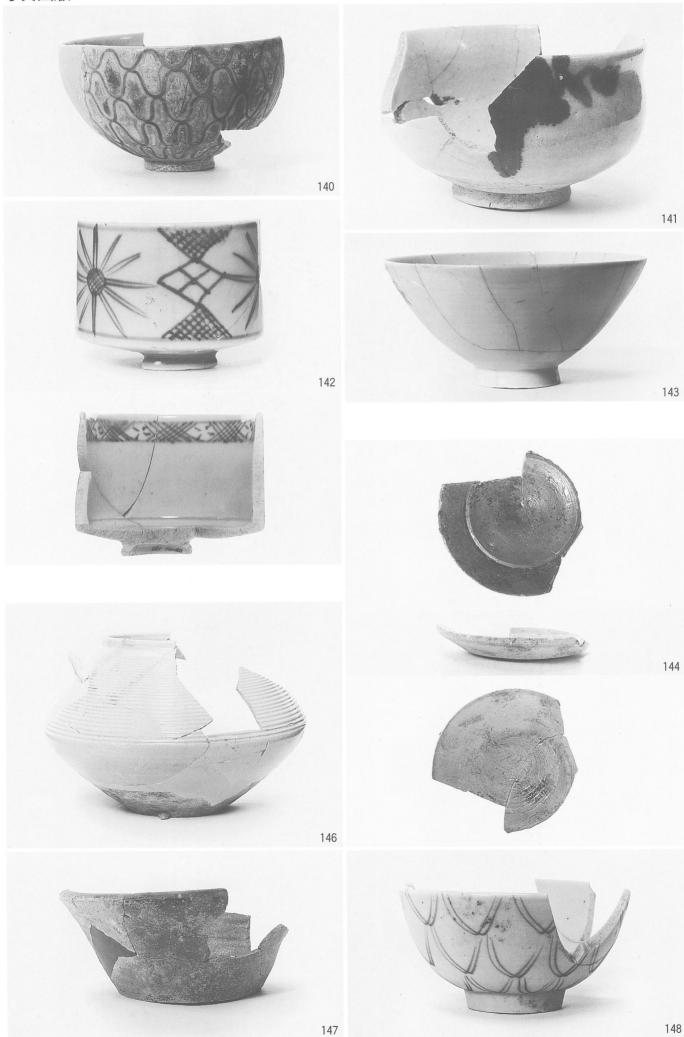


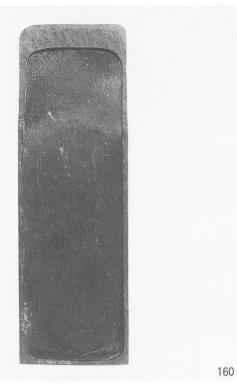




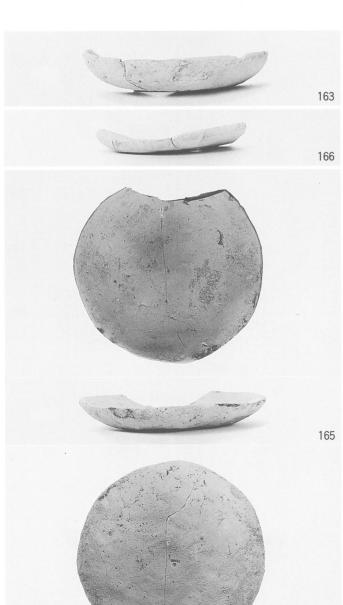


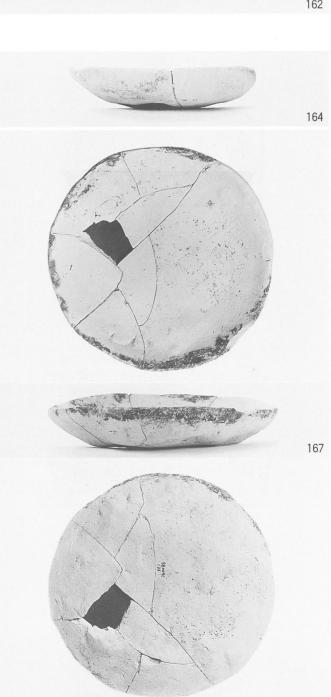


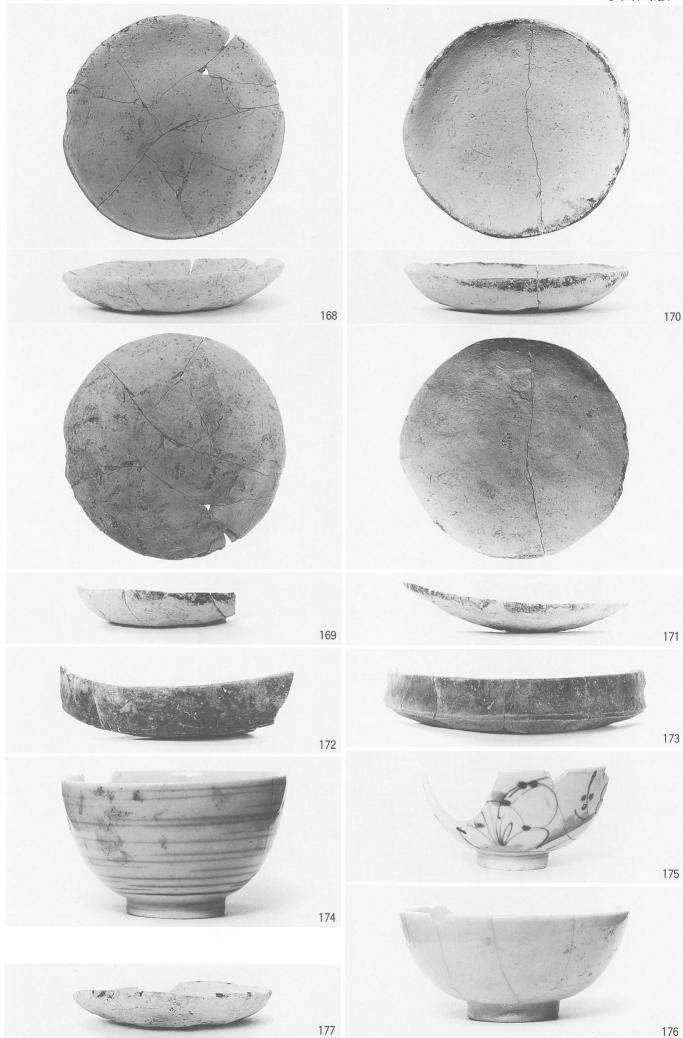












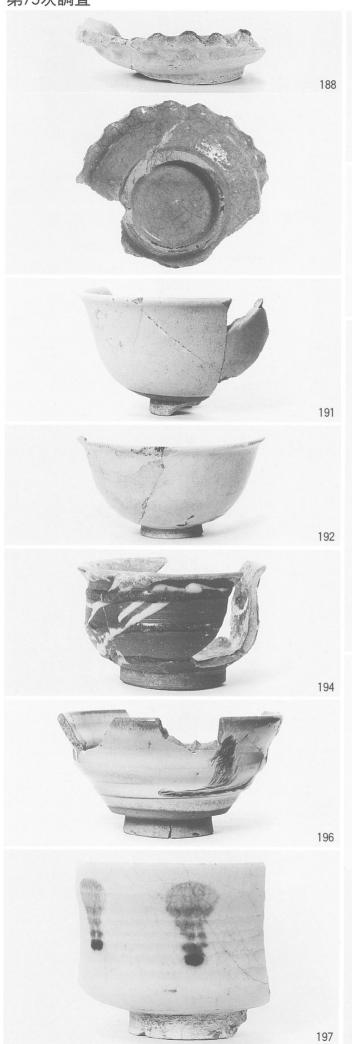










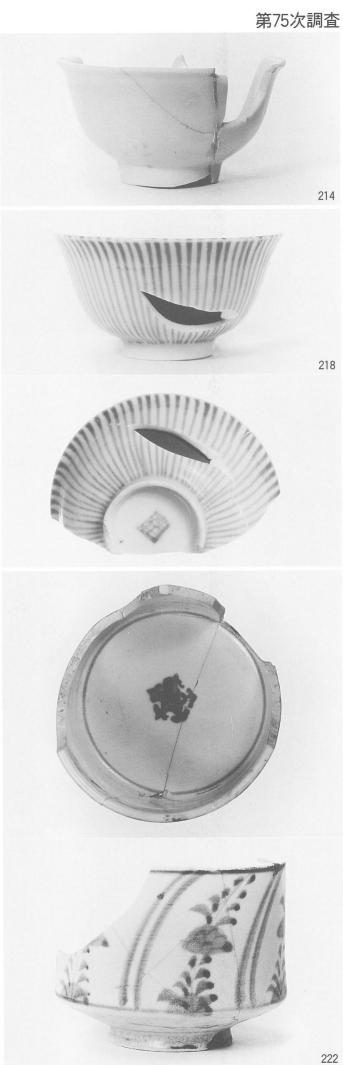








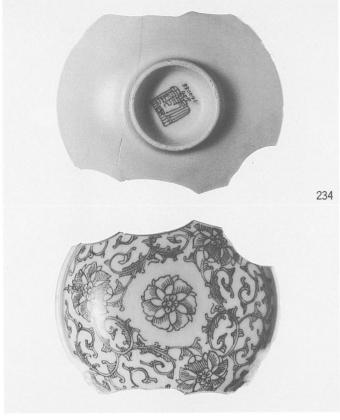


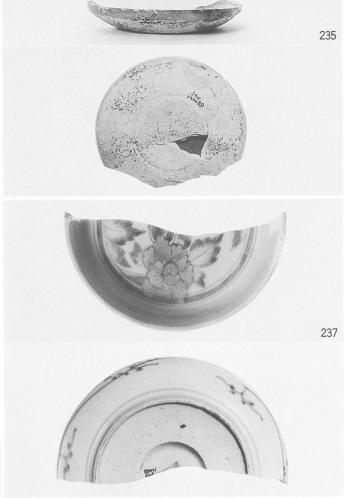




231

第75次調査





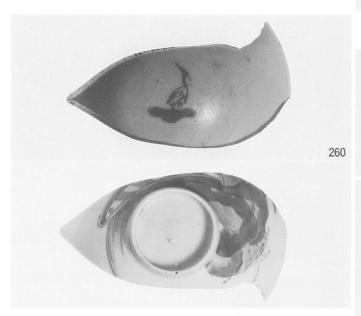










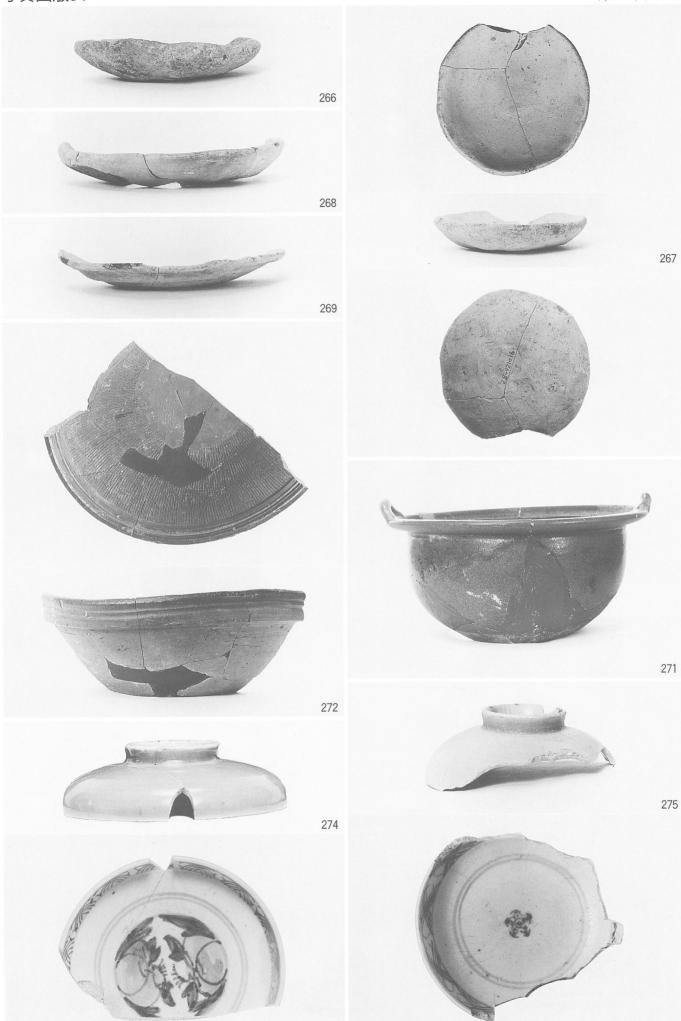


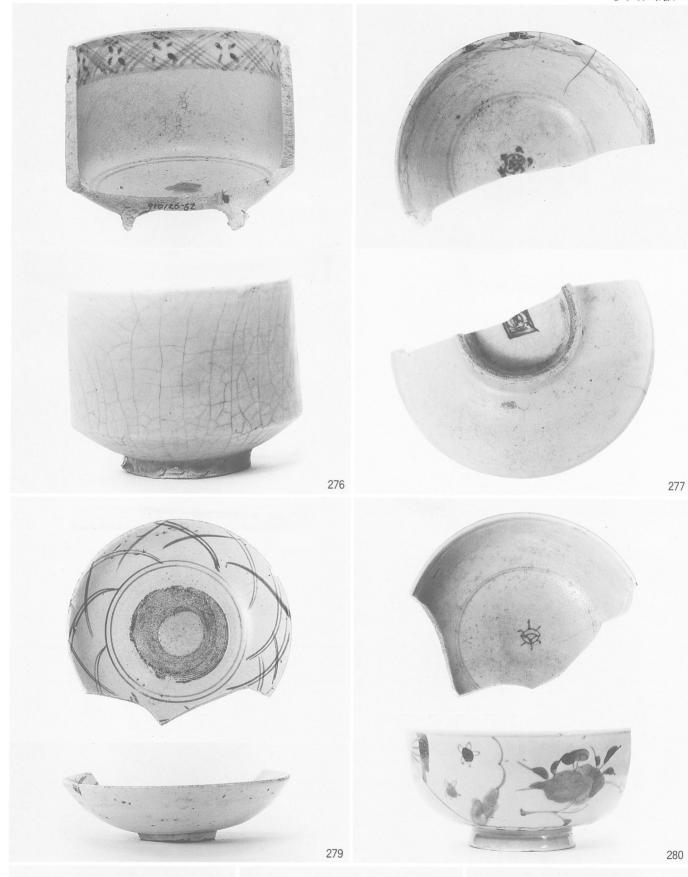








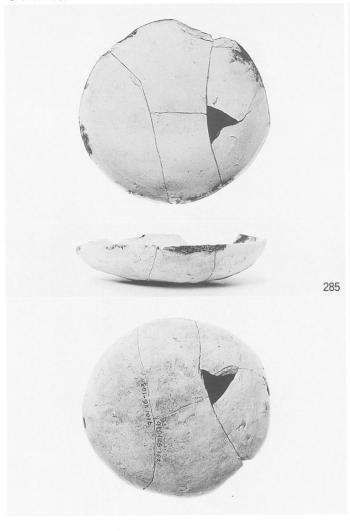




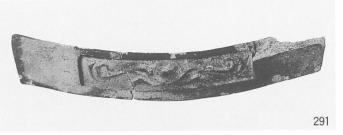
















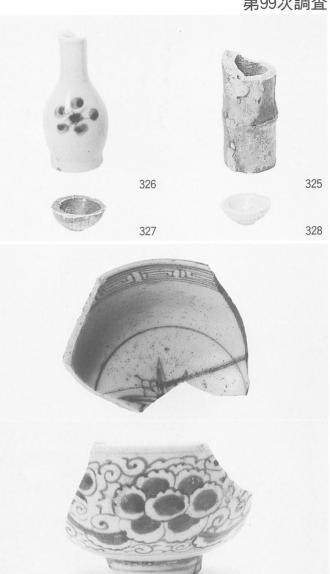


303

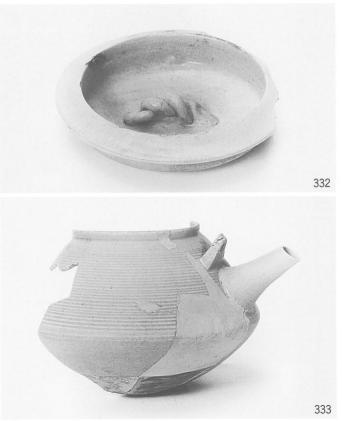


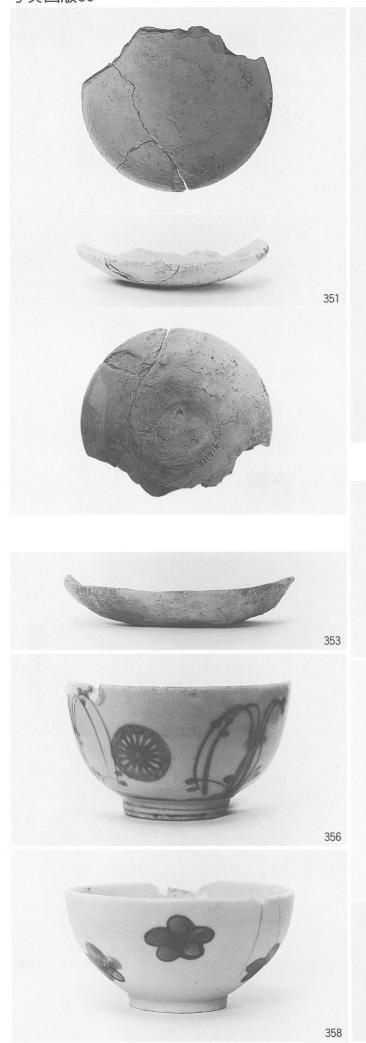
写真図版58 第99次調査













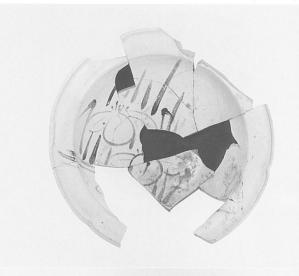






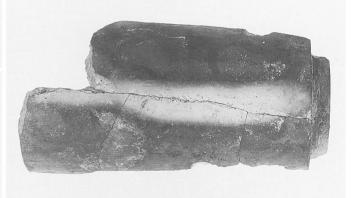


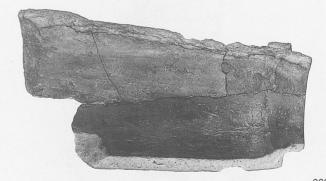












写真図版62 第114次調査







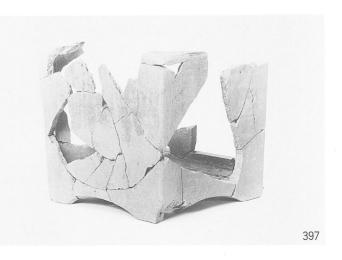


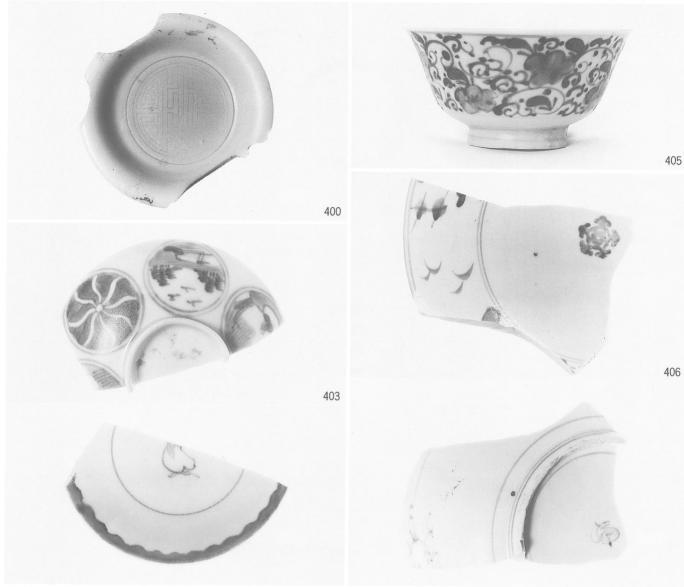












兵庫県文化財調査報告 第164冊

有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ

平成9年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会 〒650神戸市中央区下山手通1丁目10番1号

印 刷 交友印刷株式会社 〒652 神戸市兵庫区水木通9丁目1-34